

山陰地方の弥生集落像

The Image of the Yayoi Settlement in San'in

濱田竜彦

HAMADA Tatsuhiko

はじめに

- ①大山北西麓における弥生時代遺跡の動態
- ②妻木晩田遺跡の概要と分析の方法
- ③妻木晩田遺跡における竪穴住居群の変遷
- ④妻木晩田遺跡の集落変遷
- ⑤まとめ－妻木晩田遺跡の集落像素描－

おわりに

【論文要旨】

大山山麓では、弥生時代前期後葉頃から丘陵部において遺跡が増えはじめ、さらに中期から後期にかけて緩やかに顕在化する状況を認めることができる。後期には、妻木晩田遺跡に代表される大規模集落跡が丘陵部に形成されるが、前方後円墳が造られはじめる頃から丘陵上の集落は一斉に姿を消し、その後、丘陵部に生活の主体が積極的におかれることは少ない。したがって、弥生時代以降の大山山麓は、古墳群造営、小規模な集落の形成、畑地造成など、多少の削平や攪乱を受けることはあっても、大規模に改変されていない。また、近年は広範囲が調査されている事例が増えており、弥生時代集落の内実を分析するための好条件を備えた遺跡が多い。そこで、本稿では、集落跡を構成する諸要素のうち、居住施設と考えられる竪穴住居跡の分析を中心に、山陰地方の弥生時代後半期を代表する大規模集落跡として知られる妻木晩田遺跡を検討して、集落変遷、集落像の復元を試みた。

妻木晩田遺跡には、複数の小集団の集合体として認識される複合型集落が、長期的に営まれている。今回、後期から終末期の土器を細分し、竪穴住居跡の埋没状況を詳細に検討しながら居住域の変遷を再考したところ、妻木晩田遺跡に営まれていた集落は規模や形が絶えず変化しつづけており、その変遷は一様ではないことがわかった。小集団の集合体であることは間違いではないものの、途中で断絶していた可能性のある居住域が複数認められた。したがって、複数の小集団が密に集住するのではなく、丘陵上に散漫に展開していた時期もあると考えられる。また、最盛期と考えられる後期後葉をへて、終末期前半に居住が断絶していた地点がある。終末期後半には表面上、後期後葉以前とよく似た集落が再生されているが、その後は大規模な墳墓群の造営も行われなことから、終末期前半を介して、集団が質的に変容していたと考えられる。

【キーワード】 大山、妻木晩田遺跡、大規模集落、複合型集落、竪穴住居跡、黒色系土壌

はじめに

本稿では、弥生時代の地域社会、集団社会像を考察するための基礎作業として、居住域を構成する主たる要素である竪穴住居跡のあり方から、山陰地方の弥生時代後半期の大規模集落跡⁽¹⁾にみる集落像を検討する。対象とするのは鳥取県西部、大山山麓に所在する妻木晩田遺跡（鳥取県米子市・西伯郡大山町）である。近年、当該地域では弥生時代の集落跡に関する調査事例が多く蓄積されている。その中でも妻木晩田遺跡は居住域が広範囲に調査されており、集落像の検討に好条件を備えている。以下、大規模集落が成立にいたる当該地域の集落動態を概観した後、竪穴住居跡にみる居住域の消長にかかる分析を通じて、妻木晩田遺跡の変遷と集落象の復元を試みたい。

①……………大山北西麓における弥生時代遺跡の動態

妻木晩田遺跡の成立にいたる歴史的環境として、大山北西麓における弥生時代遺跡の増減、そして立地と動態⁽²⁾について概観する。ここでは、弥生時代前期をⅠ期、中期前葉をⅡ期、中期中葉をⅢ期、中期後葉をⅣ期、後期をⅤ期、終末期をⅥ期とし、Ⅰ期を3細分、Ⅲ期を2細分、Ⅳ期とⅤ期を3細分、Ⅵ期を2細分し、遺跡の増減と立地を整理した(図1)。また、立地については、地形と可耕地(推定)からの比高差をもとに低所立地と高所立地に大別、前者を2細別(低所A：比高差のほとんどない段丘や微高地、低所B：比高差のほとんどない段丘から丘陵斜面)、後者を3細別(高所A：最小比高差が10 m以上の丘陵、高所B：最小比高差が40 m以上の丘陵、高所C：最小比高差が70 m以上の丘陵)⁽³⁾した。

(1) 遺跡数の変遷について

図1下段のグラフは当該地域における弥生時代遺跡の増減をまとめたものである。Ⅰ-1・2期からⅠ-3, 4期にかけて遺跡数が倍増しているが、これは農耕の受容と定着による人口増を背景とした集落の分立を表すものだろう。ところが、Ⅱ期になると遺跡数が半減する。当該地では、Ⅱ期の遺構、遺物をⅠ-1・2期から継続する遺跡や遺跡群に認めることができるが、Ⅰ-3・4期に営みが始まった遺跡には認められないことが多い。前段階に分立した集落が、草分け的な集落、拠点的な集落に集約されている様子がⅡ期にうかがわれ、1つめの画期を設けることができる。そして、Ⅲ期以降、遺跡数は再び増加に転じ、Ⅴ-3期をピークに緩やかな下降をたどるようだ。

なお、この間、Ⅳ-3期とⅥ-1期の2時期にも遺跡数が減少しているが、「Ⅳ-2期→Ⅳ-3期→Ⅴ-1期」、「Ⅴ-3期→Ⅵ-1期」における土器型式の変化は緩やかで、土器編年上の問題が遺跡数に影響している可能性も否定できない。したがって、実際には遺跡数はほぼ横ばいか、微減で推移していることも予想される。

(2) 集落遺跡の立地と動態について

図1下段のグラフを参照されたいが、Ⅰ-1・2期の遺跡はいずれも低所Aに立地している。集

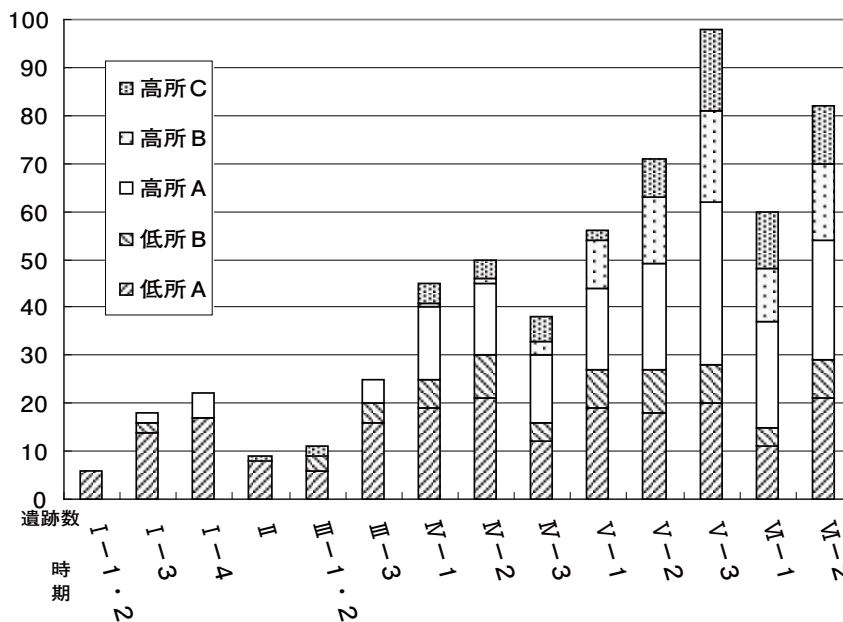
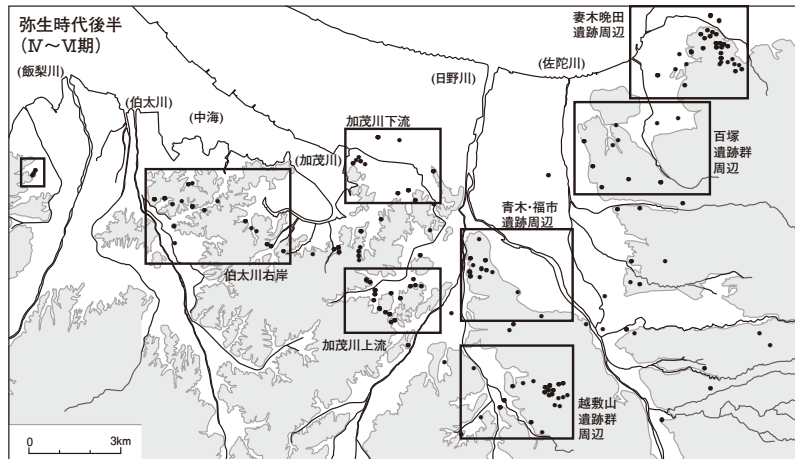
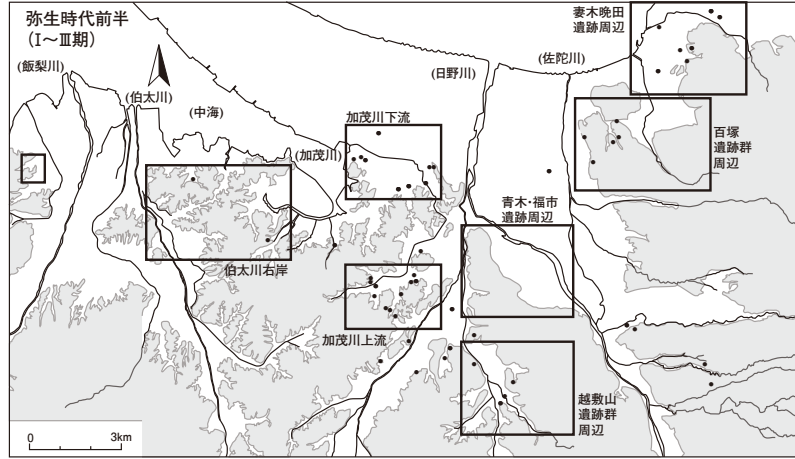


図1 大山山麓にみる弥生時代集落の立地と動態

落の実態は明らかでないけれど、弥生時代前期の集落は低所に軸足をおいて展開していたとみてよい。ところが、Ⅰ－Ⅲ期になると、低所Bや高所Aにも遺跡が点在しており、再び、丘陵部への進出が認められる。なお、低所B、高所Aに確認できる弥生時代前期の遺構は貯蔵穴などの土坑類であり、⁽⁴⁾ 竪穴住居跡などの居住遺構は確認できない。弥生時代における高所への展開は、低所に構えられた居住域を中心に、生活領域の一部として台地や丘陵を利用することにはじまるようだ。

また、Ⅱ期には、遺跡数の減少にともなって一時的に高所に立地する遺跡がみえなくなるが、その後、Ⅲ－Ⅲ期には遺跡数の増加とともに、高所に立地する遺跡がしだいに増加する。また、Ⅰ期と違って、Ⅲ期以降は居住の場として丘陵部の利用がはじまっている。特に、Ⅳ－Ⅰ期には高所Aに立地する遺跡が著しく増加しており、その後は高所Aに立地する遺跡が全体の3割程度を占める。また、Ⅳ－Ⅲ期になると低所と高所の比率が逆転し、さらに高所B、高所Cがそれぞれ全体の2～4割を占めるようになる。

一方、低所A・Bの比率は弥生時代を通じて低下しており、Ⅳ－Ⅲ期以降は全体の2割前後を推移する。ただし、実数の変化をみると、低所には弥生時代を通じて一定数の遺跡が常に存在している。つまり、低所には普遍的に集落が立地しており、高所を指向する動きは、単純に遺跡数の増加との相関性を反映したものといえそうだ。しかも、高所に立地する遺跡は弥生時代を通じて緩やかに増加しており、社会的緊張関係の発生を読みとれるほどの激しい変化は看取できない。

V期に至り丘陵上に大規模な集落遺跡が形成される妻木晩田遺跡[岩田他2000、松本他2000など]、越敷山遺跡群[鳥取県西伯郡伯耆町・南部町、中原他1994]などに、その草分けとみられる居住域が現れるのもⅣ期である。Ⅳ期の遺跡が立地する丘陵下には、その前段階の土器をとまなう遺跡が認められる場合があり、低所に営まれた集落から分立した集団が丘陵上に新たな居住域を形成している様子がうかがわれる。なお、丘陵上に立地するⅢ期～Ⅳ期の集落の規模は、数棟の竪穴住居で構成される小規模な単位集団によって営まれたものが一般的である。

そして、V期になると、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群、青木・福市遺跡群[米子市、青木遺跡発掘調査団編1976他]など、中期までの集落との比較において圧倒的に大規模な集落遺跡が形成される。こうした遺跡では、数棟の竪穴住居で構成される複数の単位集団が同一丘陵上に展開している。1つの単位集団は3～5棟程度の竪穴住居によって構成されており、概ね中期の1集落の規模に相当している。こうした複数の単位集団で構成される集落を複合型集落⁽⁵⁾と呼ぶ。

複合型集落の顕在化とともに墳丘墓の造営がはじまる。妻木晩田遺跡では、V－Ⅰ期に墳丘墓が造営されると軌を一にするように、複数の居住域が丘陵に現れ、複合型集落の体裁が整っていく。妻木晩田遺跡では洞ノ原墳墓群(V－Ⅰ～Ⅱ期)→仙谷墳墓群(V－Ⅱ～Ⅲ期)→不明→(Ⅵ－Ⅱ期)と、墳丘墓群が造営地点を変えながら変遷しており、広範囲に展開する単位集団は墳墓群に埋葬された被葬者(首長層)を紐帯に1つの集団社会を形成していたとみてよい。

ところが、こうした大規模な遺跡を形成する動きが看取される一方で、V期以降は居住の様子が不鮮明になる遺跡群もある。妻木晩田遺跡とは淀江平野を介して西側の台地に所在する米子市百塚遺跡群[岩田他1995、仲田他1995など]には中期に集落が設けられ、連続的な居住が認められるが、その営みは後期に継続していない。継続していても、段階的に集落規模の拡大は認められない。つまり、V期には、Ⅳ期に形成された既存集落の解体・再編、集団の離合・集散といった動きが想定

される。米子市青木・福市遺跡群や越敷山遺跡群のように、妻木晩田遺跡と見た目には同じ大規模な集落遺跡を形づくるけれど、V-1期の遺構・遺物が極端に少なく、IV期からV期への変遷に一時的な不連続が看取可能な遺跡もある。V-1期に、集落規模の拡大・縮小、連続・不連続といった現象が地域の中に混在する状況は、集団社会の再編、首長層の顕現、複合的な集落の形成過程や進度が、各遺跡群で一様ではないことを示唆するものである。

(3) 大山山麓地域における複合型集落の形成について

首長層の台頭を象徴する墳丘墓の造営とともに、複数の単位集団によって構成される複合型集落がV期に成立する。分散的であった単位集団が集合して、より規模の大きな集落を形成するためには、諸集団を結びつける求心力と社会的枠組みが必要である[高田2004]。つまり、中期から後期に単位集団の集合として視覚的に捉えうる複合型集落の成立に象徴される遺跡の面的変化は、墳丘墓の造営開始とともに拡大する集団社会のうつろいを反映している。ここに大山山麓地域における弥生時代集落の変遷史上の大きな画期を見いだすことができる。

なお、複合型集落の形成は丘陵に限った現象ではない。米子市加茂川流域では、V期以降も高所を指向する動きは緩やかで、古市遺跡群[米子市、中森他1998、濱田他1999、中森他2000]、橋本遺跡群[米子市、下江他2003]などではIV期の居住域を核に、扇状地や沖積地に面した段丘に単位集団が展開する。また、島根県安来市の伯太川右岸では、全体としては高所を指向するが、個別には、高広遺跡[安来市、足立他1984]のようにIV期からV期に居住域が低位な場所へと移動している可能性が考えられるものもある。規模の大小を問わなければ、米子城下層遺跡群[米子市、湯村他編1995・1997]、錦町・博旁町遺跡群[米子市、平木1996]にも、V期以降、複数の単位集団が展開しているようだ。丘陵部の状況と重ね合わせると、ここでも近接する単位集団が複合型集落を形成していた蓋然性が高い。島根県出雲平野では、斐伊川下流域に連なる自然堤防等の微高地に弥生時代の遺跡が展開している。複合的な集落の展開は丘陵部に限定できないし、ましてや低所から高所への動きとして一般化できるものではなさそうだ。

島根県出雲市の斐伊川下流域の平野部では、中野三保遺跡、青木遺跡などで、微高地に造営されたIV期やV期の四隅突出形墳丘墓が確認されている。集落の実態は判然としないが、広大で肥沃な平野に、首長層を紐帯に結ばれた単位集団が複数存在していたことがわかれる。これに対し、中海沿岸部や大山山麓地域は、米子平野以外に、複合型集落の形成に適した平野部が少ない。そのため、妻木晩田遺跡等では首長層を紐帯とした複合的な集団社会、大規模集落を営むために適当な環境として、なだらかな丘陵地が選地されていると考えられる。

(4) 丘陵の利用とその動機

出雲地域では平野部、伯耆地域では丘陵部を中心に、単位集団の集合として認識できる複合型集落が形成されていたと考えられる。こうした違いは、各地域の地形や環境に適応してきた地域の伝統などの歴史的背景に求められるのではないか。したがって、集落遺跡の在り方を平面的に見渡したとき、複数の単位集団が集合する複合型集落の成立に表れている面的な動きは、基本的には同じ社会構造の変化を表しているように思われる。当該地域では弥生時代の後半期に丘陵に立地する遺

跡の増加が認められるが、その社会構造の本質を考えるうえで、立地の高低をあまり過剰に評価すべきではなからう。

平野部に面した丘陵部は見晴らしに優れ、防御的には有利な地勢にある。四隅突出型墳丘墓などの造営に象徴される首長権力の発生、鉄器の普及に関係して、鉄素材や鉄器の獲得・生産・流通をめぐる問題などと相まって、後期以降に顕在化する丘陵部の遺跡を社会的緊張関係を背景に高所を指向した軍事的な集落とみることもできよう[丹羽野 2002, 寺澤 2003]。ところが、高所に立地する集落遺跡において、武器類の卓越、見張り場または通信的な機能が特定できる遺構の在り方は判然としない。妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群など、丘陵を拠点とする大規模な集落遺跡にも、軍事的、防御的側面に特化した遺構、遺物が顕在化する状況にはない。

Ⅳ-3期以降、確かに高所B・Cに立地する居住域の増加が認められる(図1下段)。かなり顕著な増加を示すが、これは高所Bや高所Cに居住域が展開する妻木晩田遺跡や越敷山遺跡群の各調査区に押し上げられた見かけの現象であり、高所B・Cに立地する集落遺跡が当該地域に広く一般化しているわけではない。丘陵地の利用は既にⅠ期後半には確立しており、その伝統的な土地利用の中で丘陵地における居住域の展開が現象化しているとみるべきだろう。低所にも一定量の遺跡が弥生時代を通じて認められるし、丘陵部への展開も緩やかで、首長層の顕在化や鉄器の普及と連動する社会的な緊張関係の発生を遺跡の動態から読みとめることは難しい。

なお、このことは社会的緊張関係が高所立地の背景となる重要な要素であることを否定するものではない。高所に居住することは、防衛的な意識の有無にかかわらず、非常時にあっては防衛に優れた環境にあることは事実である。ただし、当該地域における長期的な立地の変化を踏まえるならば、高所への展開には集落の生活の基盤をなす動機にも注意を向ける必要がある。妻木晩田遺跡では、洞ノ原地区西側丘陵、妻木山地区、松尾頭地区の発掘調査時に竪穴住居跡の中央土坑埋土を水洗して取り上げられた微細遺物の中に、炭化したアワ、ヒエ、マメ類などの雑穀類が多数検出されている[濱田編 2003, 馬路編 2006, 君島編 2008]。遺構として畑は確認されていないが、居住地の縁辺部では雑穀栽培が行われていた可能性がある。

妻木晩田遺跡の場合、複数の集団で構成される複合型集落が長期的な営みを実現する戦略として、丘陵下の低地や谷部に水田を営み、海岸線にも近く、漁労活動などの多様な生業も可能な地勢にある、この丘陵を選地したものと考えたい。

②……………妻木晩田遺跡の概要と分析の方法

大山山麓に分布する弥生時代遺跡の動態を通じて、中期末から後期のはじめに妻木晩田遺跡に代表される大規模集落が成立する様子を概観した。また、こうした動きと連動するように墳丘墓の造営が開始されており、首長層の顕在化と大規模で複合的な集落の形成は相関的な関係にあることがうかがわれる。では、首長層を紐帯として成立した複合的で大規模な集落は、その後どのような変遷をたどっているのだろうか。ここでは、妻木晩田遺跡の検討に必要な時間軸、及び竪穴住居跡の新旧関係や居住域の消長を分析するために必要な属性として、竪穴住居跡を埋める土について触れておく。



図2 妻木晩田遺跡

(1) 妻木晩田遺跡の概要

既に様々な形で紹介されているので、ここでは簡単に遺跡の全体像をまとめるにとどめるが、先ほどから述べているように、妻木晩田遺跡は丘陵上に展開する弥生時代後半期の集落遺跡である。大山北西麓にあり、大山の寄生火山の1つ孝霊山から海岸に向かって派生する、なだらかな丘陵の端部に集落が設けられている。弥生時代中期後葉に草分け的な集団が現れ、後期に形成された複合型集落が古墳時代前期前葉まで継続的に営まれている。

遺跡の広がりには170ha以上におよぶ。谷地形に隔てられた6つの小丘陵はかつて個別の遺跡として認識されていたが、現在は、それらを一括して妻木晩田遺跡と称しており、各丘陵を便宜的に妻木山地区、洞ノ原地区、松尾頭地区、松尾城地区、妻木山地区、仙谷地区と呼んでいる(図2)。既に丘陵の尾根部を主体に遺跡全体の約1/10程が調査されている。居住域の多くは丘陵尾根部に展開しており、主要な居住域についてはかなり広範囲の様子が明らかになっている。また、遺跡内に墳墓群も検出されており、居住関連遺構と墳墓群の位置的、時間的關係も把握可能であることも、集落の検討に好適な条件を備えている。

ところで、当初、妻木晩田遺跡は機能分化した山上の大規模集落として語られてきた[佐古1999・2003]。こうした評価は、大規模な発掘が進捗する過程で、それまで個別の遺跡とされてきた各調査地区が実は有機的に結びつき、一定の領域を占有する1つの遺跡群、集落跡であるという認識を得る契機となった。しかし、妻木晩田遺跡が内包する情報が十分に整理されないまま、遺構の累積のみが一面的にとらえられているため、奥行きのない集落像の提示にとどまっている。妻木晩田遺跡には、実年代にして200年以上の長い営みがあり、いくつもの顔つきの違う集落が重層しているはずである。その累積結果だけを評価しても集落の実態を適切に表現することは困難であろう。

その後、妻木晩田遺跡の調査や史跡整備などに関わった筆者、高田健一、高尾浩司、馬路晃祥などが妻木晩田遺跡の集落景観復元を目的に、妻木晩田遺跡の集落像について検討を行っている。全てに見解が一致しているわけでもないが、大規模な集落跡の実態が小集団の集合体であること、計画的な機能分化が読みとれるものではないことなどについては、概ね共通した認識であろう[濱田2003・2004・2006、高田2004・2005・2006、高尾2006、馬路2006]。ただし、筆者等の検討に対して批判的な見解もあり[藤田2005]、今しばらくの間、適宜、集落像の見直しが必要である。

(2) 時間軸の設定

前節では後期を3小期、終末期を2小期に細別し集落の立地と動態を整理したが、妻木晩田遺跡の集落変遷については、できる限り短い時間幅で竪穴住居跡の消長を捉えたい。近年、後期前葉と中葉について、それぞれ2細分できる見通しがたってきた[松本他2000、濱田2002]。また、資料の増加によって後期後葉を2細別することも可能と考える。本稿では筆者の編年試案を時間軸とし、後期を6小期(第3図)、終末期を3小期、古墳時代前期初頭を1小期(第4図)とし、都合10期の時間軸を設ける。以下、甕・壺の口縁部形態の変化を中心に各期の特徴をまとめておく。

1期(V-1期古段階) 中期の土器の特徴が色濃く残る。甕・壺ともに内面のケズリ調整の上昇をもって中期後葉の土器と区別する。ケズリ調整がほぼ頸部直下にまでおよぶ段階である(図3-1・

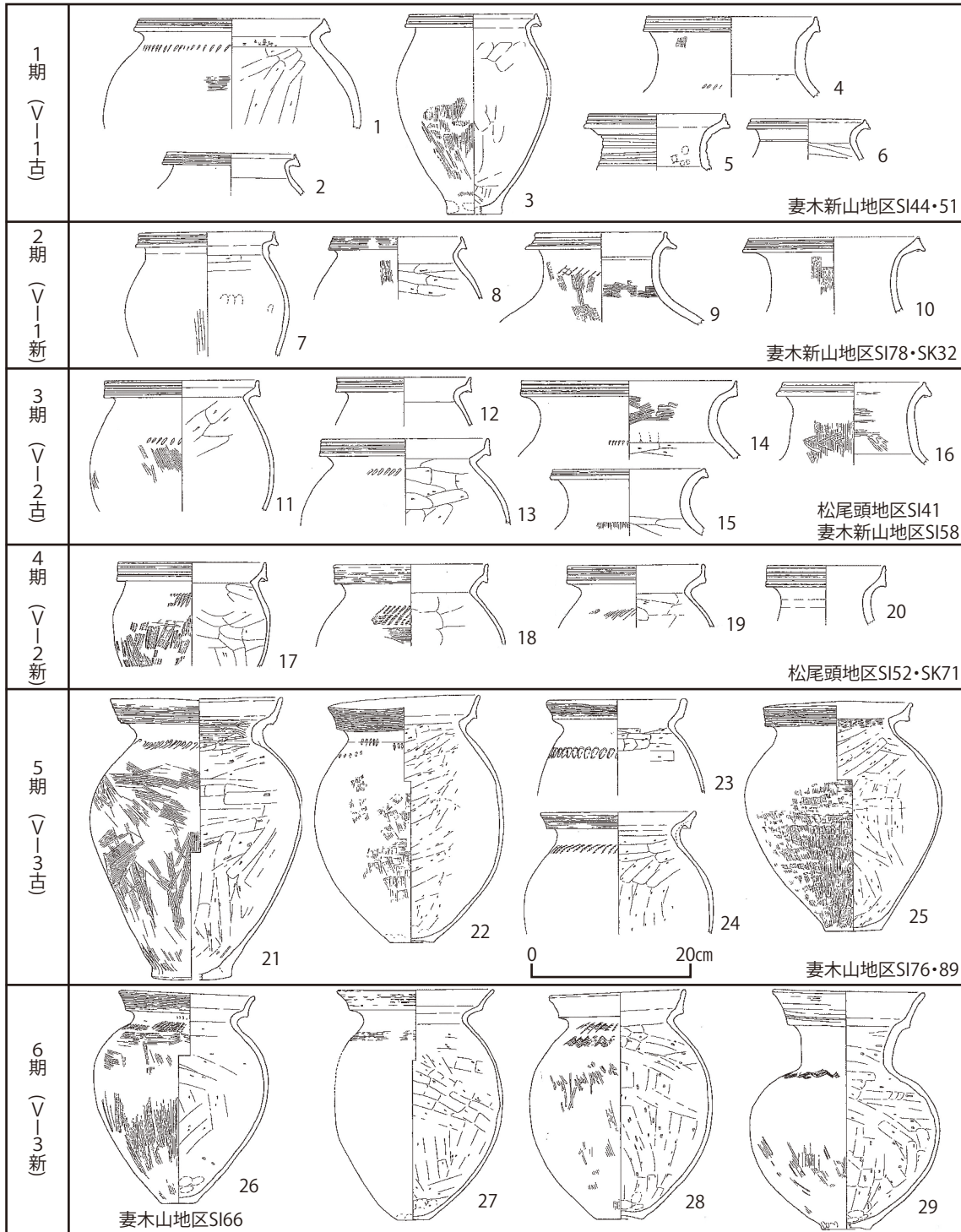


図3 弥生時代後期の土器

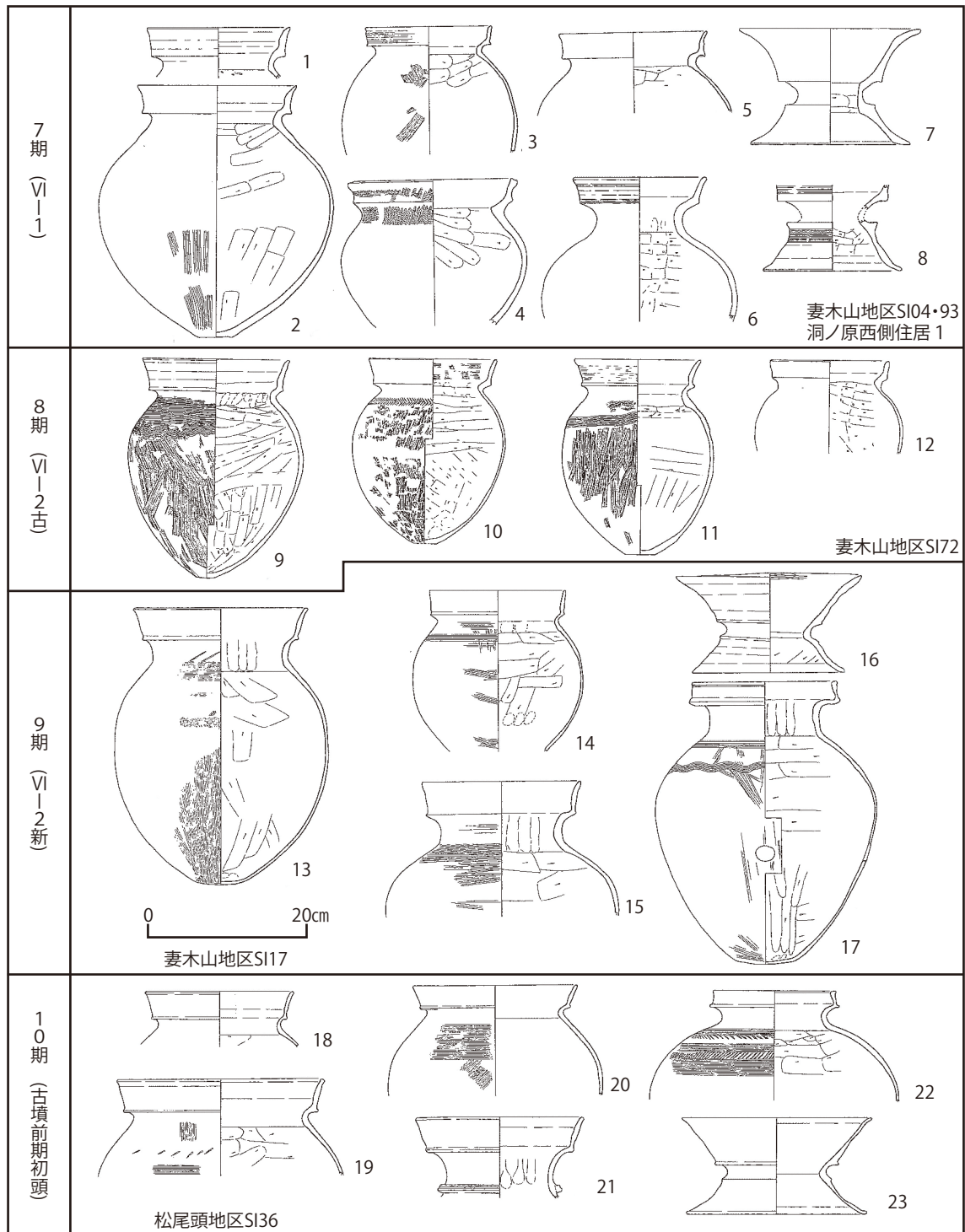


図4 弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の土器

4～6)。頸部の屈曲部にまではケズリがおよばず、頸部下数cmをナデ調整するものもある(2・3)。口縁部は内傾し、口縁部が上下方向、ないしは上方に短く拡張する。口縁部には凹線ないし沈線文が2～4条程度施される。頸部にヘラないし棒状工具、またはハケメ状工具による刺突文が施されるものがある(1)。

2期(V-1期新段階) 特に甕において、口縁部上端部の拡張が進む(図3-7・8)。また、内面のケズリが頸部の屈曲部に達する(8)。

3期(V-2期古段階) 口縁部がほぼ直立し、複合口縁が成立する(図3-11～13)。やや内傾気味の口縁部もある(11)。壺は中期的な雰囲気を残すが(15・16)、甕は口縁部の直立にともなって、中期的様相が希薄になる。口縁部が外傾気味のものが既に僅かに存在している。口縁部の拡張にともない、平行沈線文が多条化する傾向にあり、甕に5条以上の沈線が施されたものがある。頸部や肩部に施されるのは、1・2期同様にヘラないし棒状工具、またはハケメ状工具による刺突文である(11・13)。

4期(V-2期新段階) 甕・壺ともに口縁部が直立するか、またはやや外傾気味のものが主体を占める(図3-17～20)。3期よりも口縁部の平行沈線文は多条化の傾向にあり、ハケメ状工具の使用も認められるようになる。頸部や肩部にはヘラないし棒状工具、ハケメ状工具による刺突文が認められる(17・18)。

5期(V-3期古段階) 口縁部の拡張、沈線文の多条化が進む。ハケメ状工具や二枚貝による多条平行沈線文が主体化するのにともない、外反傾向にある口縁部が多くなる。また、口縁部は外傾するものが主体的である(図3-21～25)。頸部や肩部にはヘラないし棒状工具による刺突(21～23)、また、口縁部にも用いられているハケメ状工具や二枚貝による刺突文が認められる(24)。

6期(V-3期新段階) 口縁部の拡張、外反、沈線の多条化がピークを迎える(図3-26～29)。一方、二枚貝などで多条沈線文を施文後、ナデ消しを行うものも現れ、口縁部の無文化がはじまる(28)。二枚貝などを用いて波状文を施すものもある。頸部・肩部にはハケメ状工具や二枚貝による刺突に加え、押し引きを施したり、波状文を施したりするものがある(26・28・29)。

7期(VI-1期) ハケメ状工具や二枚貝などによる多条の平行沈線文や波状文が施されたものも認められるが(図4-3・4)、横ナデのみで仕上げられるものが増加、口縁部の無文化が著しい(1・2・5・6)。口縁部は外傾するものが主体を占め、端部が尖り気味のものが認められる(1・2・5)。頸部や肩部には波状文が施されたものがある(4)。また、7期以前にも組成に含まれている鼓形器台の脚柱部が短化(7・8)することも6期と7期を分ける指標となる。

8期(VI-2期古段階) 口縁部が無文化し、一様に横ナデ仕上げされる(図4-9～12)。口縁部がかなりシャープな感じを帯びる。肩部にはハケメ状工具による波状文(9)や平行に全周するハケメ(11)が施されるものが認められる。また、ハケメ状工具による羽状文がめぐるものがある(10)。底部は狭小になり、丸底を指向する(9・10)。既に自立は難しい。器台の脚柱部はさらに短化し、くびれ状を呈す傾向にある。

9期(VI-2期新段階) 器壁が薄く作られる。口縁部は横ナデで仕上げられ、端部は丸味を帯びる。口縁端部を押さえるように形状を整え、やや面取り気味で、端部が外に張り出すものも認められるようになる(図4-13)。肩部にはハケメ状工具によって平行に全周するハケメが施される(14)。間延

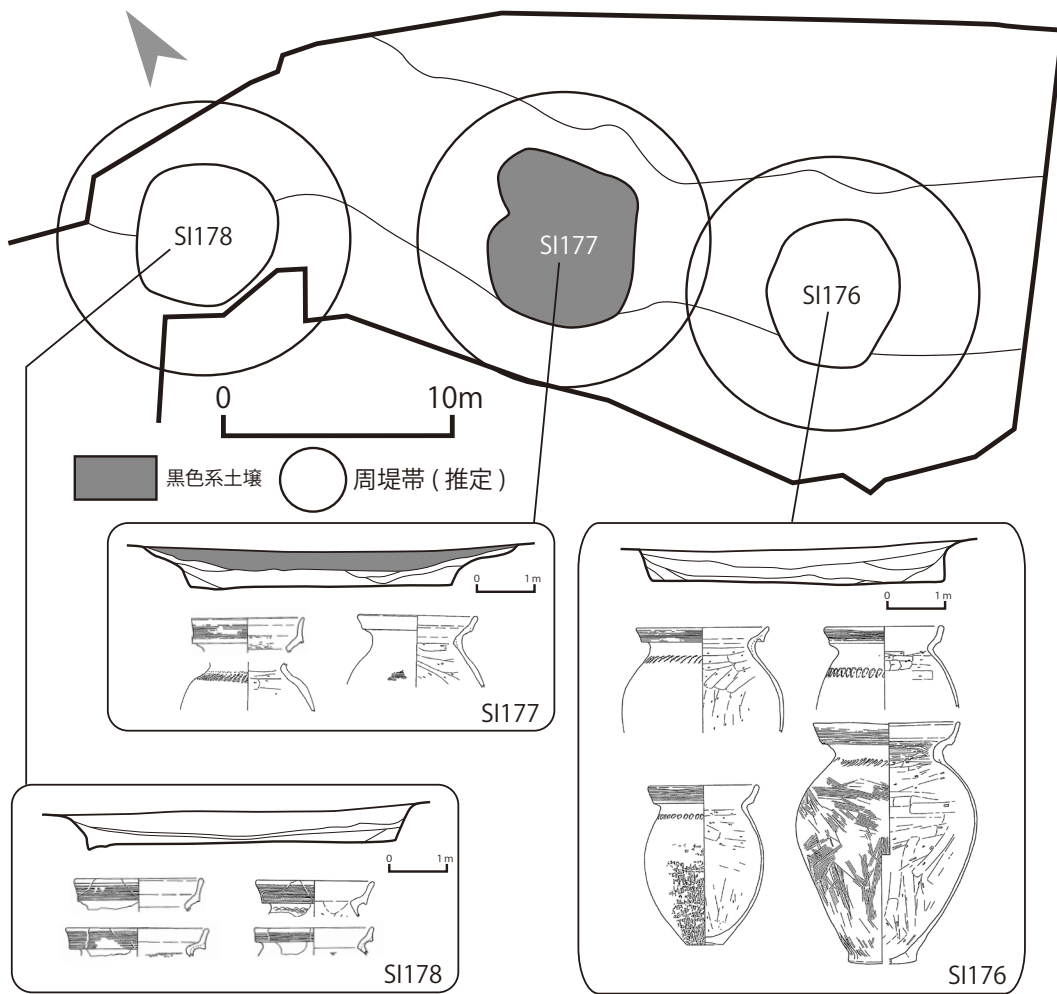


図5 妻木山地区7区の竪穴住居跡(6期)と黒色系土壌

びした波状文が組み合うものもある(17)。底部はほぼ丸底を呈す(13・17)。器台は脚柱部の短化が進むが、内面に脚柱の痕跡を僅かに残すものが認められる(16)。

10期(古墳時代前期初頭) 口縁部が横ナデで仕上げられる点は変わらないが、口縁端部の面取りが明瞭になる(図4-18・19)。肩部には平行にハケメが施される(19・20)。波状文はかなり間延びしている。ハケメ状工具やヘラ状工具による刺突文が施されたものもある(22)。また、壺の頸部に凸帯を伴うものが現れる(21)。胴部が球胴化し、底部は丸底を呈す。器台の脚中部は形骸化が進む。内面も脚柱の痕跡が失われ、断面形はV字状を呈すものが現れる(23)。

(3) 竪穴住居跡を埋める土

妻木晩田遺跡の竪穴住居跡には褐色系の土壌が堆積するものと黒色系の土壌が堆積するものがある。妻木晩田遺跡では、これまでに400棟以上の竪穴住居跡について情報が蓄積されており、上層に褐色系土壌が堆積する竪穴住居跡よりも、上層に黒色系土壌が堆積している竪穴住居跡の方が後に埋没したものである可能性が高いことが指摘できる[馬路・濱田2003]。

妻木晩田遺跡の妻木山地区7区(図2-j)では5・6期に埋没した3棟(SI176・177・178)の竪穴住居跡が検出されている[馬路2006]。このうち竪穴部の周囲に想定される周堤帯(2~3m)⁽⁷⁾が接するSI176とSI177は併存を考えにくい(図5)⁽⁸⁾。SI176とSI178には5期の特徴を有する土器、SI177に

は6期の特徴を有す土器が包含されており、SII76とSII77に前後関係があることは間違いない。そして、5期に埋没した2棟の竪穴住居跡の上層には褐色系土壌、6期に埋没したと竪穴住居跡には黒色系土壌が堆積しており(図5)、SII76とSII77の新旧関係は上層に堆積した土壌の色にも反映されている。同じ居住域内ある竪穴住居跡の新旧関係をうかがううえで有効な情報と考えられよう。

① 黒色系土壌の生成

大山山麓における黒色系土壌の代表は黒ボクと通称される火山灰に由来する土壌である。黒ボクとは、腐食に富んだ土壌で黒色または黒褐色や黒灰色をしている。その名の通り、ホクホクとした感触のものもある。妻木晩田遺跡にも丘陵の各所に黒ボクの堆積が認められる。

ところで、黒ボクの生成には、降り積もった粒子の細かな火山灰が、雨の多い気候条件下で洗脱と風化を受ける必要がある。洗脱・風化作用によって、火山灰に含まれているアルミニウムが植物遺体の分解の過程で生じる腐食と結合して、分解されにくいAI-腐食複合体を大量に蓄積する。このAI-腐食複合体が黒ボク特有の黒色の原因と考えられている[久馬2005]。火山灰の降り積もった丘陵を開削して営まれた集落遺跡、また、火山灰層を基盤とする地面に掘削された遺構は、埋没の過程で風雨によって洗脱・風化作用を受けた火山灰が堆積しやすい環境にある。

黒ボクの生成に必要な植物の腐食は、ススキやササなどの草原植生から供給される。湿潤な温帯に位置する日本列島は森林植生を極相としており、黒ボクの生成には、森林植生に遷移する前段に草原植生が一定期間維持されていなければならない。皆抜された森林は、その後、森林が再生される過程で草原植生が形成され、しばらくの間、黒ボクが生成されやすい環境にある。長らく森林下におかれてきた火山灰土は黒色を呈さないことも知られており、黒ボクは人間の働きと密接に関連した土壌であると考えられる[久馬2005]。

考古学の立場からも、黒ボクが遺跡の所在を示す目安となることが指摘されている[小林2001]。これは、火山灰を基盤とする地面を覆う森林植生に人為等の外的なインパクトが加わることで、黒ボクの生成が促されていることに着目したものである。外的なインパクトには落雷による山林火災などの自然現象も想定できるが、人の生活の痕跡である遺跡を覆う黒ボクは、多くの場合、人為的に開かれた空間に生じた草原植生のもとに生成されたものだろう。

つまり、妻木晩田遺跡の弥生時代の竪穴住居跡にともなう黒色系土壌は、竪穴住居跡が埋まった後に、その付近が草原植生に覆われたことを示す痕跡である。丘陵地に展開する妻木晩田遺跡の場合、森林を開削して営まれた居住域が一時断絶したり、廃絶した後、裸地に近い環境から森林植生が回復するまでの間に草原植生が形成される可能性が高い。このとき地表面に露出している火山灰層が洗脱・風化作用を受ける過程で草原植生から供給される植物の腐食によって黒ボクとなり、竪穴住居跡の痕跡に堆積したのと考えられる。

② 谷部を埋めた黒色系土壌

妻木山地区と妻木新山地区をつなぐ谷部に設定したトレンチには、弥生時代後期を中心とする土器を包含する褐色系土壌の上に古墳時代前期の土器を包含する黒色系土壌が堆積していた[濱田他2004]。弥生時代後期の土器を包含する褐色系土壌は、弥生時代後期の遺構が構築される基盤とな

る火山灰層を母胎としたもので、付近に開かれた居住域から流出した土砂が堆積したものと考えられる[高田・渡辺 2006]。森林を開削して設けられた居住地は広く裸地化するため、その間は、生活面に露出した火山灰層が流出しやすい。

また、この上部に堆積した黒色系土壌中に含まれていた炭化物には、AMS年代測定によって、7世紀代の年代が得られたものがある[高田・渡辺 2006]。古墳時代中期以降の遺物は出土していないが、古墳時代前期以降、周辺の丘陵に古墳が造営される期間を経て、徐々に堆積したものと考えられる。黒色系土壌の堆積によって、この調査区の付近には、長期の間、草原植生が形成されていたことがうかがわれる。さらに、プラントオパールや花粉の分析によって、調査区周辺の丘陵斜面などにはアカマツが分布しており、クスノキ科やシイ類の常緑広葉樹、ナラ類などの落葉広葉樹が混生していたこと、調査区の周囲にはササ類やヨモギなどのキク科草本が繁茂し草地をなしていた可能性が高いことが指摘されている。

谷部のトレンチにあらわれた堆積は、周囲で人間の活動が活発な期間に堆積した土壌は褐色を呈し、その後、人の関与が希薄になると黒ボクが厚く堆積していることを示す好例である。本稿では、こうした人間の諸活動にともなう環境の変化と、それにともなう土壌の堆積に着目して、居住域の連続性を考えてみたい。

③ 堅穴住居跡を埋める土

なお、妻木晩田遺跡の堅穴住居跡の大半は褐色系土壌によって埋没している。単純に考えれば、黒ボクが生成されにくい条件下にあったことになる。主要な要因に次の2つのことが考えられよう。

1つは、遺構を埋める土が風雨による洗脱・風化を受けていない状況である。この場合、火山灰中のアルミニウムは解放されないで、後に植物の腐植の供給源となる草原植生が形成されても、黒ボクは生成されないだろう。人為的な埋め戻しによる堆積はこうした条件を備えている。

もう1つは、埋没過程にある堅穴住居跡の周辺に草原植生が形成されていない場合である。埋没過程にある堅穴住居跡の周辺で居住が継続しているなど、草原植生が十分に発達しない環境にあることが想定される。その周囲は裸地に近い状態にあると考えられ、堅穴住居跡内に風雨の影響によって2次的な堆積が自然に進む。このとき、洗脱・風化作用によってアルミニウムが火山灰から解放されたとしても、裸地に近い状態では植物の腐食という条件が十分に整わないので、黒色の原因をなすAI-腐食複合体が生成・蓄積されないだろう。

当然、キク科やイネ科の草本類が存在することは想像に難くないが、草原化しておらず、AI-腐植複合体を生成するのに十分な植物の腐植が供給されない環境下では、洗脱・風化作用を受けた土壌が堅穴住居跡内に堆積したとしても黒ボクは生成されにくい。また、自然堆積の速度が速く、周辺に草原食性があっても、黒ボクが生じる前に次々と周辺から土壌が供給された場合には黒ボクは生成されにくい。先に事例として紹介した谷部のトレンチに認められた弥生時代後期の褐色系土壌などはこの類である。したがって、黒ボクの堆積はすぐに生じるものではなく、植物の腐食を供給する草原食性が安定した状態になるまでの時間を要することが容易に想像される。そのため、堅穴住居跡に黒色系土壌が堆積するためには、一定期間、人の関与が希薄な状態になければならない。

妻木晩田遺跡には黒色系土壌のみで埋没した堅穴住居跡は少ない。多くの堅穴住居跡では、床面から1/2～2/3程度は褐色系土壌で埋まっており、黒色系土壌はその上に堆積している。堅穴住居

が廃棄されると、まずは堅穴部が掘り込まれた基盤層や、堅穴部の周囲に二次的に盛り上げられた周堤から火山灰土が流入したり、または、周堤が突き崩されたり、不要な土が投棄されたりして、埋め戻しされる。多くの場合、黒色系土壌はその後に堆積している。つまり、堅穴住居跡の上層に堆積した黒色系土壌は、褐色系土壌が堆積した後に、黒色系土壌が生成される環境、条件が整ったことを意味するものである。

なお、弥生時代の生活面やその上に堆積した包含層が後世に大規模に削平された場合、その後に草原植生が発達することがあろう。よって、堅穴住居跡の上面を被覆するような黒色系土壌は、堅穴住居跡の廃絶と連続性をもつとは断定はできない。そこで、ここでは堅穴住居跡を埋める黒色系土壌をとりあげる。その堆積時期を特定することは難しいが、堅穴住居跡の中・下層を埋める褐色系土壌と違和感なく連続している堆積であれば、堅穴住居跡の廃絶から埋没に至る一連の流れの中に位置づけ可能と考えられる。

妻木晩田遺跡には、弥生時代の居住域に重なるように古墳が造営されている調査区や、古墳時代後期に小規模な居住が認められる地区もある。周溝などが堅穴住居跡を切る場合もあるが、周辺全体が大規模な改変を受けてはいない。近代になって畑地に開墾されている場所でも、そのことで堅穴住居跡内の堆積が攪乱されたり、影響を受けている様子はない。つまり、堅穴住居跡内部に堆積した黒色系土壌は、堅穴住居跡の廃絶と基本的には連続性をもつものと考えてよい⁽⁹⁾。

以上のことから、妻木晩田遺跡の堅穴住居跡内に堆積した黒色系土壌は、堅穴住居が埋没する過程において、その周囲で人為の干渉が希薄になった期間のあることを示す鍵層とみることができると考えられる。

③……………妻木晩田遺跡における堅穴住居跡群の変遷

次に各地区に設定された調査区別に、1～10期に埋没した堅穴住居跡と黒色系土壌の在り方を整理しながら、居住域の変遷を整理する。なお、報告書中には連続的な拡張などが行われている堅穴住居跡に対し、調査時に2つ以上の遺構名が付されているものがある。ここでは、一度埋まった埋土を掘り込むことで、同一地点に重複するもの(堅穴住居の建て替えに連続性のないもの)を除き、拡張などの連続的な建て替えと判断できる堅穴住居跡については、最終的に埋没した時期を取り上げ、1つの堅穴住居跡として扱った。また、空閑地という用語を使用するが、これは便宜的に堅穴住居跡が分布しない範囲を指すもので、貯蔵施設と考えられる掘立柱建物跡や袋状土抗などの位地を考慮したものではない。

(1) 松尾頭地区

入り組んだ深い谷地形に分けられた2つの丘陵からなる。北側にある丘陵頂部に1区(図2-a)、その南東側にある丘陵に3区(b・c)が第1次調査時に設けられた[松本他編2000]。また、その後、3区を拡張するために4・5・6区が設定されている[君島編2008]。なお、3～6区は東西方向に落ち込む谷地形によって2つの丘陵に分けられる。調査区の西側で尾根が続くが、堅穴住居跡の分布はそれぞれの地形に対応しており、北側(b)と南側(c)の丘陵に展開する堅穴住居跡をそれぞれ別

のまとまりとみなす。

① 松尾頭地区1区

21棟(うち時期不明1棟)の竪穴住居跡が、緩傾斜地に分布している(図2-a・図6-全期)。

1 期 調査区南端の緩斜面にSI23がある。褐色系土壌が堆積している(図6-1期)。

2 期 調査区全体に8棟の竪穴住居跡があり、4地点に2棟1対をなすように分布している(SI01・05, SI08・09, SI11・12, SI16・21)。SI11・12は竪穴部がほぼ接しており、同時併存は考えにくい。SI08・09, SI16・21も同時併存を考えるにはやや近接しており、併存可能なのは最大でも4棟ほどであろう。いずれも褐色系土壌が堆積している(図6-2期)。

3 期 引き続き、調査区東端に2棟の竪穴住居跡(SI02・03)がある。SI02・03は竪穴部が接するようある。埋没しきったSI03をSI02にともなう周堤溝が掘り込んでおり、SI03埋没後にSI02が営まれていることがわかる。3期における竪穴住居の数は、現在、視認できる範囲においては、3期を通じて1棟であった可能性が高い。いずれにも褐色系土壌が堆積している(図6-3期)。

4 期 位置を変えて、調査区に広く3棟の竪穴住居跡(SI07・10・14)が点在している。いずれも褐色系土壌が堆積しており、同時併存可能な位置関係にある(図7-4期)。

5 期 3棟の竪穴住居跡(SI13・15・26)がある。竪穴住居跡は4期より南側に移動しており、それぞれが同時併存可能な位置にある。SI13・15には褐色系土壌が堆積している。一方、SI26の上層には黒色系土壌の堆積がわずかに認められる(図7-5期)。

6 期 調査区南端にSI25がある。黒色系土壌が皿状に堆積している(図7-6期)。

7~9期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できないが、9期には墓域が形成されている。調査区の北西よりに、2~4期の竪穴住居跡上に四辺を溝で区画した方形墳丘墓2基(松尾頭1号墓・2号墓)が造営され、その周溝には黒色系土壌が堆積している(図7-7・8期・図8-9期)。

10 期 墳丘墓とは距離をおいて、調査区の東端に1棟の竪穴住居跡(SI04)、南端に1棟の竪穴住居跡(SI20)がある。いずれも厚く皿状に黒色系土壌が堆積している(図8-10期)。

松尾頭地区1区では、1期までに小規模な居住が開始されている。また、2期には竪穴住居跡が増加しており、居住規模が拡大しているようだ。ところが、3期以降は居住規模が縮小するようで、おそらく1・2棟の竪穴住居で構成される小規模な居住が6期まで継続しているとみたい。7期~9期には竪穴住居の埋没が確認できないことから、この期間は居住に利用されていないとみてよい。また、9期には2基の墳丘墓が造営されている。10期には再び小規模な居住が再開されているが、竪穴住居跡は調査区の北東と南に分布しており、9期に造営された墳丘墓とは距離をおく。境界を示す痕跡はないけれど、墳丘墓の周囲は墓域として明確に意識されている。

黒色系土壌の堆積は5・6・10期に埋没した竪穴住居跡に認められる。居住が行われていない7期~9期、そして、居住が終焉する10期以降に、草原植生が形成されたと考えられる。なお、黒色系土壌をとまなう5期のSI26と6期のSI25は近接した位置にある。6期に埋没したSI25には厚く皿状に黒色系土壌が堆積しているが、5期に埋没したSI26には最上部にわずかに黒色系土壌が堆積しているにすぎないから、6期に浅い窪みとして痕跡を留めていたSI26に、6期以降、堆積したものと考えておきたい。

また、9期に造営された墳丘墓の周溝内にも黒色系土壌が堆積している。もともと草原植生の発

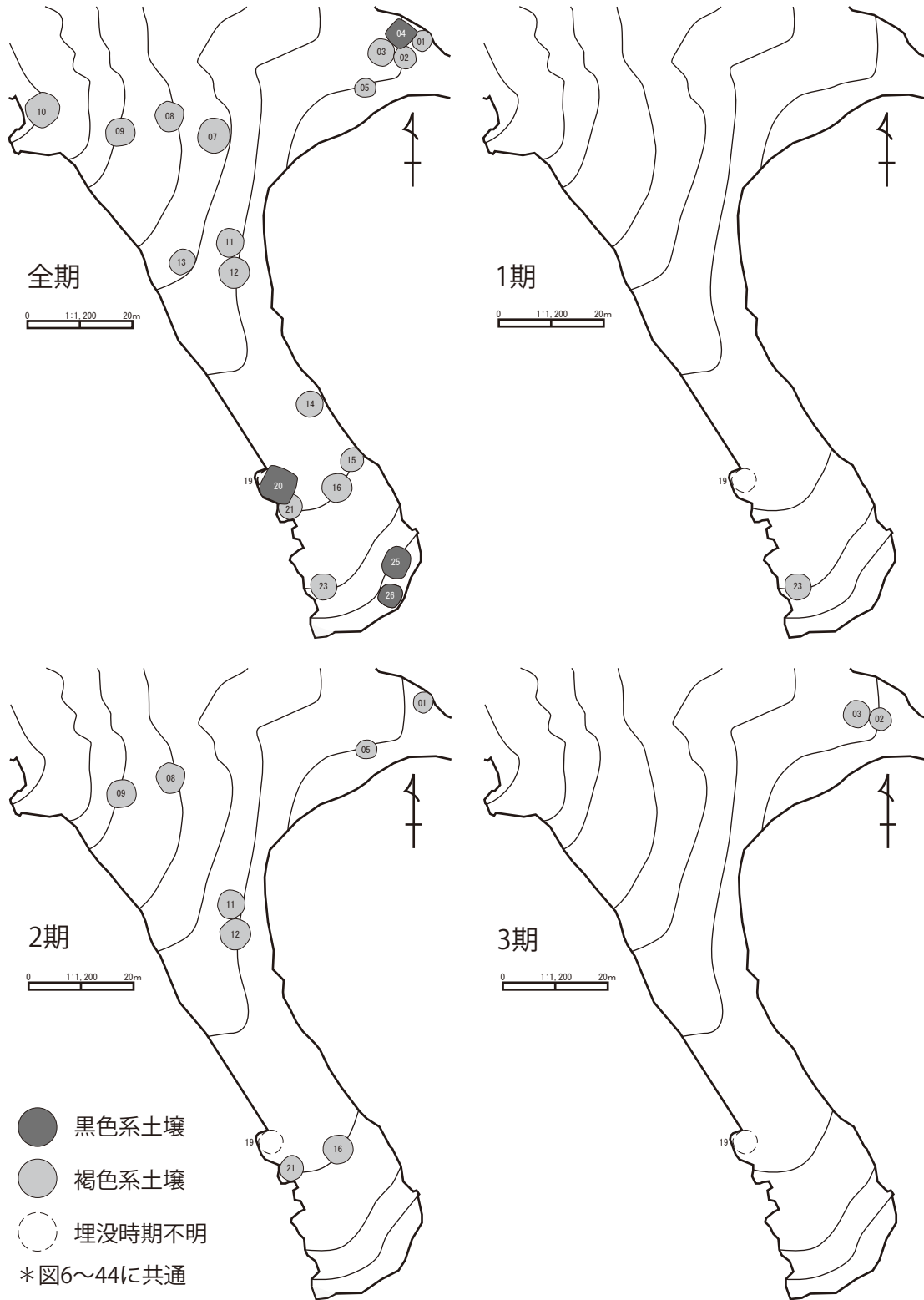


図6 松尾頭地区1区1~3期

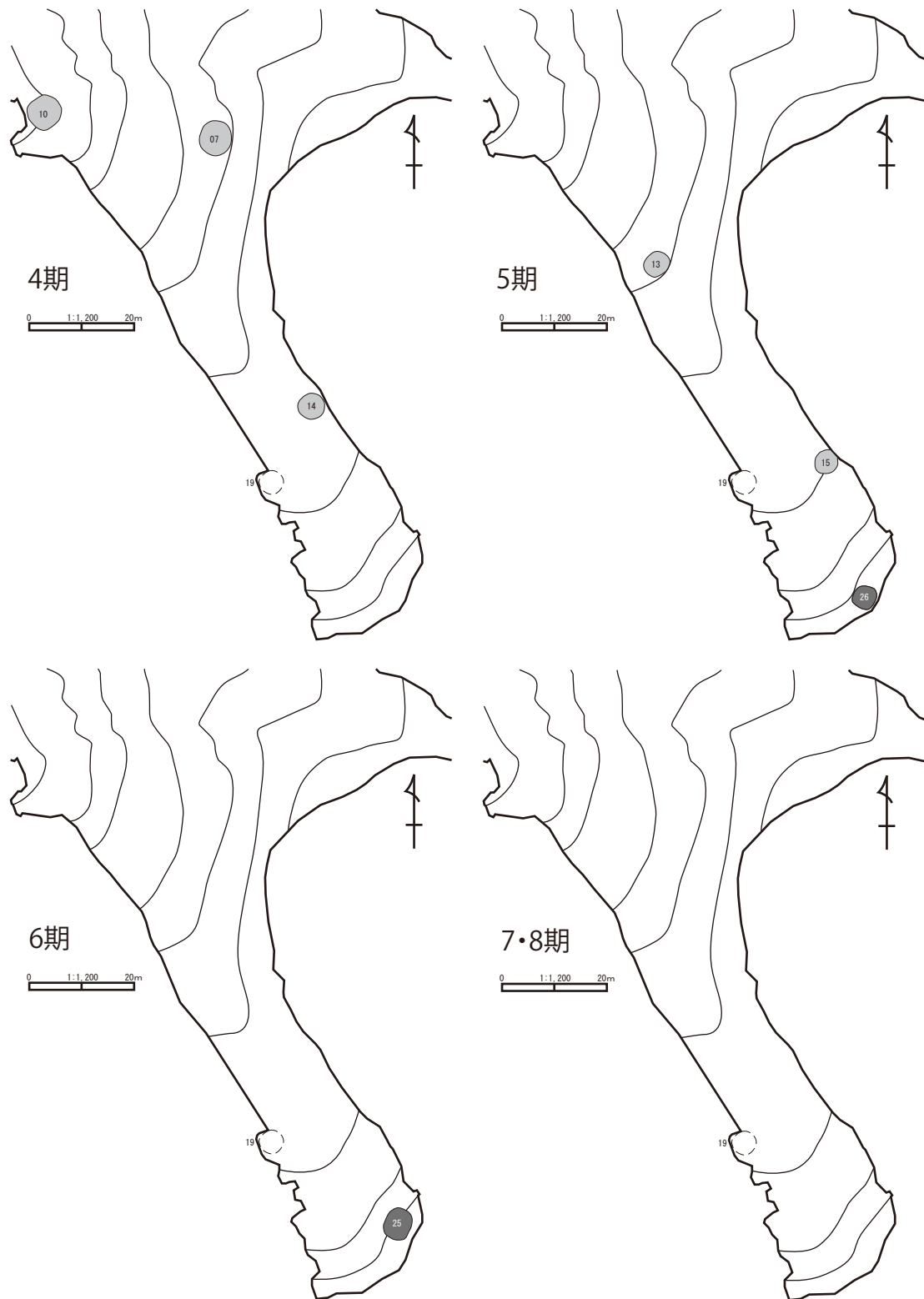


図7 松尾頭地区1区4～8期

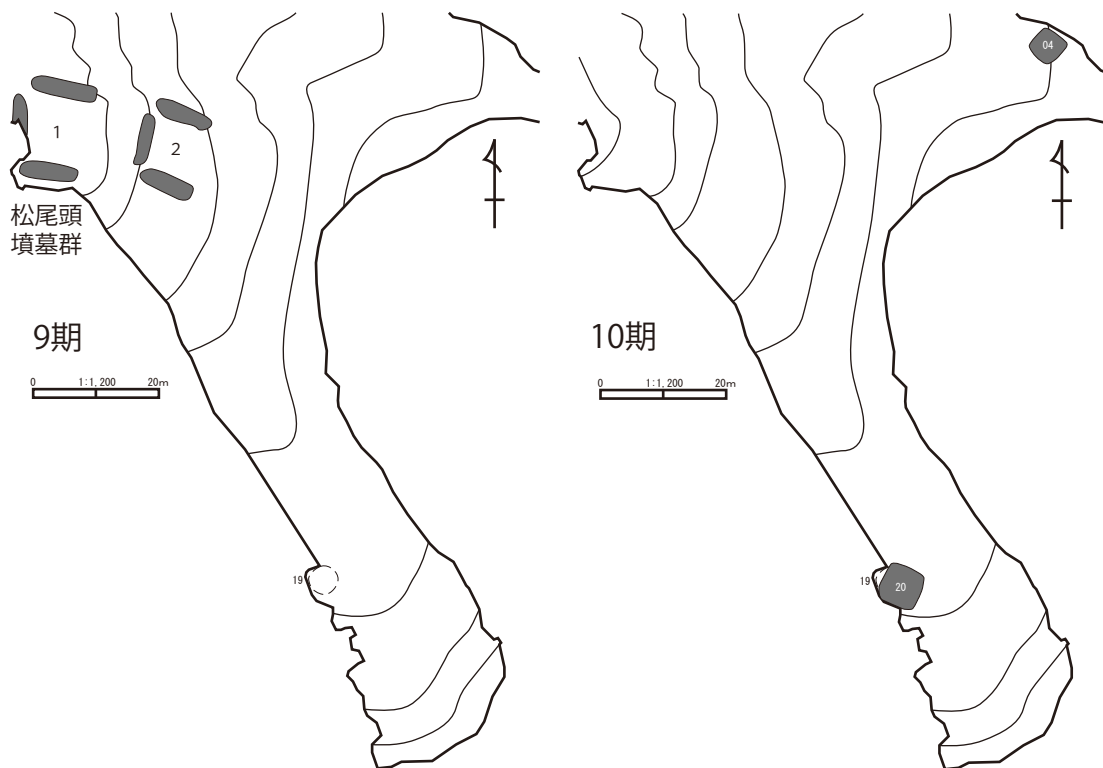


図8 松尾頭地区1区9～10期

達した環境内に造営されたか、造営後は再び人の関与が希薄になるため、再び草原植生が形成され、植物の腐植をともなう黒色系土壌が周溝内に堆積したものと考えられよう。

② 松尾頭地区3～6区北側

調査区西よりに平坦な地形が広がり、東方向に痩せた尾根が延びる。34棟(うち時期不明1棟)の竪穴住居跡がある。その累積には2つのまとまりが認められる(図2-b・図9-全期)。

1～3期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

4期 10棟の竪穴住居跡(SI38・52・53・54・55・57・58・59・97・101)が調査区内に散在している。SI54・55、SI58・59はほぼ接するように並んでおり、同時併存は困難とみられる。その他の竪穴住居跡はそれぞれ同時併存可能な位置関係にあり、最大で8棟の竪穴住居が併存可能と考えられる。ただし、南東に面した緩斜面よりに列状に分布する竪穴住居跡(SI54・55・57・58・59)と、西よりに広がる平坦な場所に空地があり、その周囲に点在する竪穴住居跡(SI38・52・53・97・101)は、別の群を構成している可能性がある。その場合には、それぞれ3・4棟の竪穴住居が居住の単位をなしていたと考えられる。なお、SI54には黒色系土壌が堆積するが、その他の竪穴住居跡を埋めるのはいずれも褐色系土壌である(図9-4期)。

5期 調査区の中央部と東端に、2棟の竪穴住居跡(SI41・65)が十分な距離を保って点在している。4期に想定した居住の単位は継続しているように見える。いずれも褐色系土壌が堆積している。また、4期に埋まったSI53跡の窪地に土器の廃棄が行われている(図9-5期)。

6期 11棟の竪穴住居跡(SI34・35・39・42・43～46・47～48・60・66・67・69・76)が

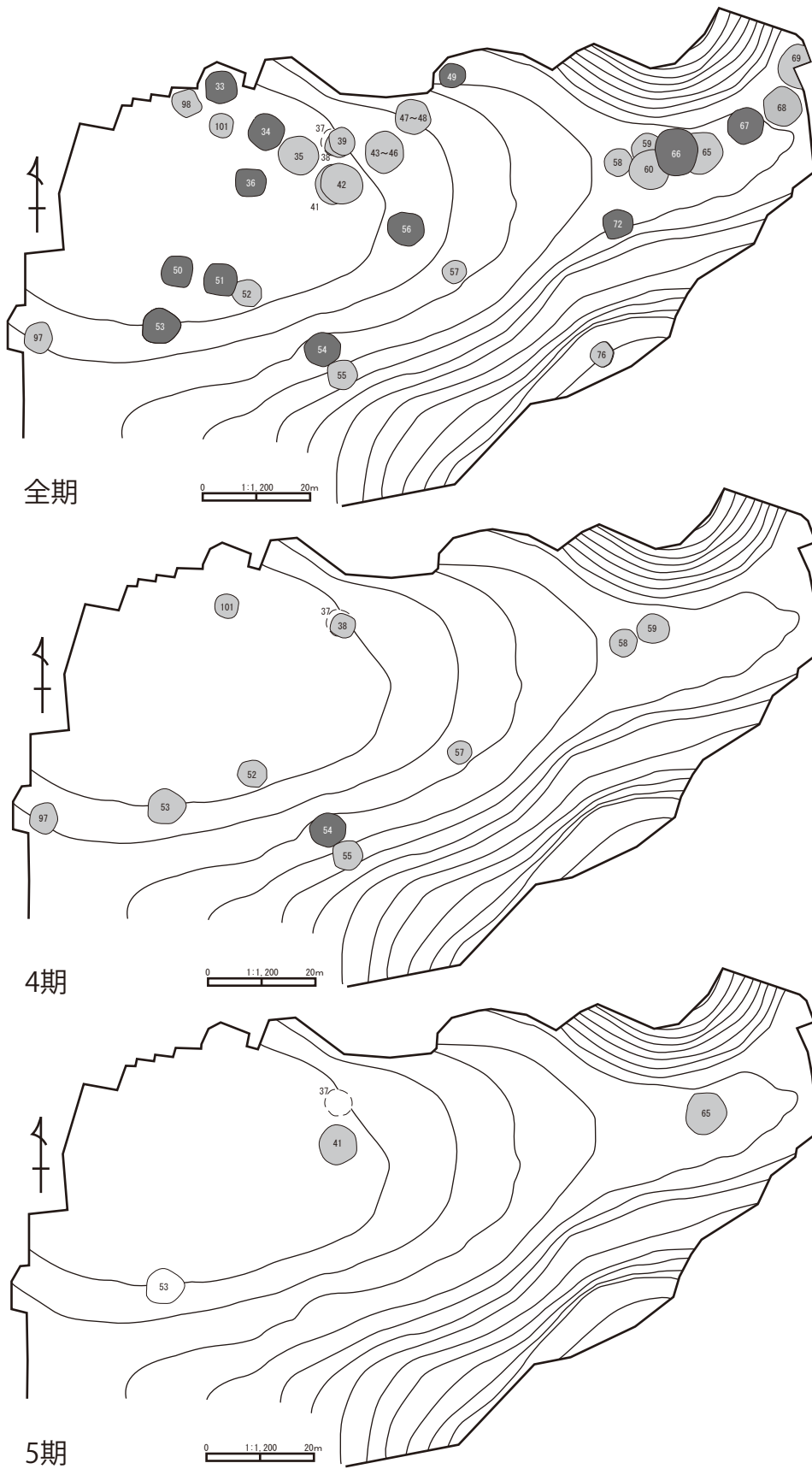


図9 松尾頭地区3～6区北側4～5期

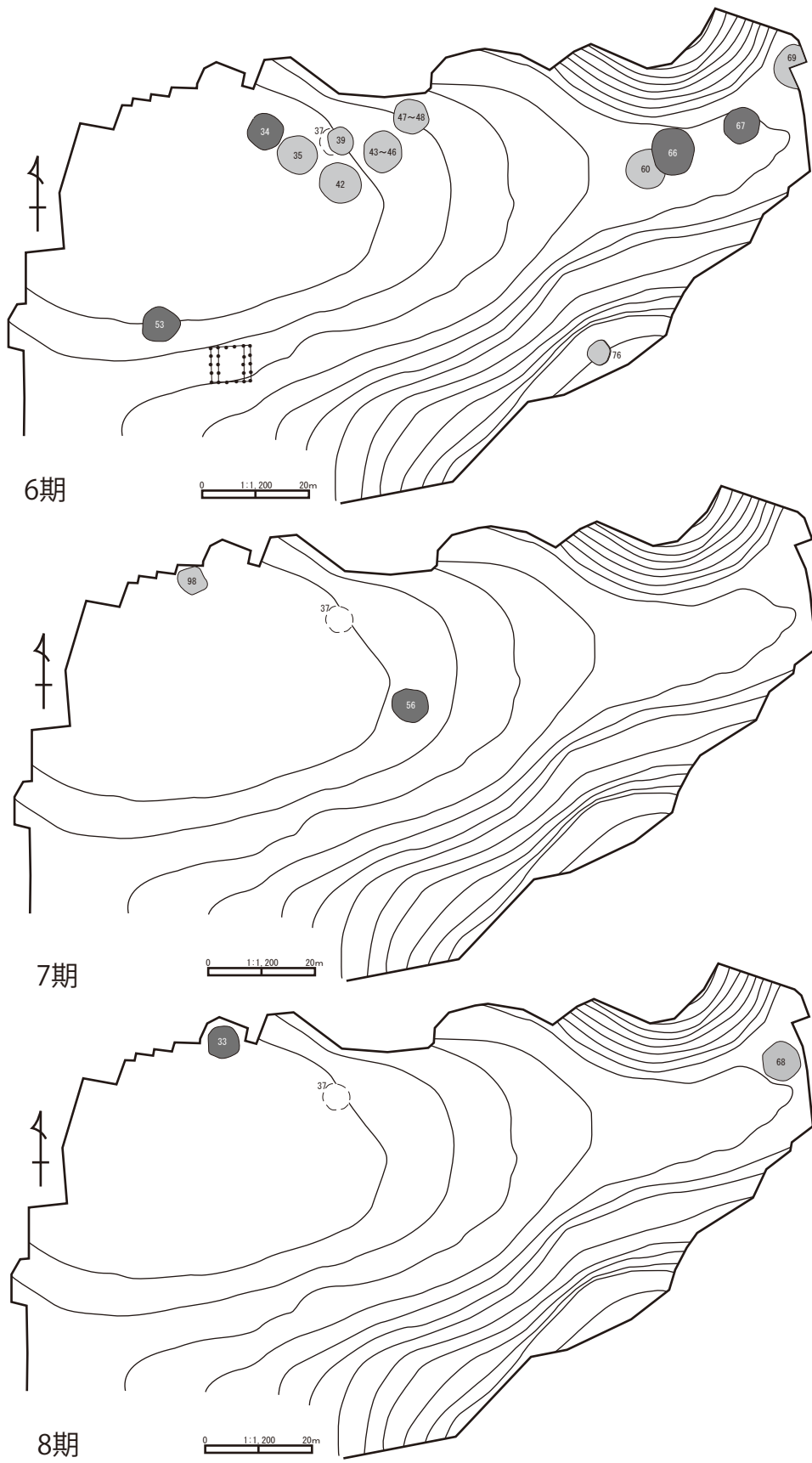


図10 松尾頭地区3～6区北側6～8期

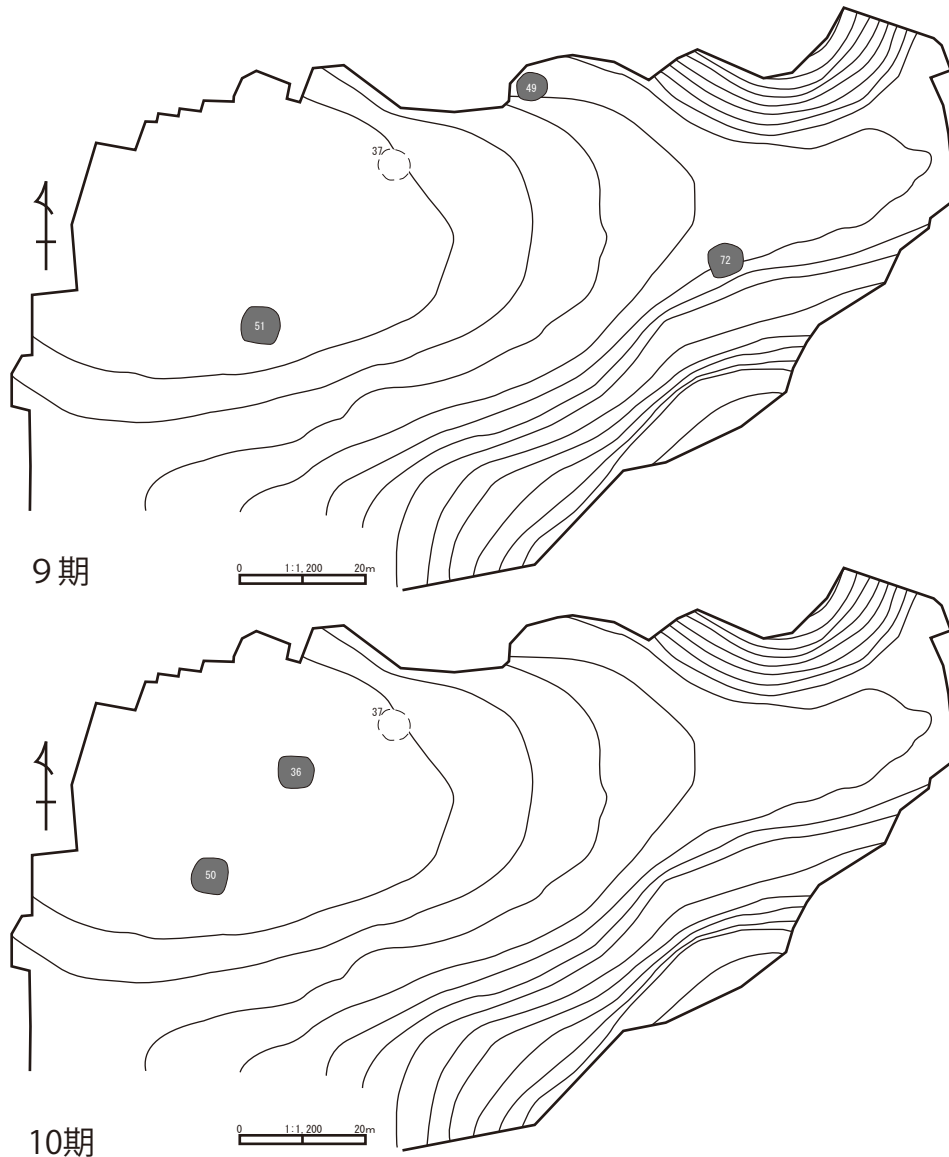


図11 松尾頭地区3～6区北側9～10期

ある。このうち SI34・66・67 に黒色系土壌が皿状に堆積している。11 棟の竪穴住居跡は4期と同様に東西にまとまりを形成している。平坦部の北よりに群在する SI34・35・39・42・43～46・47～48 はかなり密な間隔にあるが、1 棟内で連続する拡張・立て替えはあっても、重複するものはない。同時併存可能な竪穴住居は3棟ほどであろう。一方、東よりに分布する SI60・66・67・69 は適度な距離をあけて列状に分布している。SI60と66は互いに重複しており、SI66がSI60を切る。黒色系土壌はSI66の上層に堆積している。南斜面に造られた段状地形に少し離れて分布するSI76を含めて、1時期に2～3棟の竪穴住居が併存していた可能性がある。また、4期に埋没したSI53跡には5期から継続して土器が廃棄されている(第10図6期)。

7 期 2棟の竪穴住居跡(SI56・96)が、調査区の西よりに広がる平坦地の北と東にある。いずれも十分に併存可能な位置関係にある。SI96には褐色系、SI56には黒色系土壌が厚く皿状に堆積している(図10-7期)。

8 期 調査区の北よりに1棟の竪穴住居跡(SI33)、東端に1棟の竪穴住居跡(SI68)がある。

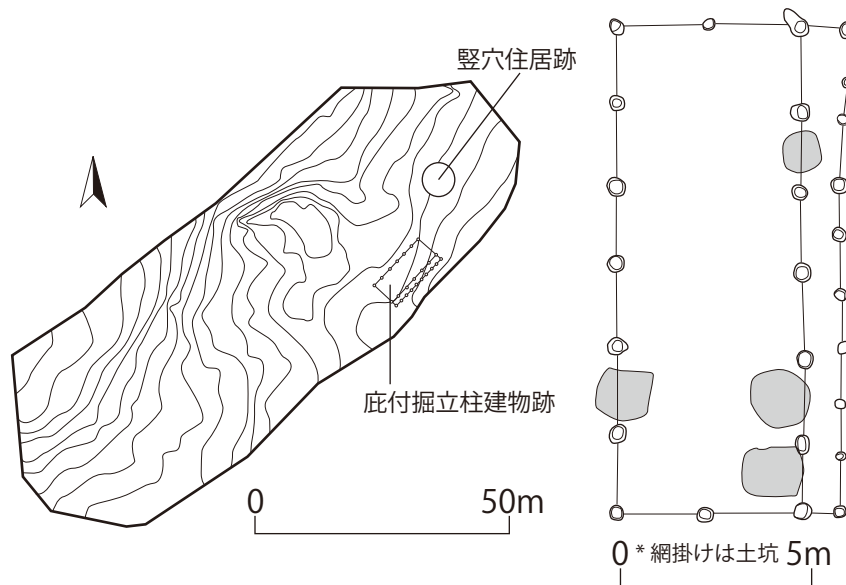


図12 長山馬籠遺跡

いずれも十分に併存可能な位置関係にある。前者に黒色系土壌が厚く皿状に堆積している。一方、後者は褐色系土壌で埋まっている(図10-8期)。

9期 3棟の竪穴住居跡(SI49・51・72)が点在している。十分に併存可能な位置関係にあり、いずれも黒色系土壌が堆積している(図11-9期)。

10期 西よりに広がる平坦地に2棟の竪穴住居跡(SI36・50)がある。併存可能な位置関係にあり、いずれにも黒色系土壌が堆積している。特に後者の堆積は厚い(図11-10期)。

松尾頭地区3～6区北側では、4期までに複数の竪穴住居で構成される居住空間が設けられ、その後、10期まで居住が継続している。ただし、その間、居住の規模に変化が生じている。4期には最大で8棟以内(2群が存在した場合、それぞれ3・4棟)の竪穴住居が併存した可能性があるが、5期には居住規模が縮小している。また、6期には埋没した竪穴住居跡が多く確認できる。竪穴住居跡はかなり密な状態にあり、竪穴住居跡が広範囲に点在する4期のように、多くの竪穴住居の同時併存は難しい。7期以降は、1・2棟の竪穴住居で構成される居住が10期まで継続している。

ところで、この地区には竪穴住居跡群から離れた南よりの緩斜面に庇をともなう梁間3間×桁行4間の大形掘立柱建物跡(SB41)がある(図10-6)。柱穴内の埋土中から6期の特徴を示す土器が出土しており、6期を上限とする施設と考えてよい。7期には居住の規模が縮小していることから、6期に位置づけられる可能性が高い。その規模、構造は単なる倉庫とはみなしがたいもので、首長に関連した公的な施設とも考えられている[佐原1999・宮本1999]。なお、中期に散見される庇付大型掘立柱建物跡(10)の中に祭祀との関連がうかがわれるものがあり[例えば図12の長山馬籠遺跡など、濱田2004]、SB41も祭祀に関わる施設であった可能性がある。

なお、中期には庇や独立棟持柱をともなう中・大型掘立柱建物跡で構成される空間と、竪穴住居跡や小型の掘立柱建物跡で構成される空間が分節化した集落が認められるが[濱田2004]、妻木晩田遺跡には大型掘立柱建物跡だけで構成される空間は存在しないようだ。SB41は特定の居住域の中

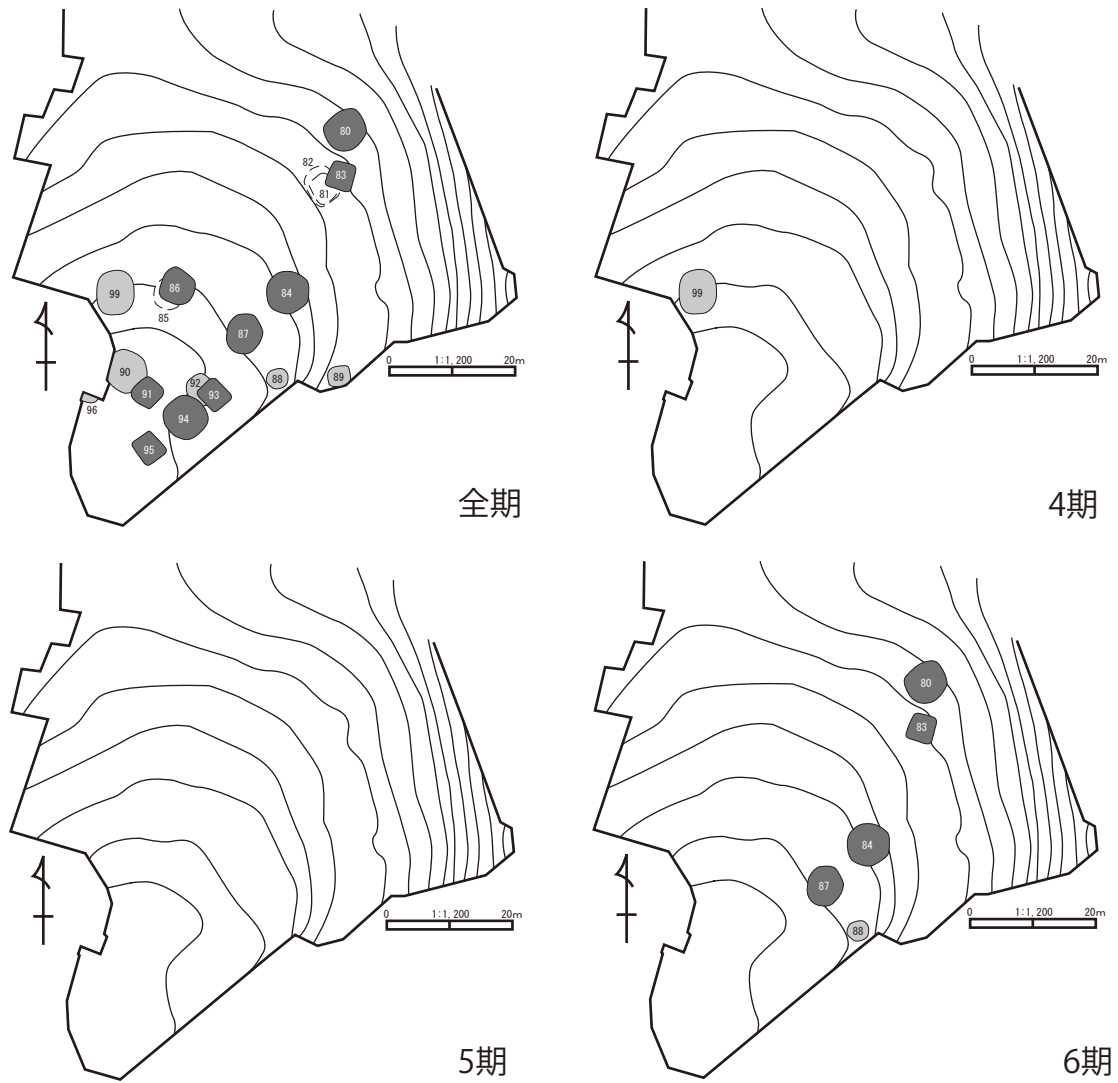


図13 松尾頭地区3～6区南側6～8期

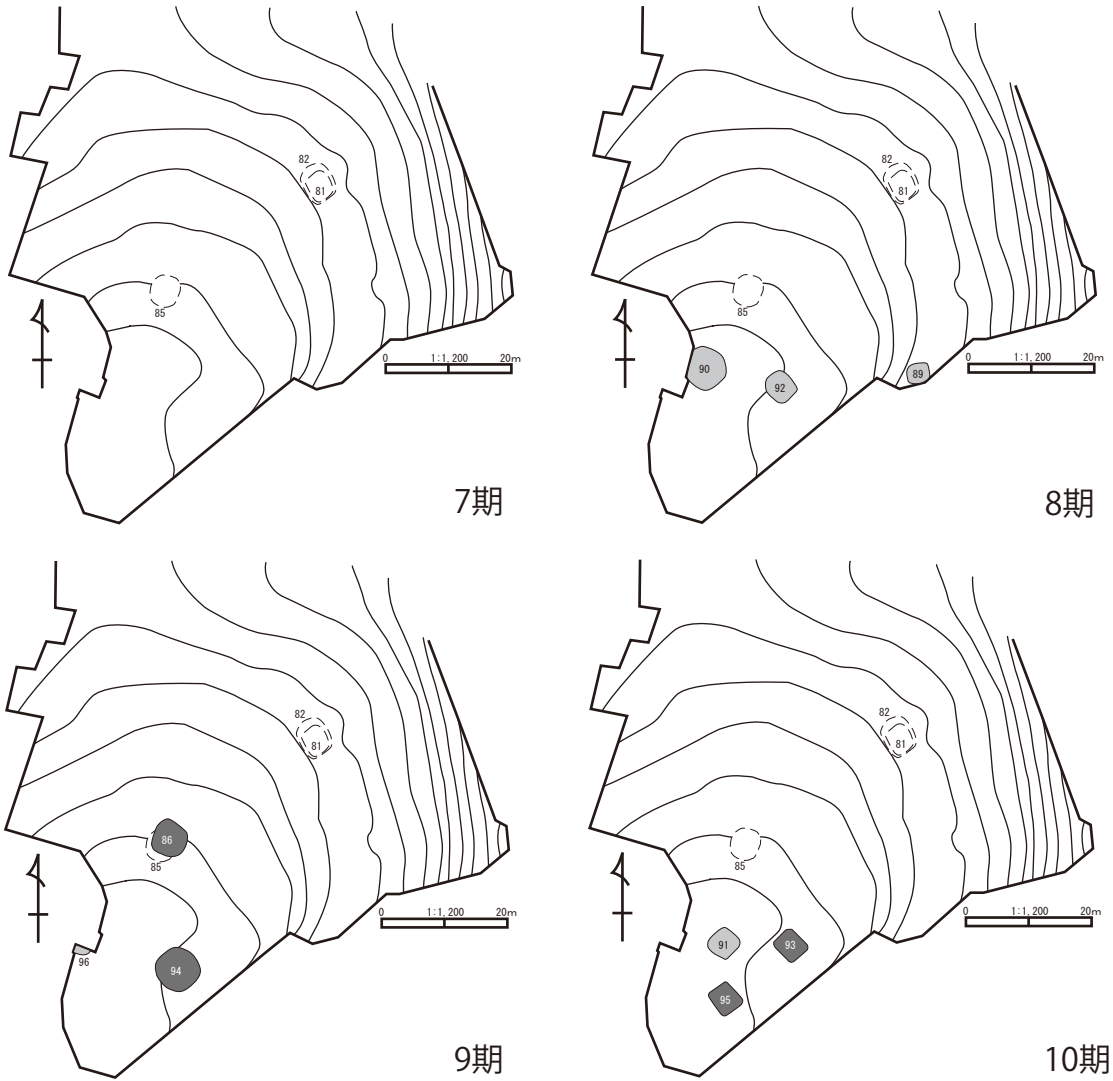


図14 松尾頭地区3～6区南側7～10期

に含まれており、松尾頭地区3～6区北側を占有する集団に保有された状態にあると考えられる⁽¹¹⁾。

黒色系土壌の堆積は4期と6～10期に埋没した竪穴住居跡に認められる。黒色系土壌が堆積した4期の竪穴住居跡は、5期に埋没した竪穴住居跡が分布しない南側の斜面部に位置しており、5期に未利用地となった斜面部が草原植生に覆われていた可能性がある。6期に埋没した竪穴住居跡のうち、東側のまとまりに属すSI66・67、SB41に近い場所にあるSI53に、黒色系土壌が堆積しているのは、5期同様に、両地点が7期の居住に利用されていないことと関係があろう。

7期以降は各期の竪穴住居跡に黒色系土壌がともなっている。7期以降は居住の規模を縮小し、竪穴住居2棟程度の小規模な居住が継続するが、この間に度々断絶が生じているのかもしれない。ただし、7期以降の居住は小規模で、その間に廃絶した竪穴住居跡がすぐに埋まりきらずに窪地として痕跡を留めていたならば、居住が終焉する10期以降に黒色系土壌が堆積した可能性もある。

③ 松尾頭地区3～6区南側

緩傾斜地に、18棟(うち時期不明3棟)の竪穴住居跡がある(図2-c・図13-全期)。

1～3期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

4 期 西よりに1棟の竪穴住居跡(SI99)がある。最上層に薄く黒色系土壌が堆積しているが、褐色系土壌で埋まっていると考えておこう(図13-4期)。

5 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図13-5期)。

6 期 東よりに5棟の竪穴住居跡(SI80・83・84・87・88)が列状に分布している。SI80・83は近接しており、同時併存は難しい位置関係にあり、SI84・87・88も密に分布している。一時期には、おそらく2・3棟の竪穴住居が併存していたのではなかろうか。このうちSI88に褐色系、SI80・83・84・87には黒色系土壌が堆積している(図13-6期)。

7 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図14-7期)。

8 期 南よりに3棟の竪穴住居跡がある。同時併存は可能な位置関係にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図14-8期)。

9 期 8期とほぼ同一地点に3棟の竪穴住居跡(SI86・94・96)が分布している。併存可能な位置関係にあり、SI96に褐色系、SI86・94に黒色系土壌が堆積している(図14-9期)。

10 期 9期と同一地点に連続するように3棟の竪穴住居跡(SI91・93・95)が分布している。それぞれが近接しており、全ての同時併存は難しい。SI91に褐色系土壌、SI93・95には黒色系土壌が堆積している(図14-10期)。

松尾頭地区3～6区南側では、4期に小規模な居住がはじまり、6期には2・3棟の竪穴住居で構成される居住域が形成されているようだ。この間、5期には居住に利用されていない可能性がある。また、7期にも居住は行われていないようだが、8～10期には再び2・3棟の竪穴住居で構成される居住が行われている。

黒色系土壌の堆積は6期と9・10期に埋没した竪穴住居跡に認められる。6期の竪穴住居跡の上層部を覆う黒色系土壌は、居住が途絶える7期に堆積したものであろう。また、10期の竪穴住居跡を埋める黒色系土壌は、居住の終焉にともなうものと考えてよい。7期と10期以降は草原植生に覆われていたのだろう。なお、9期から10期にかけては、ほぼ同一地点に分布する竪穴住居跡に黒色系土壌が堆積している。9期から10期にかけて、一時的な断絶が生じていた可能性もある

が保留しておきたい。⁽¹²⁾

(2) 妻木山地区

松尾頭地区の北側に位置する丘陵である。東西に派生する谷地形によって松尾頭地区と分けられる(図2)。最も標高が高い南側の丘陵と、その北側の一段下がった場所にある緩やかな地形、そして妻木新山地区と連なる谷部の平坦な地形に竪穴住居跡が分布している。小高い南側の丘陵は、1次調査時にはほぼ丘陵頂部全体が調査の対象となっている。北向きに張り出す丘陵が1区(図2-d)、東西に長く連なる丘陵が2区(e~g)である[松本他2000]。なお、2区には東側、中央部、西側に竪穴住居跡のまとまりがある。ここでは、北東に傾斜する緩斜面に竪穴住居跡が分布する東側(e)、南北に狭く東西に長い平坦な地形に竪穴住居跡が分布する中央(f)、丘陵頂部が楕円形に高まる地形に竪穴住居跡が分布する西側(g)に分ける。1・2区北側の一段低い場所は、1次調査のさいに3・4区(h・i)として調査が行われている[松本他2000]。両区とも一連の丘陵上にあり、その後、8・11次調査において5・6区が設定され、ほぼ一連の地形全体に調査がおよんでいる。ここには東西に竪穴住居跡のまとまりがあり、それぞれを3~6区東側(h)と西側(i)に分けて竪穴住居跡の変遷を整理する。また、3~6区の北にあり、妻木新山地区と妻木新山地区を結ぶ谷部の平坦面は13次調査時に7区(j)として調査が実施されている[馬路編2006]。

① 妻木山地区1区

36棟(うち時期不明5棟)の竪穴住居跡がある。緩やかに高まる丘陵の最高所を空地として、その周囲に竪穴住居跡が環状に分布する(図2-d・図15-全期)。

1・2期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

3期 北西緩斜面に1棟の竪穴住居跡(SI30)がある。褐色系土壌が堆積している(図15-3期)。

4期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図15-4期)。

5期 丘陵部に列状にならぶように4棟の竪穴住居跡(SI03・10・14・34)がある。いずれも同時併存可能な位置関係にあり、褐色系土壌が堆積している。最大4棟が併存可能な位置関係にある(図16-5期)。

6期 5期に続き、調査区内に広く竪穴住居跡が展開している。調査区最高所に広く空地を設けて、南東緩斜面に2棟の竪穴住居跡(SI01・05)、北西緩斜面に3棟の竪穴住居跡(SI25・27・31)がある。いずれも褐色系土壌が堆積している。SI25・27は近接するため、同時併存は考えにくい。3・4棟の併存を考えるのが妥当だろう(図16-6期)。

7期 6期同様、最高所に広く空地があり、その周囲に竪穴住居跡が分布している。南東緩斜面に2棟の竪穴住居跡(SI04・06)、ほぼ中央にある2棟の竪穴住居跡(SI15・21)、北西緩斜面の調査区端に3棟の竪穴住居跡(SI33・35・36~37)がある。このうちSI35・36~37は近接しており、同時併存を考えにくい。最大6棟の竪穴住居跡が同時併存可能な位置にある。SI04・06・15・21に褐色系土壌、北西緩斜面にあるSI33・35・36~37に黒色系土壌が堆積している。ただし、3棟の竪穴住居跡に認められる黒色系土壌は、いずれも竪穴住居跡の上面を覆うもので、竪穴部内に堆積しているものではない(図16-7期)。

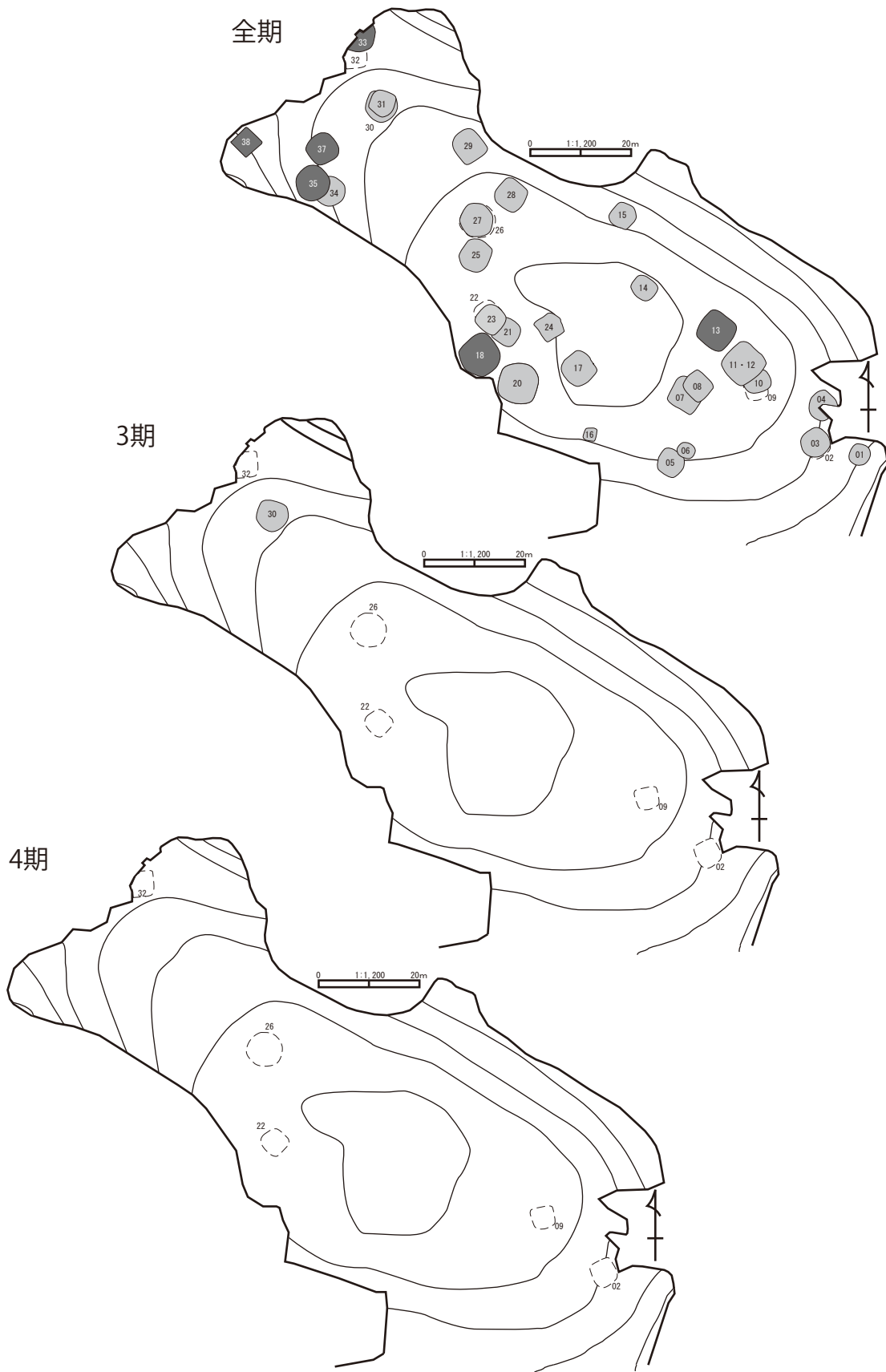


図15 妻木山地区1区3～4期

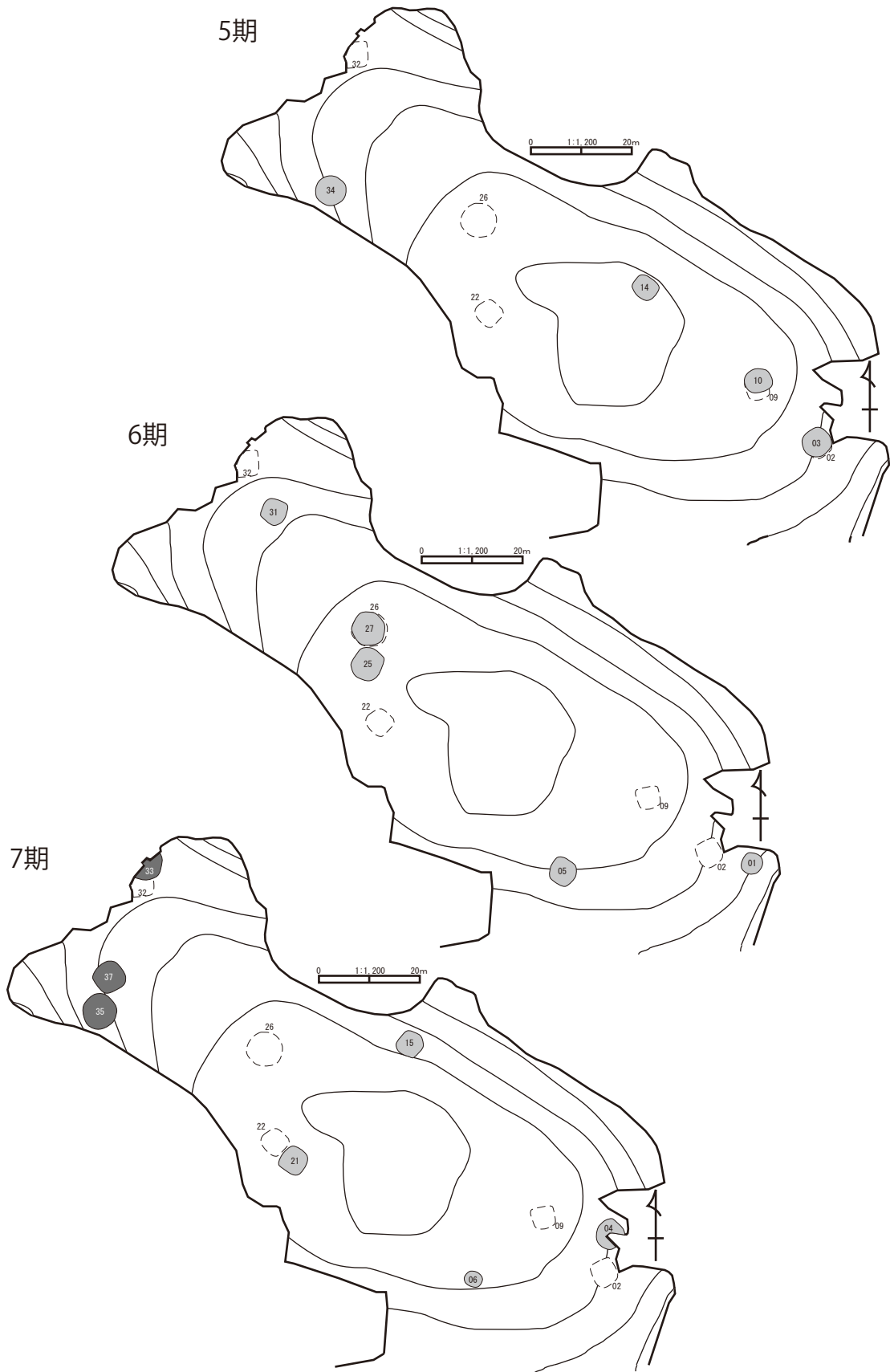


図16 妻木山地区1区5～7期

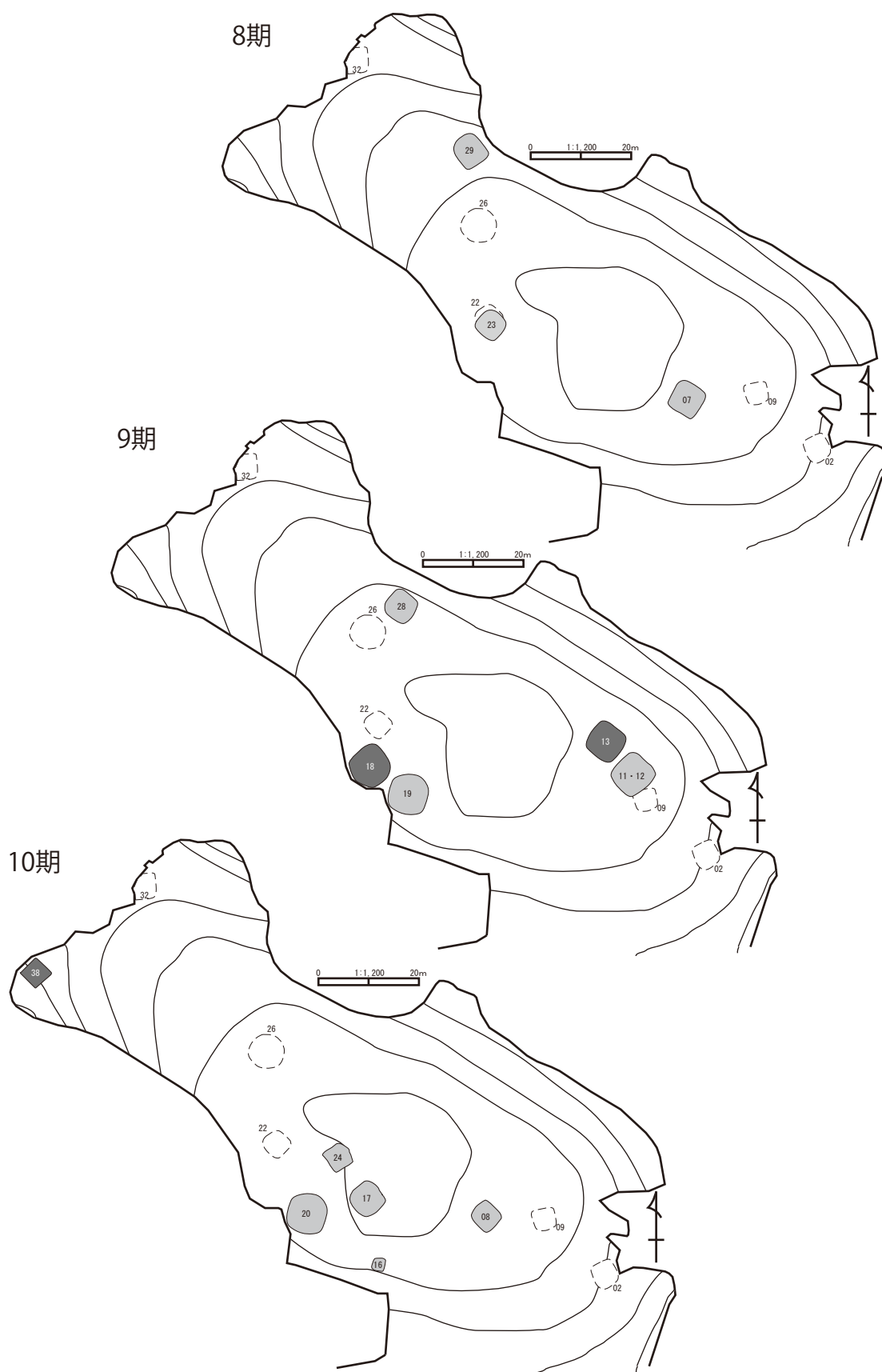


図17 妻木山地区1区8～10期

8 期 最高所に空閑地があり，南東緩斜面に1棟の竪穴住居跡(SI07)，西側に1棟の竪穴住居跡(SI23)，北西側にも1棟の竪穴住居跡(SI29)がある。SI23は切り合い関係からこの時期のものとして推測されるもので，7期のSI21と一部が重複している。いずれも同時併存可能な位置関係にあり，褐色系土壌が堆積している(図17-8期)。

9 期 最高所を空閑地として，東側に2棟の竪穴住居跡(SI11～12・13)が近接している。SI11～12に褐色系，SI13に黒色系土壌が堆積している。また，西側にも2棟の竪穴住居跡(SI18・19)が近接している。SI18に黒色系，SI19に褐色系土壌が堆積している。また，空閑地の北側に1棟の竪穴住居跡(SI28)があり，褐色系土壌が堆積している。1時期には2・3棟の竪穴住居が併存していたと考えられる(図17-9期)。

10 期 空閑地があり，その南側から西側にかけて5棟の竪穴住居跡(SI08・16・17・20・24)がある。いずれも褐色系土壌が堆積している。SI17・20・24はやや密に分布しており。一時的2・3棟の竪穴住居が併存していたとみたい。また，北西緩斜面の調査区端に1棟の竪穴住居(SI38)が単独であり，黒色系土壌が堆積している(図17-10期)。

妻木山地区1区では，3期にまでに小規模な居住が開始される。4期に一時的な断絶がありそうだが，その後，5期に再開された居住は10期まで続く。各時期ともに3・4棟の竪穴住居で構成される居住が行われているようだが，7期には一時的に居住規模の拡大が認められそうだ。

黒色系土壌の堆積は7期と9・10期の竪穴住居跡に認められる。7期の竪穴住居跡にともなう黒色系土壌は上面を覆うように薄く堆積したもので，いつ堆積したものか推測が難しい。9期のSI13・SI18や10期のSI38に堆積した黒色系土壌は，居住の終了後に生じた草原植生に由来するものと考えられる。

② 妻木山地区2区東側

36棟(うち時期不明3棟)の竪穴住居跡が検出されている。東西に長く展開しており，時期によっては2単位ほどの竪穴住居跡のまとまりがあるようにもみえる(図2-e・図18-全期)。

1 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

2 期 東側に1棟の竪穴住居跡(SI42)がある。褐色系土壌が堆積している(図18-2期)。

3・4 期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図18-3・4期)。

5 期 中央やや南よりのなだらかな地形に3棟の竪穴住居跡(SI49・55・59)がある。いずれも同時併存可能な位置関係にあり，褐色系土壌が堆積している(図19-5期)。

6 期 5期までに埋没した竪穴住居跡の分布域をさけるように，その東西に竪穴住居跡が展開する。東群には5棟の竪穴住居跡(SI40・41・43・44・46)がある。SI43・44・46に褐色系，SI40・41には黒色系土壌が堆積している。SI40・41，SI43・44は近接しており，同時併存は最大でも2棟と推測される。一方，西群は平坦な地形を空閑地として，その周囲に6棟の竪穴住居跡(SI62・63・64・68～69・72・76)がある。いずれも褐色系土壌が堆積している。SI62と63が一部を重複，SI68～69と72は近接しており，同時併存は最大でも4棟であろう(図19-6期)。

7 期 6期の西群が少し東に移動するように2棟の竪穴住居跡(SI56・58)が認められる。同時併存可能な位置関係にあり，いずれも褐色系土壌が堆積している(図19-7期)。

8 期 6期に東群のあった場所に2棟の竪穴住居跡(SI45・47)が認められる。SI47には褐

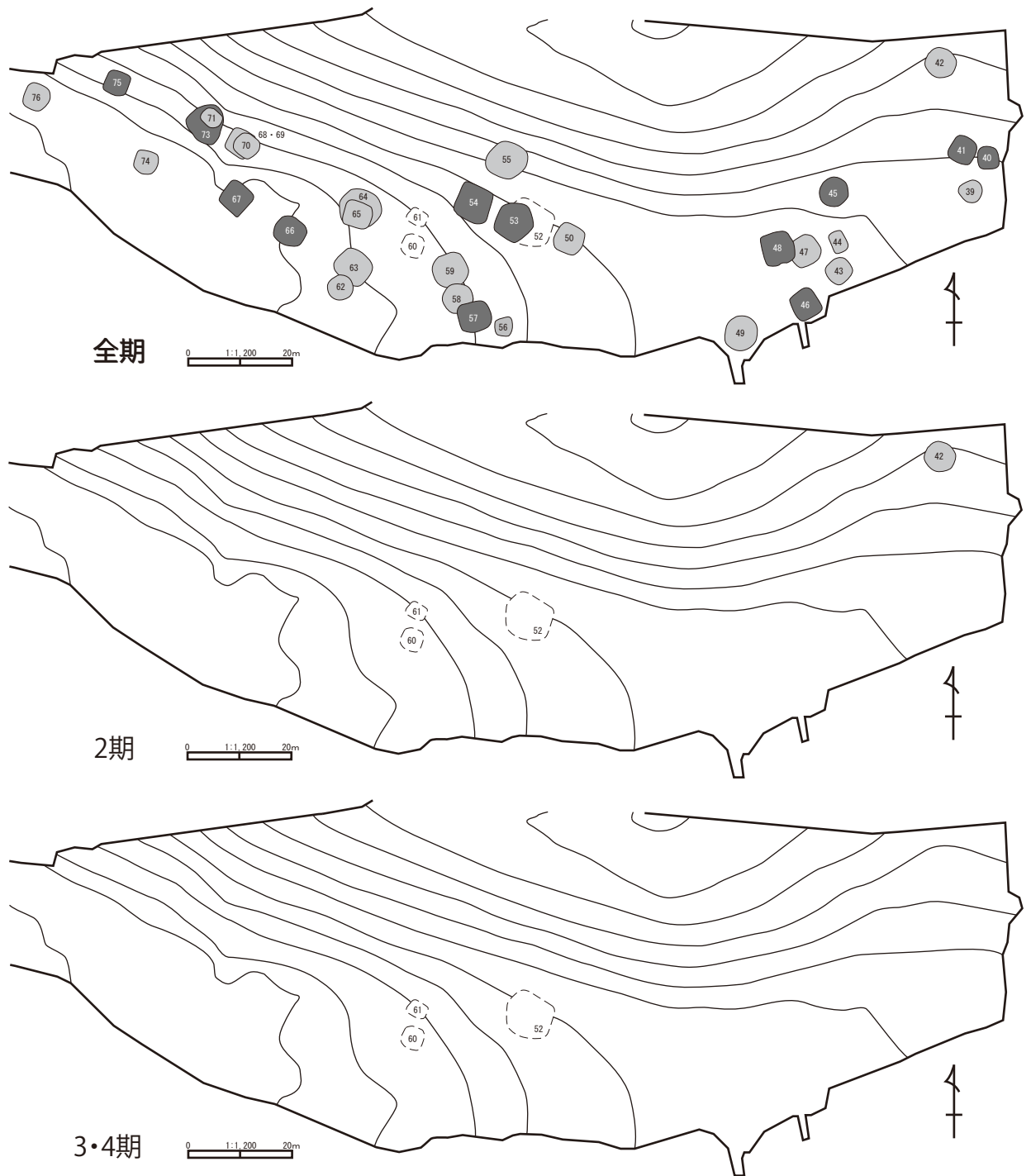


図18 妻木山地区2区東側2～4期

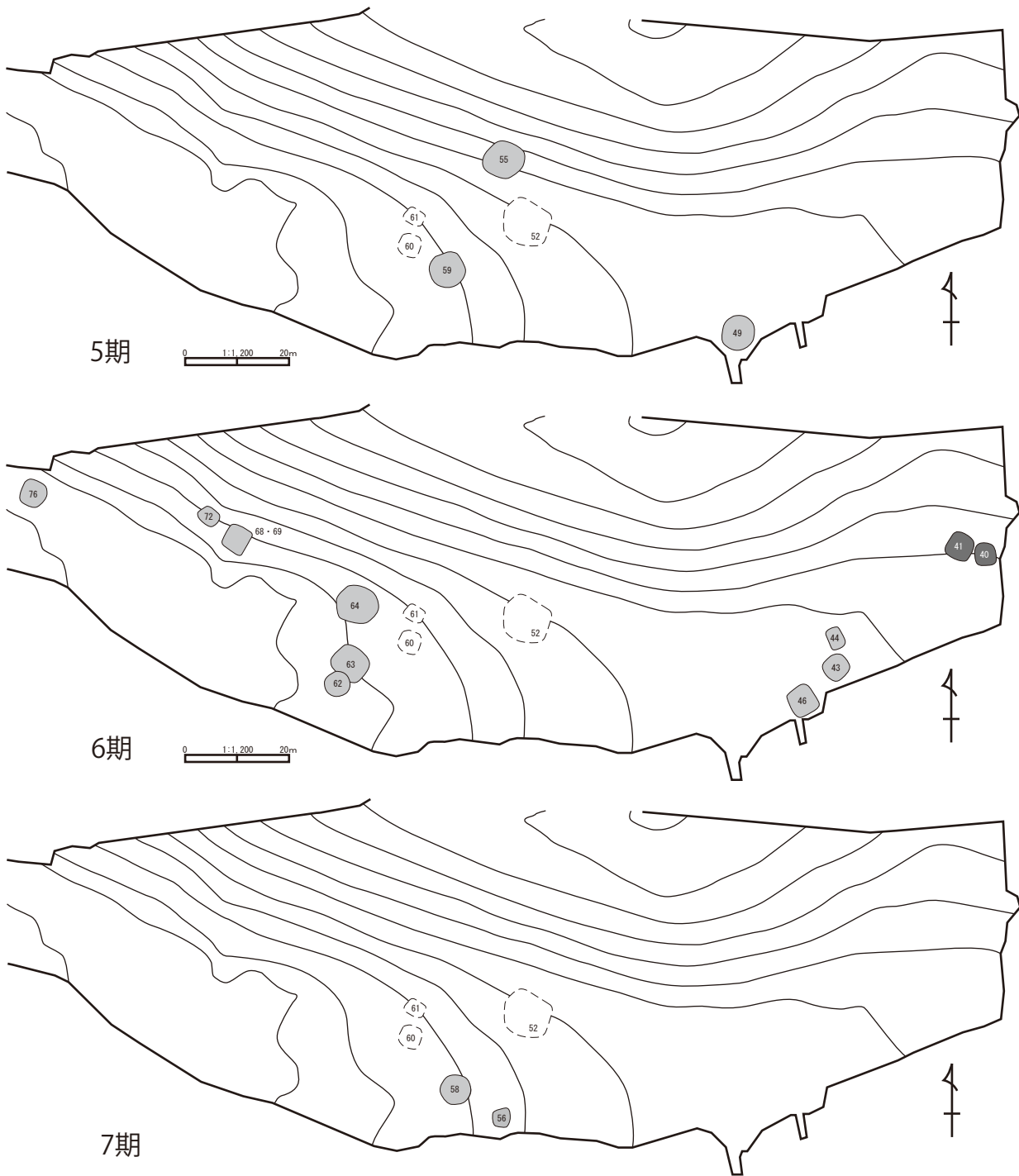


図19 妻木山地区2区東側5～7期

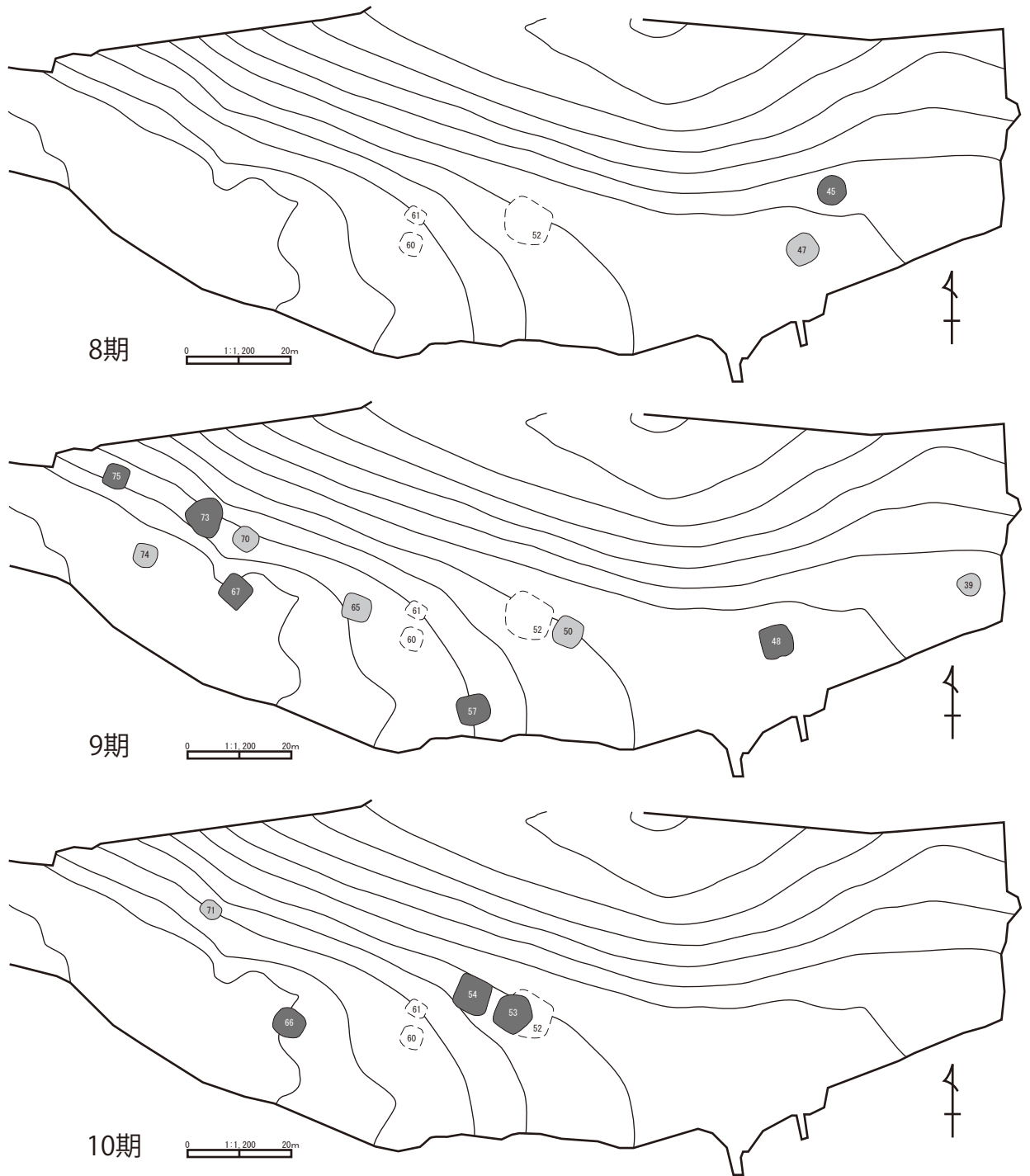


図20 妻木山地区2区東側8～10期

色系土壌が堆積している。極一部に黒色系土壌が堆積しているが、10期以降のものと判断したい。また、SI45には薄く黒色系土壌が面的に堆積する状況が認められる。褐色系土壌埋まった後に生じた僅かな窪地に堆積したものである。8期にもこの地点では竪穴住居が連続的に設けられており、7～8期にかけて、SI45に黒色系土壌の堆積をうながす環境がこの周囲に生じていたとは考えにくいことから、10期以降に堆積したものであろう(図20-8期)。

9期 東西に列をなすように10棟の竪穴住居跡(SI39・48・50・57・65・67・70・73・74・75)がある。褐色系土壌が堆積するSI39・50・65・70・74は東西に広く等間隔に展開しており、同時併存可能な位置にある。黒色系土壌が堆積しているSI48・57・67・73・75も同時併存可能な位置にあり、上層に堆積する土壌が新旧関係を反映しているならば、最大5棟の竪穴住居が併存可能であろう(図20-9期)。

10期 東よりに4棟の竪穴住居跡(SI53・54・66・71)がある。SI53・54・66には黒色系土壌が厚く堆積している。SI53・54は近接しており、2～3棟の併存が可能である(図20-10期)。

妻木山地区2区東側では、2期までに小規模な居住が開始されるが、その後、3期から4期にかけて居住に利用されない期間がある。5期には居住が再開しており、6期には居住規模の拡大がうかがわれる。6期には東西に2群が存在していたとみられる。その後、7・8期に小規模な居住が行われ、9期に再び居住規模が拡大するが、また、10期には居住規模を縮小している。

黒色系土壌の堆積は6期、8～10期の竪穴住居跡に認められる。6期に埋没した竪穴住居跡のうち、黒色系土壌の堆積が認められるのは東群である。東群の所在する地点は7期になると居住に利用されていないことから、草原植生に覆われた時期があったと考えられる。8期に埋没した竪穴住居跡上面の黒色系土壌は10期以降に堆積した可能性があって、8期から9期にかけて一時的な断絶を示すものではなさそうだ。また、9期に埋没した竪穴住居跡のうち、黒色系土壌をとまなう竪穴住居跡のある場所には、新規に竪穴住居跡が分布していない。9期から10期に居住規模が縮小するのにとまなう、順次、未利用地となった場所が草原植生に覆われていった可能性もある。

③ 妻木山地区2区中央

13棟(うち時期不明2棟)の竪穴住居跡がある。平坦な地形の周囲に竪穴住居跡が列をなすように分布する(図2-f・第21全期)。

1～3期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

4期 南側の緩斜面に1棟の竪穴住居跡(SI8)がある。褐色系土壌が堆積している(図21-4期)。

5期 東寄りのところに2棟の竪穴住居跡(SI79・81)がある。いずれも同時併存可能な位置にあって、褐色系土壌が堆積している(図21-5期)。

6期 東端に1棟の竪穴住居跡(SI77)、北側斜面よりのところに2棟の竪穴住居(SI84・85)が並んでいる。SI84には黒色系土壌が堆積、一方、SI85には褐色系土壌が堆積している。近接しており、併存関係にはないと推測する(図21-6期)。

7期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図22-7期)。

8期 北側緩斜面に1棟の竪穴住居跡(SI86)がある。褐色系土壌が堆積している(図22-8期)。

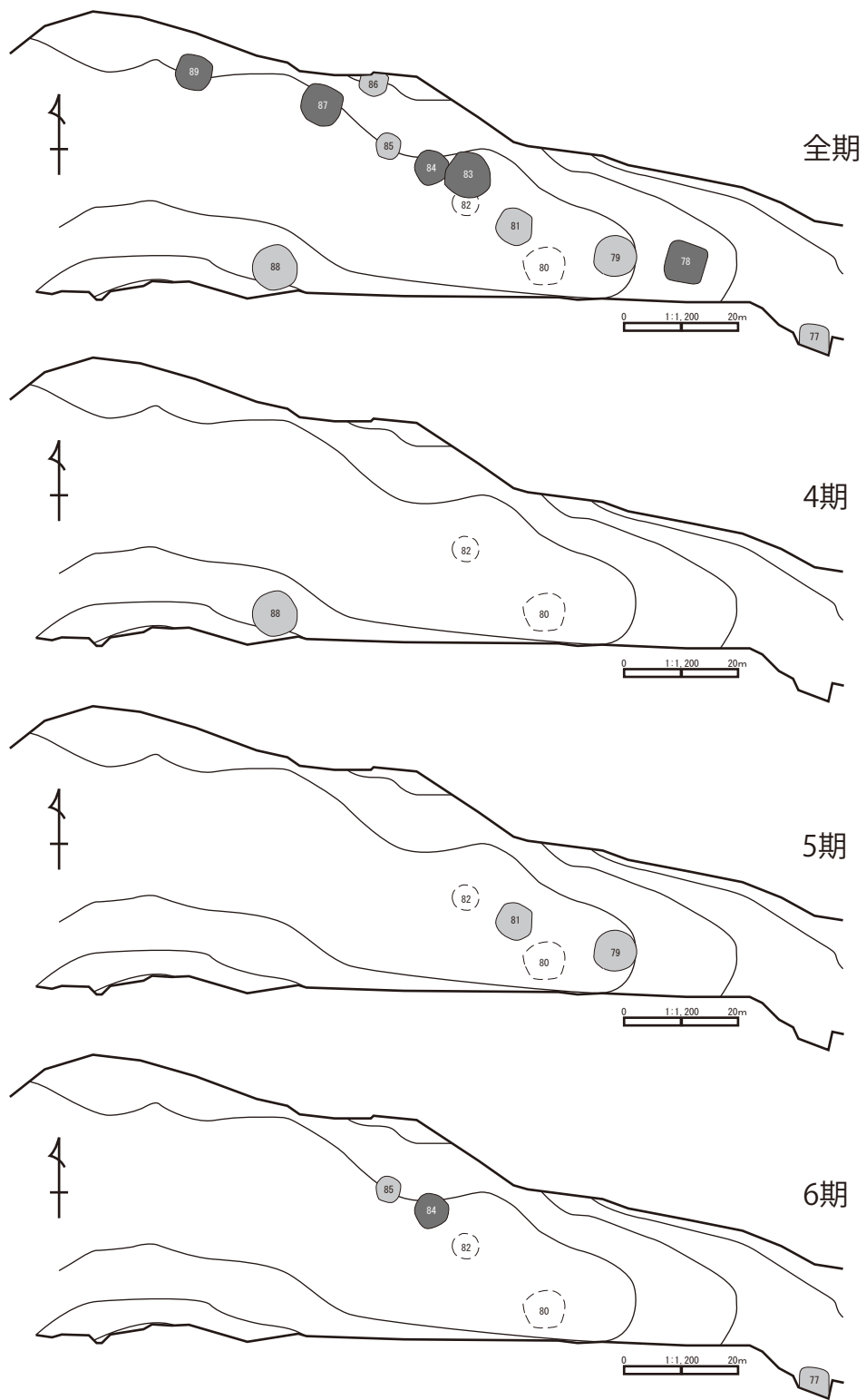


图21 妻木山地区2区中央4～6期

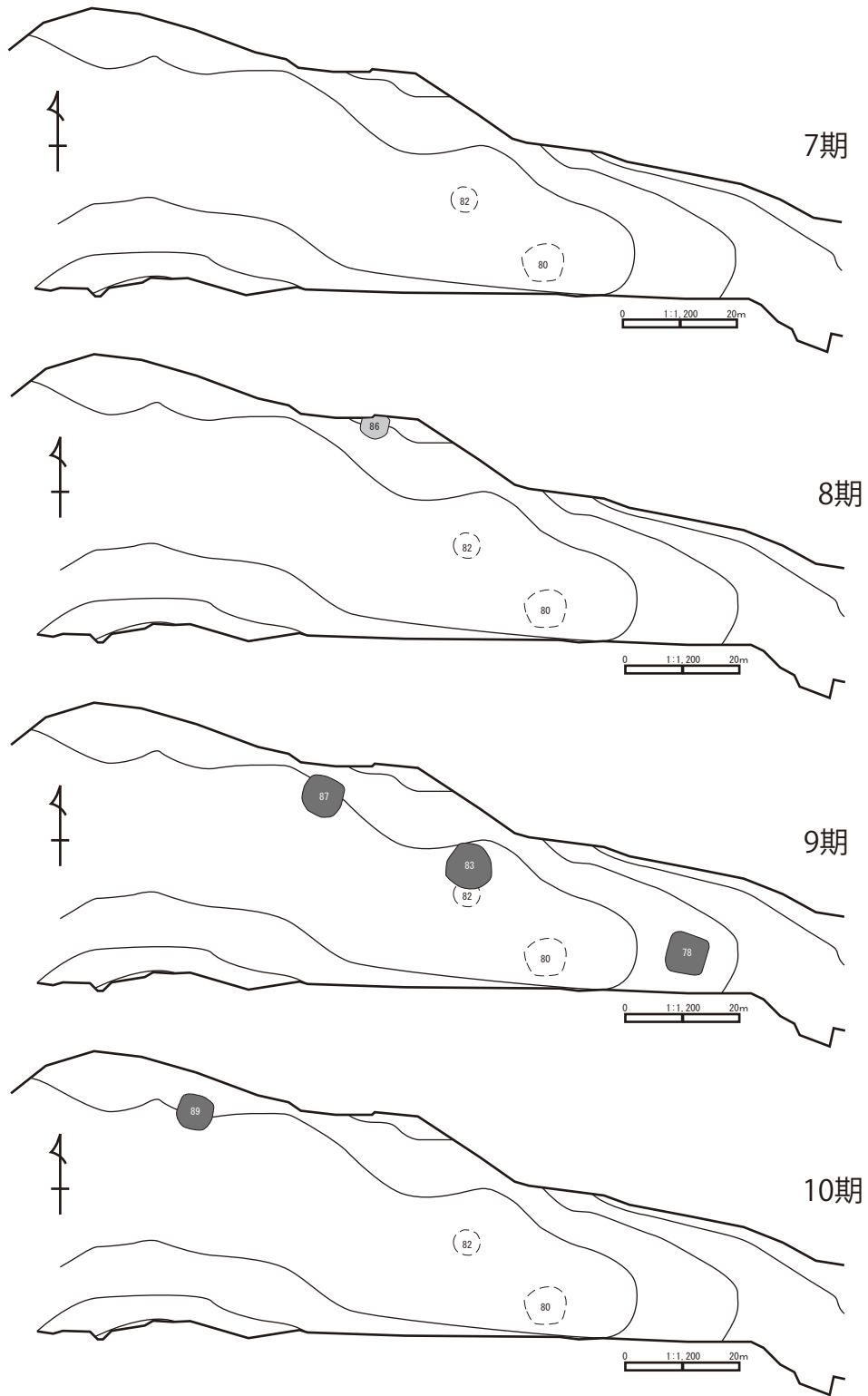


図22 妻木山地区2区中央7～10期

9 期 北側緩斜面に近いところに列をなすように3棟の竪穴住居跡(SI78・83・87)がある。いずれも黒色系土壌が堆積している(図22-9期)。

10 期 9期同様に北側緩斜面よりにSI89が単独で存在している。9期に認められる3棟の竪穴住居跡よりも西にあり、黒色系土壌が堆積している(図22-10期)。

妻木山地区2区中央では、4期に居住が開始され、6期まで1・2棟の竪穴住居で構成される小規模な居住が行われていたと推測される。7期に居住が途絶えるが、8期には居住が再開され、9・10期と居住が継続している。

黒色系土壌が堆積した竪穴住居跡は6・9・10期に認められる。6期の竪穴住居跡を埋める黒色系土壌は居住に利用されていない7期に堆積したものであろう。10期の竪穴住居跡を埋める黒色系土壌は、ここでの居住が終焉した後に堆積したものと考えられる。9期に埋没した3棟の竪穴住居跡にも黒色系土壌が堆積しているが、10期にはかなり未利用地が広がっているようで、漸次、草原植生が形成され、9期に埋没した竪穴住居跡の痕跡に黒色系土壌が堆積した可能性がある。

④ 妻木山地区2区西側

28棟(うち時期不明4棟)の竪穴住居跡がある。緩やかに高まる丘陵頂部を空閑地として、その周囲に竪穴住居跡が環状に分布している(図2-g・図23-全期)。

1・2期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

3 期 最高所に近い北よりの場所に1棟の竪穴住居跡(SI116)がある。褐色系土壌が堆積している(図23-3期)。

4 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図23-4期)。

5 期 最高所の空閑地を介して、その東西に3棟の竪穴住居跡(SI90・91・100)がある。同時併存可能な位置にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図24-5期)。

6 期 最高所を空閑地として、その周囲に10棟の竪穴住居跡(SI92・94・96・101・102・103・104・106・117・119)がある。いずれも褐色系土壌が堆積している。SI101と102、SI117と119は近接しており、同時併存は考えにくい。7棟ほどの竪穴住居跡が同時併存可能な位置にある(図24-6期)。

7 期 最高所を空閑地として、その周囲に3棟の竪穴住居跡(SI93・105・114)がある。SI105・114に褐色系、SI93には黒色系土壌が堆積している。いずれも同時併存可能な位置にある(図24-7期)。

8 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図25-8期)。

9 期 最高所の空閑地を介して、南北に竪穴住居跡が分布している。南に1棟の竪穴住居跡(SI95)、北には5棟の竪穴住居跡(SI110・113・115・118・120～121)がある。後者の竪穴住居跡は近接しており、併存していたのは2棟程度と考えるのがよかろう。北にあるSI95も含め、最大で3棟ほどの竪穴住居が一時的に併存していた可能性がある。なお、SI115には褐色系、それ以外には竪穴住居跡の最上層に全て黒色系土壌が厚く皿状に堆積している(図25-9期)。

10 期 南西よりに1棟の竪穴住居跡(SI97)がある。黒色系土壌が厚く堆積している(図25-10期)。

妻木山地区2区西側では、3期までに小規模な居住が開始されているが、4期には一度居住が途

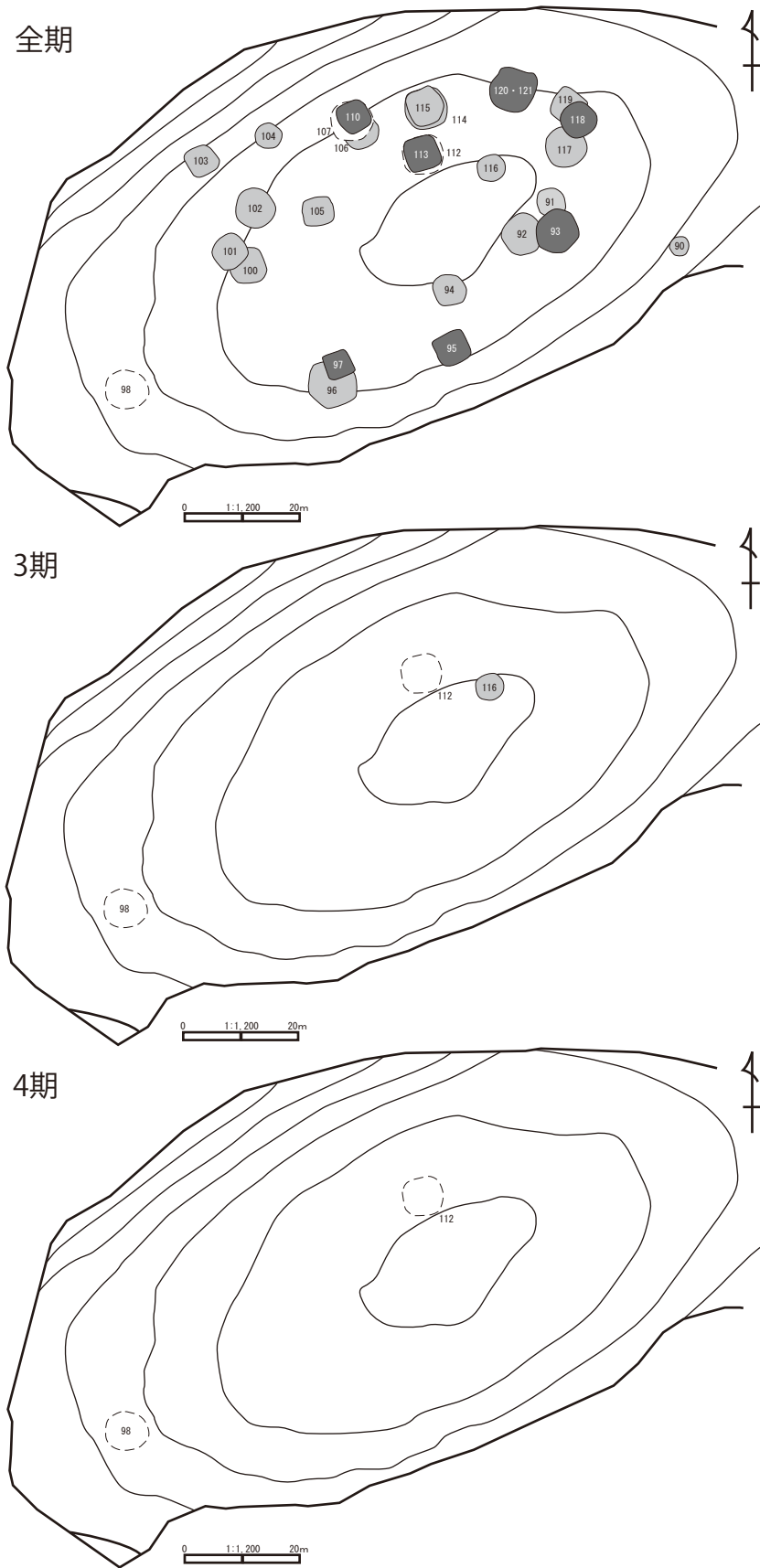


図23 妻木山地区2区西側3～4期

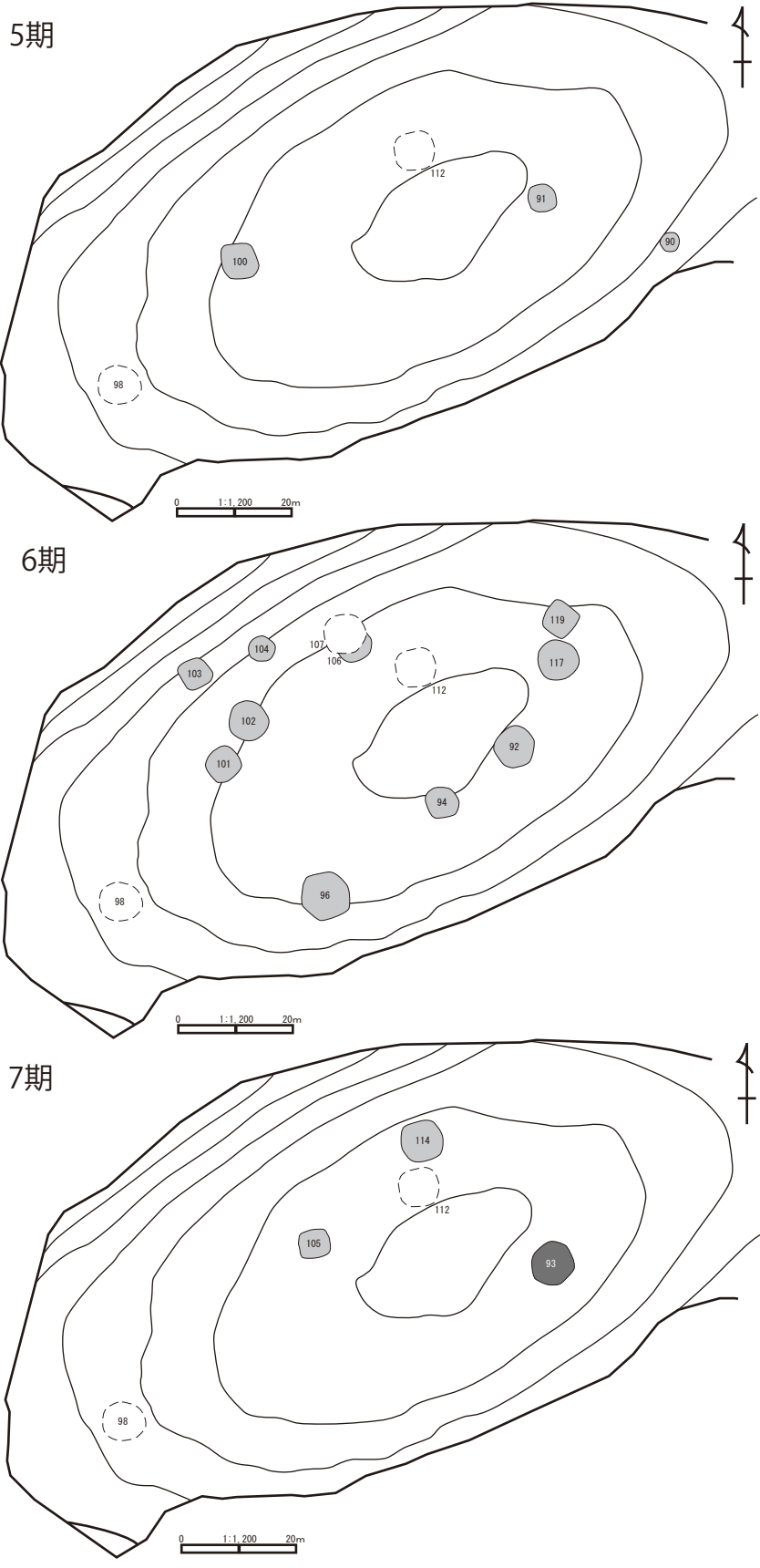


图24 妻木山地区西侧5～7期

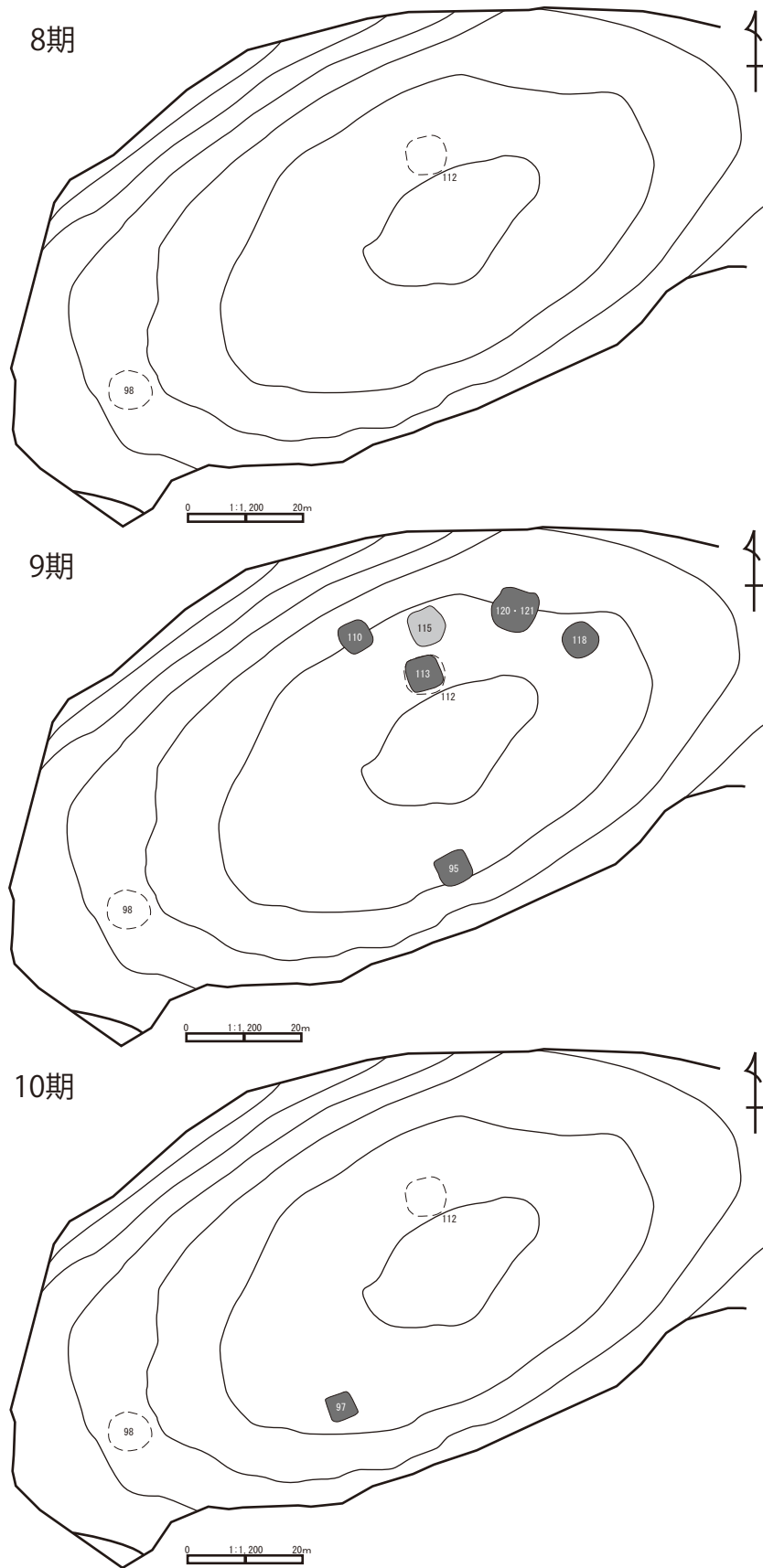


図25 妻木山地区2区西側8～10期

絶えている。ところが、5期には小規模な居住が再開しており、6期にかけて居住規模が拡大している。その後、7期に居住規模が縮小し、8期には再び居住が途絶えるが、9期には再開され、10期をもって、ここでの居住は終焉を迎える。

黒色系土壌の堆積は7・9・10期に埋没した竪穴住居跡に認められる。7期に埋没した竪穴住居跡のうち、黒色系土壌が堆積が認められるSI93は、8期に生じたとみられる居住の断絶にともなうものとみられる。9・10期に埋没した竪穴住居跡を埋める黒色系土壌は居住規模の縮小、終焉にともなうものだろう。9期に竪穴住居跡が分布する北よりには、新規に竪穴住居が営まれておらず、既に黒色系土壌の生成をうながす環境に移行しつつあったのかもしれない。

⑤ 妻木山地区3～6区東側

丘陵頂部から南北の斜面部に、21棟(うち時期不明4棟)の竪穴住居跡が検出されている(図2-h・図26-全期)。

1期 北よりの地点に2棟の竪穴住居跡(SI152・174)が、同時併存可能な位置関係を保って南北方向にならぶ。いずれも褐色系土壌が堆積している(図26-1期)。

2期 北よりの地点に2棟の竪穴住居跡(SII49・173)がある。1期の竪穴住居跡よりも東寄りに位置を変えており、同時併存可能な距離を保っている。いずれも褐色系土壌が堆積している(図26-2期)。

3・4期 この期間に埋没した竪穴住居跡は認められない(図27-3・4期)。

5期 北側の斜面部に1棟の竪穴住居跡(SII54)、南よりの緩斜面に2棟の竪穴住居跡(SII24・125)がある。いずれも同時併存可能な位置にあり、褐色系土壌が堆積している(図26-5期)。

6期 丘陵頂部をのぞいて、斜面地などに7棟の竪穴住居跡(SII22・126・150・153・169・170・175)がある。SII53・169に黒色系土壌が堆積するが、それ以外には褐色系土壌が堆積している。近接するSII69・170の同時併存は難しい。上層に堆積する土壌が異なっており、前後関係にある可能性が高い。併存可能な竪穴住居は最大5棟程度と考えられよう(図27-6期)。

7期 当該期に埋没した竪穴住居跡は認められない(図28-7期)。

8期 丘陵頂部北よりに1棟の竪穴住居跡(SII72)がある。黒色系土壌が堆積している(図28-8期)。

9期 丘陵頂部の中央から南よりに2棟の竪穴住居跡(SII29・171)がある。いずれも黒色系土壌が堆積している(図28-9期)。

10期 当該期に埋没した竪穴住居跡は認められない。

妻木山地区3～6区東側では、1・2期には2棟ほどの竪穴住居で構成される居住が行われているが、3・4期には居住地として利用されていない可能性がある。5期に2・3棟の竪穴住居で構成される居住が再開され、続く6期には居住の規模が拡大するが、7期には未利用地となり、8・9期には1・2棟の竪穴住居で構成される小規模な居住が再開している。

黒色系土壌の堆積は6期と8・9期の竪穴住居跡に認められる。6期の竪穴住居跡にある黒色系土壌は、7期に居住が途絶えたことを示すものだろう。8・9期にみられる黒色系土壌は、9期以降、居住の終焉にともなう、暫時、草原植生が発達したことを示すものかもしれない。

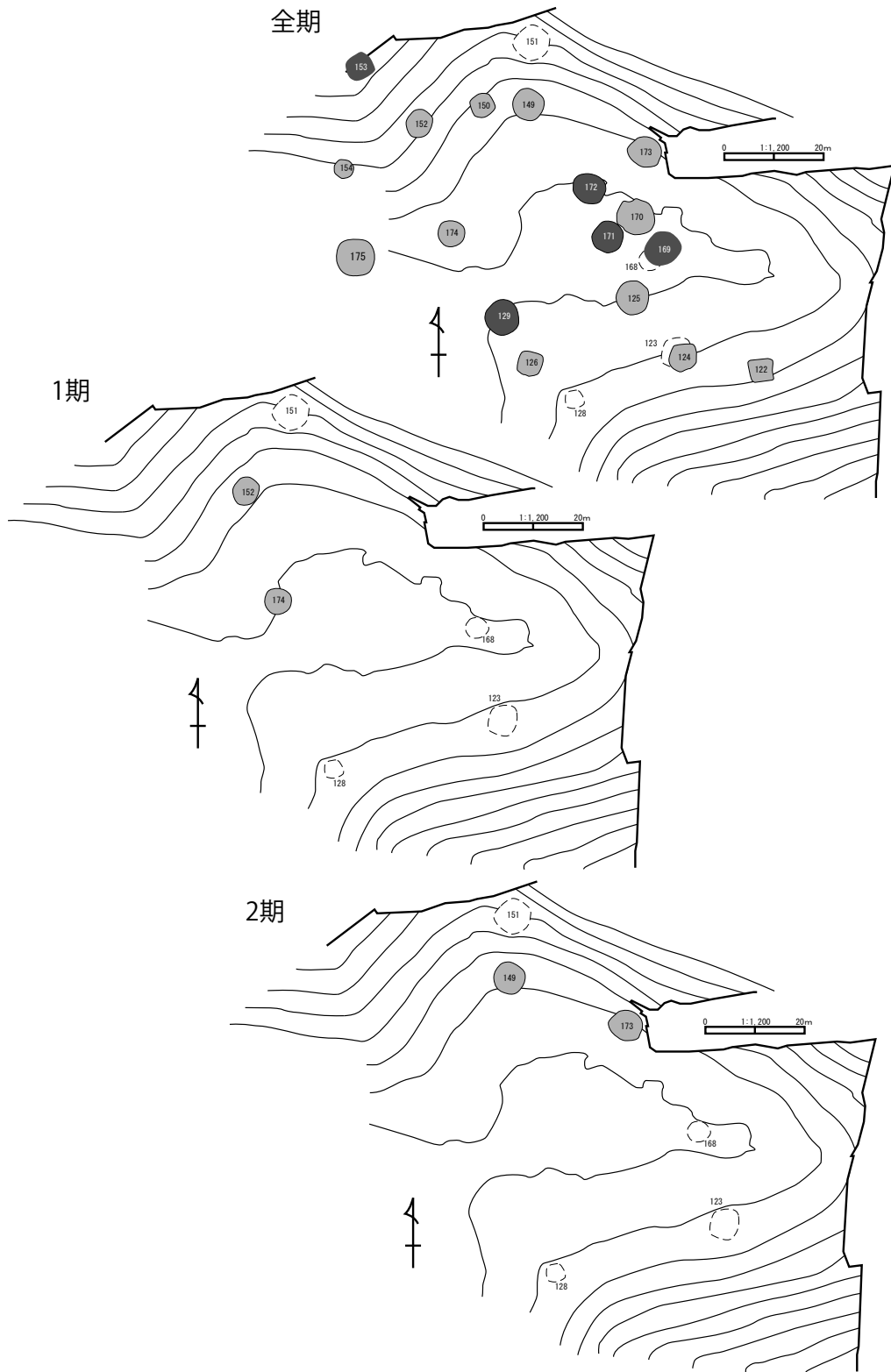


图26 妻木山地区3～6区东侧1～2期

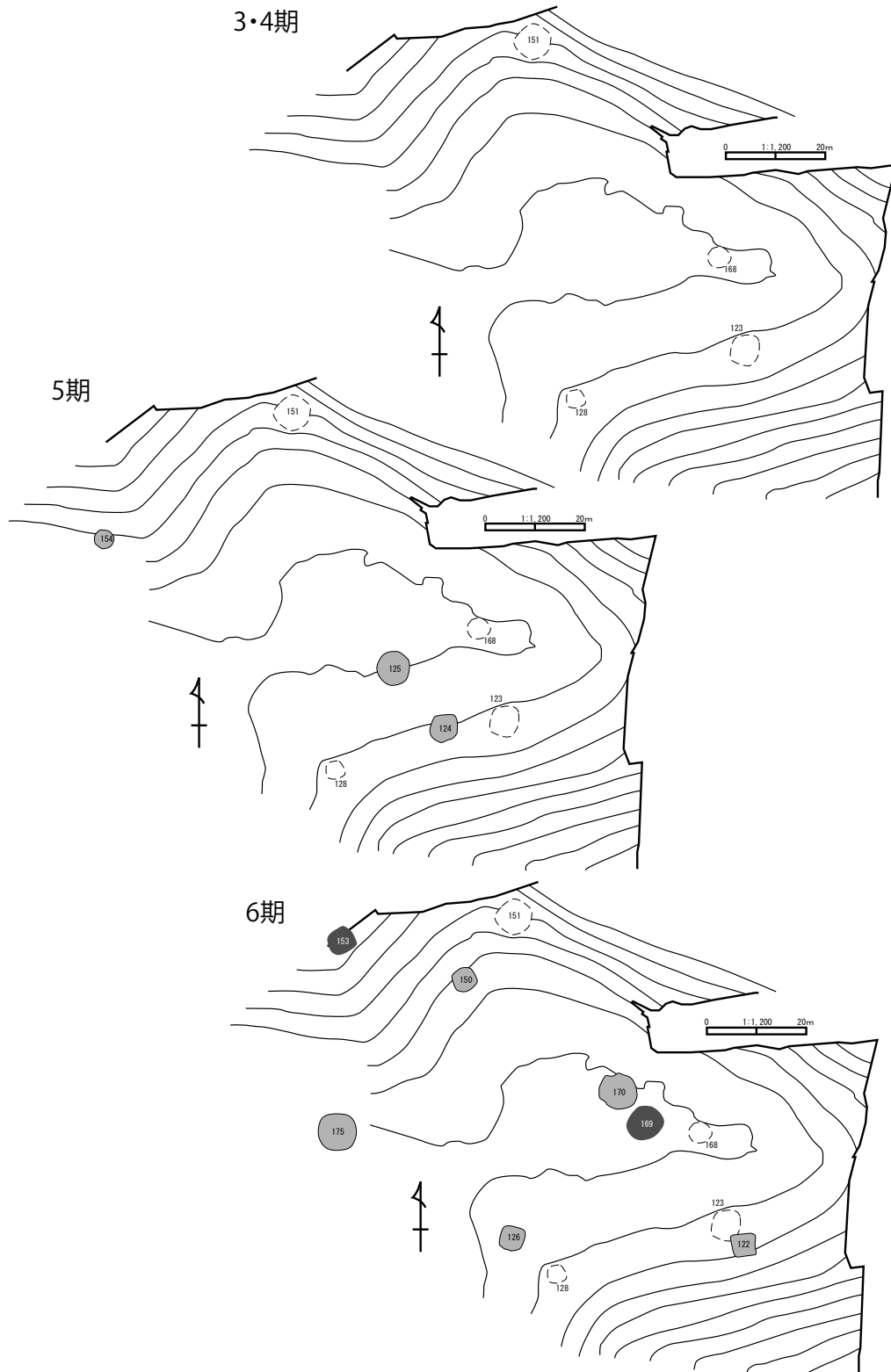


図27 妻木山地区3～6区東側3～6期

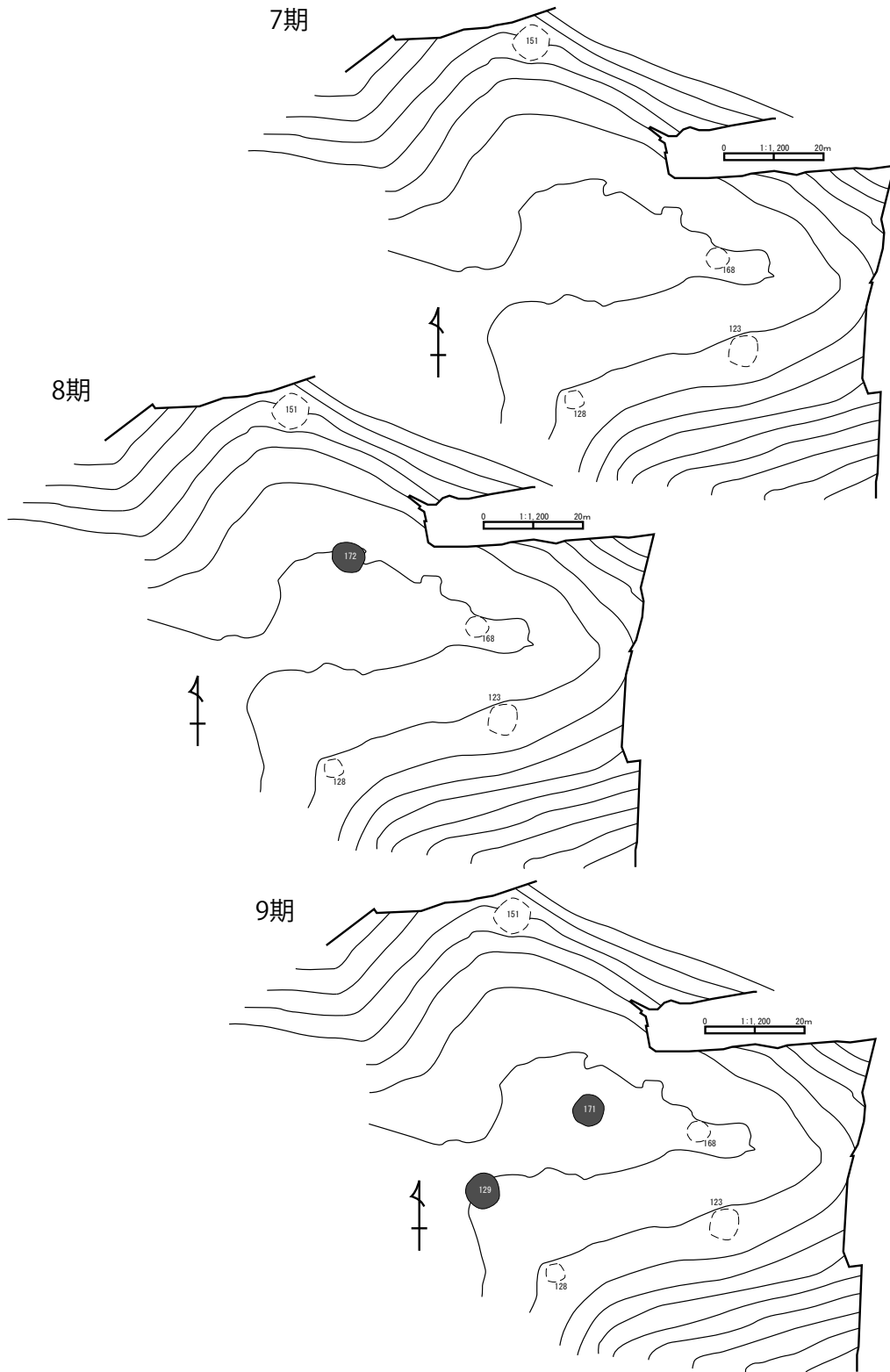


図28 妻木山地区3～6区東側7～9期

⑥ 妻木山地区3～6区西側

27棟(うち時期不明4棟)の竪穴住居跡がある。楕円形に高まる丘陵の最高所を空閑地として、その周囲に竪穴住居跡が分布しており、2つのまとまりが認められる(図2-i・図29-全期)。

1 期 調査区南端に1棟の竪穴住居跡(SI130)がある。黒色系土壌が皿状に堆積している(図29-1期)。

2 期 調査区中央よりに1棟の竪穴住居跡(SI139)がある。褐色系土壌が堆積している(図29-2期)。

3 期 地点を東にかえて、2棟の竪穴住居跡(SI137・140)がある。同時併存可能な位置関係にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図29-3期)。

4 期 調査区中央の西よりのほぼ平坦な地点に2棟の竪穴住居跡(SI143・157)がある。同時併存可能な位置にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図30-4期)。

5 期 調査区の南半に6棟の竪穴住居跡(SI131・132・134・135・138・145)がある。SI134・135がやや近接するが、いずれも同時併存可能な位置にあり、褐色系土壌が堆積している(図30-5期)。

6 期 丘陵頂部を介して、東に4棟の竪穴住居跡(SI133・136・141・142)、西に5棟の竪穴住居跡(156・160・161・163～165・166)、北に1棟の竪穴住居跡(SI155～156)がある。東群では、SI141・142が近接するが、他はそれぞれ併存可能な位置にある。SI136には黒色系、その他には褐色系土壌が堆積している。土壌の違いから、これらは前後関係があると考えられ、一時期には2棟程度の竪穴住居が併存していた可能性が高い。西群は群在しており、全てが併存するのは難しい。いずれも褐色系土壌が堆積しているが、一時期に併存可能なのは2・3棟であろう。また、北側の斜面地にあるSI155～156には黒色系土壌が堆積している(図30-6期)。

7・8期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図30-7・8期)。

9 期 北よりに1棟の竪穴住居跡(SI167)がある。褐色系土壌が堆積している(図30-9期)。

10 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

妻木山地区3～6区西側では、1期に小規模な居住が開始されている。時期不明の竪穴住居跡は、切り合い関係から5・6期以前のものと考えられ、1～4期には、時期不明のものとも組み合わせるものとして、2棟前後の竪穴住居で構成される居住が継続していたようだ。また、5・6期にかけて竪穴住居跡数が増加しており、5期に最大5棟、6期には東西各群2棟前後の併存が想定可能であるが、7・8期には居住に利用されていないとみられる。9期に小規模な居住が再開されるが、10期には既に居住が終焉している。竪穴住居跡の累積には2つのまとまりが看取できるが、実際に2群を形成していた可能性があるのは6期に限られている(図29-全期)。

黒色系土壌の堆積は1・6期の竪穴住居跡に認められる。1期にSI130が営まれた場所には、2期に竪穴住居は設けられていないため、その周囲が草原植生に覆われていた可能性がある。6期に埋没した竪穴住居跡にある黒色系土壌は、7・8期に居住が行われていないことを示すものだろう。

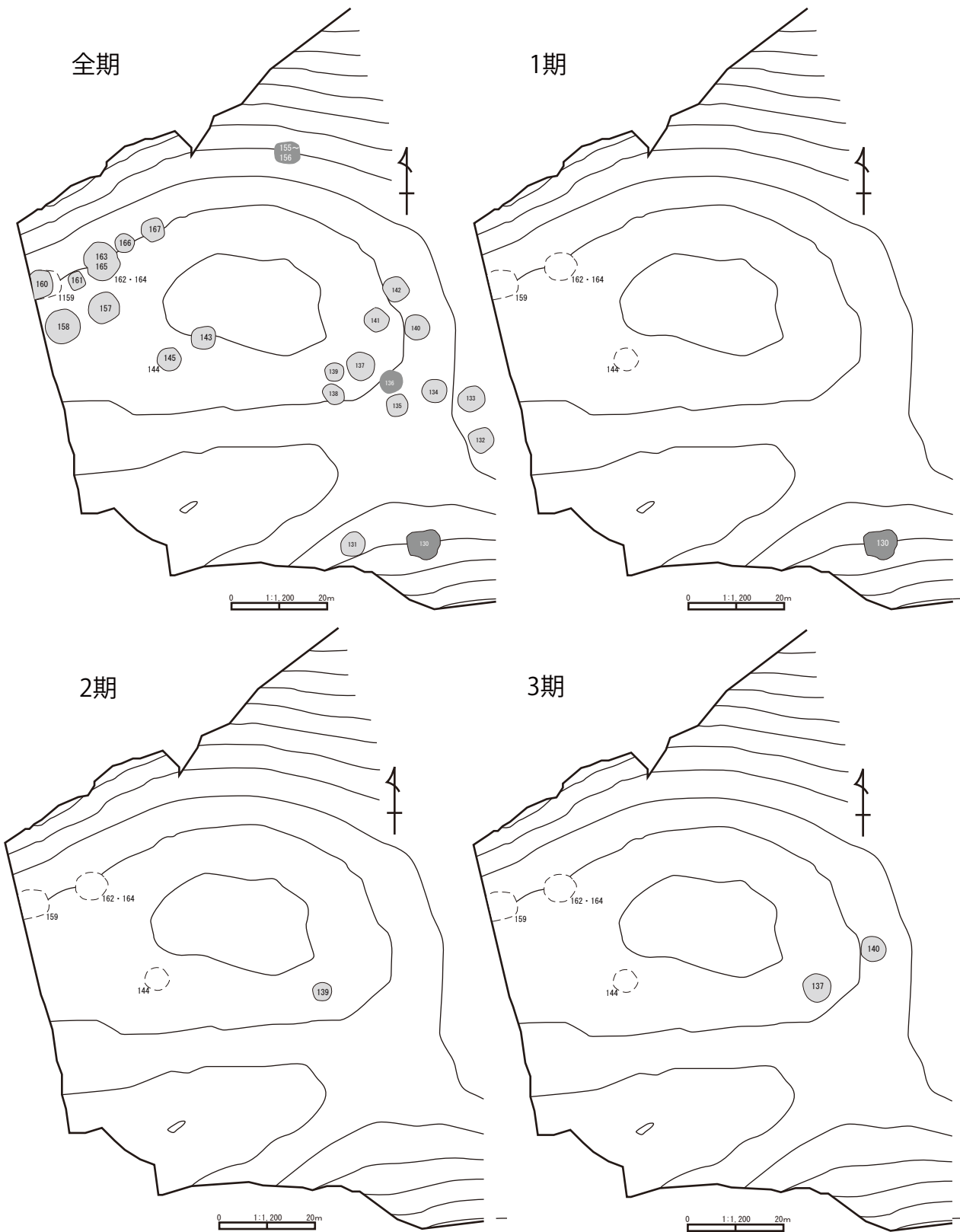


図29 妻木山地区3～6区西側1～3期

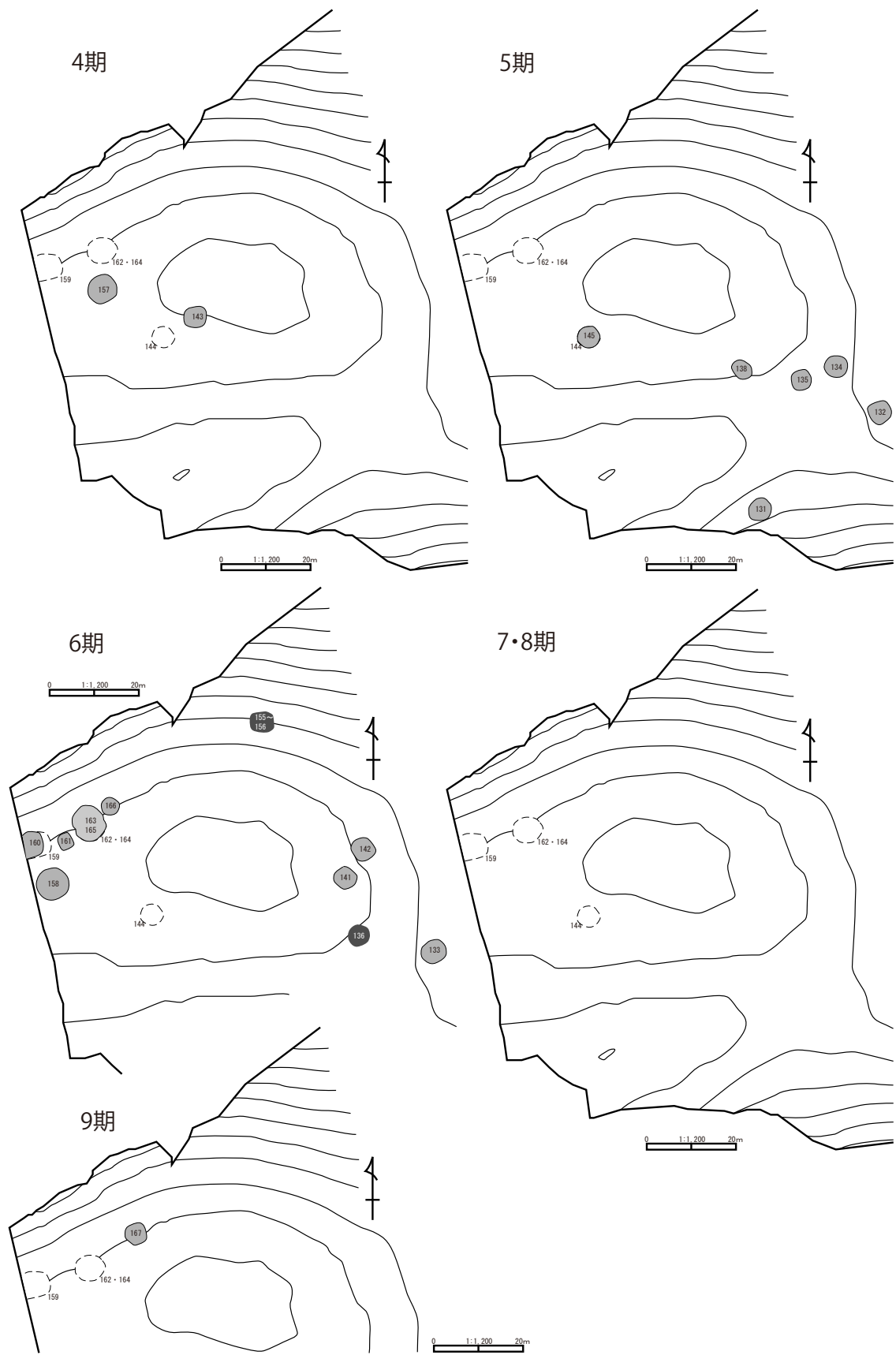


图30 妻木山地区3~6区西側4~9期

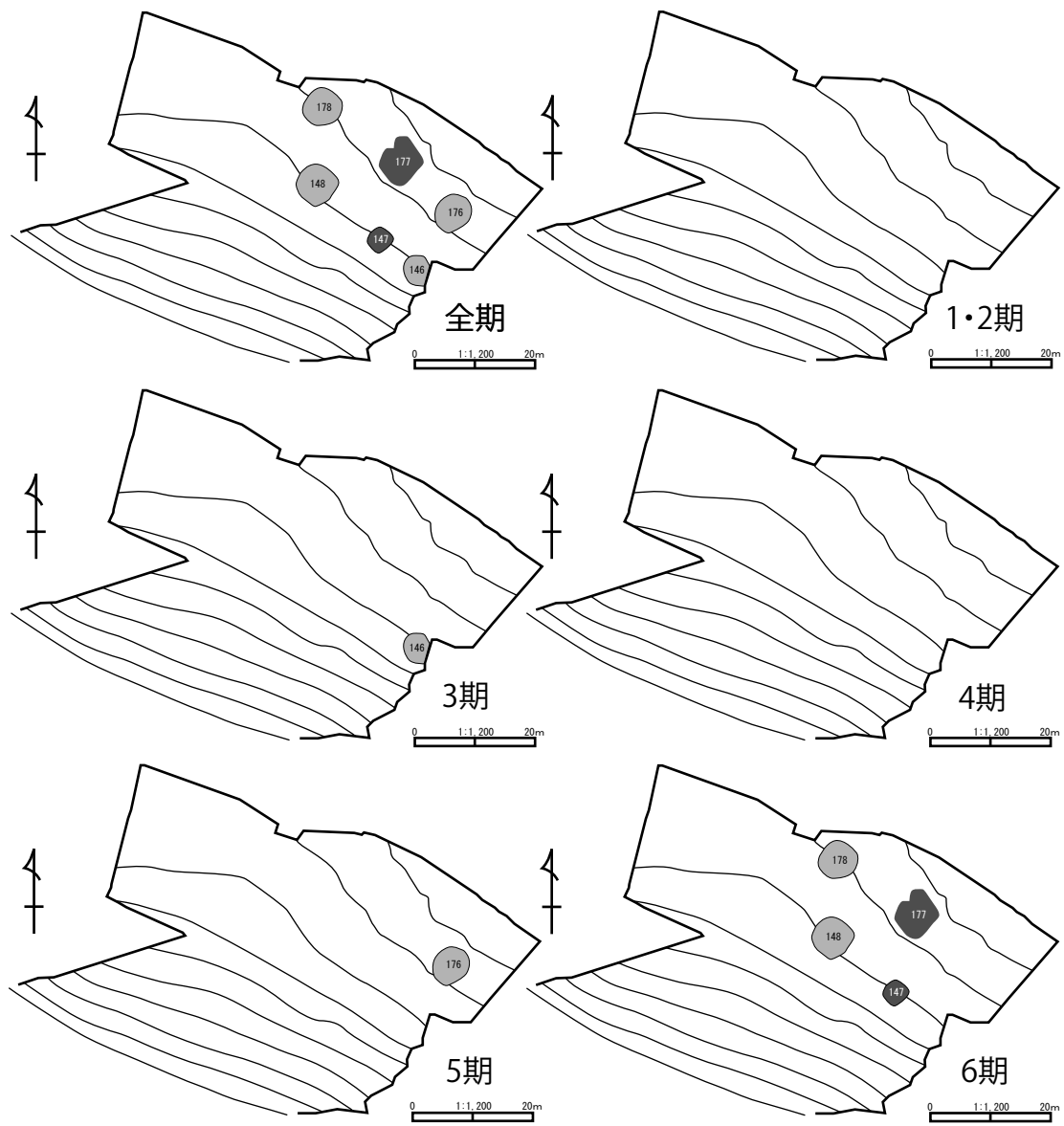


図31 妻木山地区7区1～6期

⑦ 妻木山地区7区

妻木山地区3～6区東側の北にある谷部の狭小な平坦地に6棟の竪穴住居跡がある(図2-j・図31-全期)。

- 1・2期 この期間に埋没した竪穴住居跡は認められない(図31-1・2期)。
- 3期 東よりに1棟の竪穴住居跡(SI146)がある。褐色系土壌が堆積している(図31-3期)。
- 4期 当該期に埋没した竪穴住居跡は認められない(図31-4期)。
- 5期 東よりに1棟の竪穴住居跡(SI176)がある。褐色系土壌が堆積している。
- 6期 ほぼ中央に4棟の竪穴住居跡(SI147・148・177・178)がある。いずれも同時併存可能な位置にある。SI148・178に褐色系、SI147・177に黒色系土壌が堆積している。埋土の色調に前

後関係がうかがわれることから、2棟程度の併存が考えられる(図6・図31-6期)。

7期以降 竪穴住居跡は認められない。

妻木山地区7区には、3期、5・6期に竪穴住居1・2棟ほどの小規模な居住が断続的に行われている。7期以降は未利用地となる。その後は草原植生へと遷移したものとみられ、6期に埋没した2棟の竪穴住居跡に黒色系土壌の堆積が認められる。

(3) 妻木新山地区

西方向に発達した大きな谷によって、妻木山地区と分けられる(図2)。遺跡内で最も北に位置する東西に長い丘陵で、中央部から北に深い谷があり、少し内傾したU字状をしている。1次調査時に1～3区が設けられ、丘陵頂部の広範囲が調査されている[松本他編2000]。この丘陵の東側にあり、南東から北西に延びる丘陵に設けられているのが1S区(図2-k・1)である。1S区には中央部に浅い谷が東西に派生しており、北側と南側に地形が分けられる。竪穴住居跡の分布も地形に対応しており、1S区を南側(図2-k)と北側(図2-1)に分ける。また、1区の西側にあり、東西に長く延びる丘陵部は2区(図2-m・n)である。中央部が緩やかに盛り上がり、その周囲と東側の緩斜面に竪穴住居跡が分布している。東側の緩斜面(図2-m)と、中央部(図2-n)に分ける。また、2区の西側から北に派生する丘陵が3区(図2-o)である。

① 妻木新山地区1S区南側

調査区南よりに広がる平坦部の周囲に15棟の竪穴住居跡がある(図2-k・図32-全期)。

1～3期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図32-1～3期)。

4期 北側の斜面地に2棟の竪穴住居跡(SI16・17)、平坦地の南奥に1棟の竪穴住居跡(SI04)がある。いずれも同時併存可能な位置にあり、褐色系土壌が堆積している(図32-4期)。

5期 北面する緩斜面と、やや中央よりに2棟の竪穴住居跡(SI08・15)がある。同時併存可能な位置にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図32-5期)。

6期 平坦部の西よりに空閑地をつくるように5棟の竪穴住居跡(SI01～02・05～06・09・12・13)が環状に分布する。SI12・13がやや近接する他は十分に併存可能な位置にある。SI01～02・09・12には褐色系、SI05～06・13には黒色系土壌が堆積しており、これが前後関係を示すとして、同時に併存していたのは2・3棟と推測される(図33-6期)。

7・8期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図33-7・8期)。

9期 平坦部を避けるように2棟の竪穴住居跡(SI03・SI14)がある。同時併存可能な位置にあるが、SI03には褐色系、SI14には黒色系土壌が堆積している。SI14にともなう黒色系土壌は薄く、褐色系土壌で埋まった後に生じた窪みを被覆するように堆積している(図33-9期)。

10期 平坦部の北辺に2棟の竪穴住居跡(SI10・11)、南東よりの緩斜面に1棟の竪穴住居跡(SI07)がある。いずれも併存可能な位置にある。いずれも1/2ほど褐色系土壌で埋まった後に、黒色系土壌が厚く堆積している。

妻木新山地区1S区南側では、4期までに居住が開始され、5期にかけて2棟程の竪穴住居で構成される小規模な居住が行われてる。6期には居住の規模が拡大しているようだが、7・8期には居住に利用されない期間がありそうだ。また、9期に再開した居住が、10期に継続している。

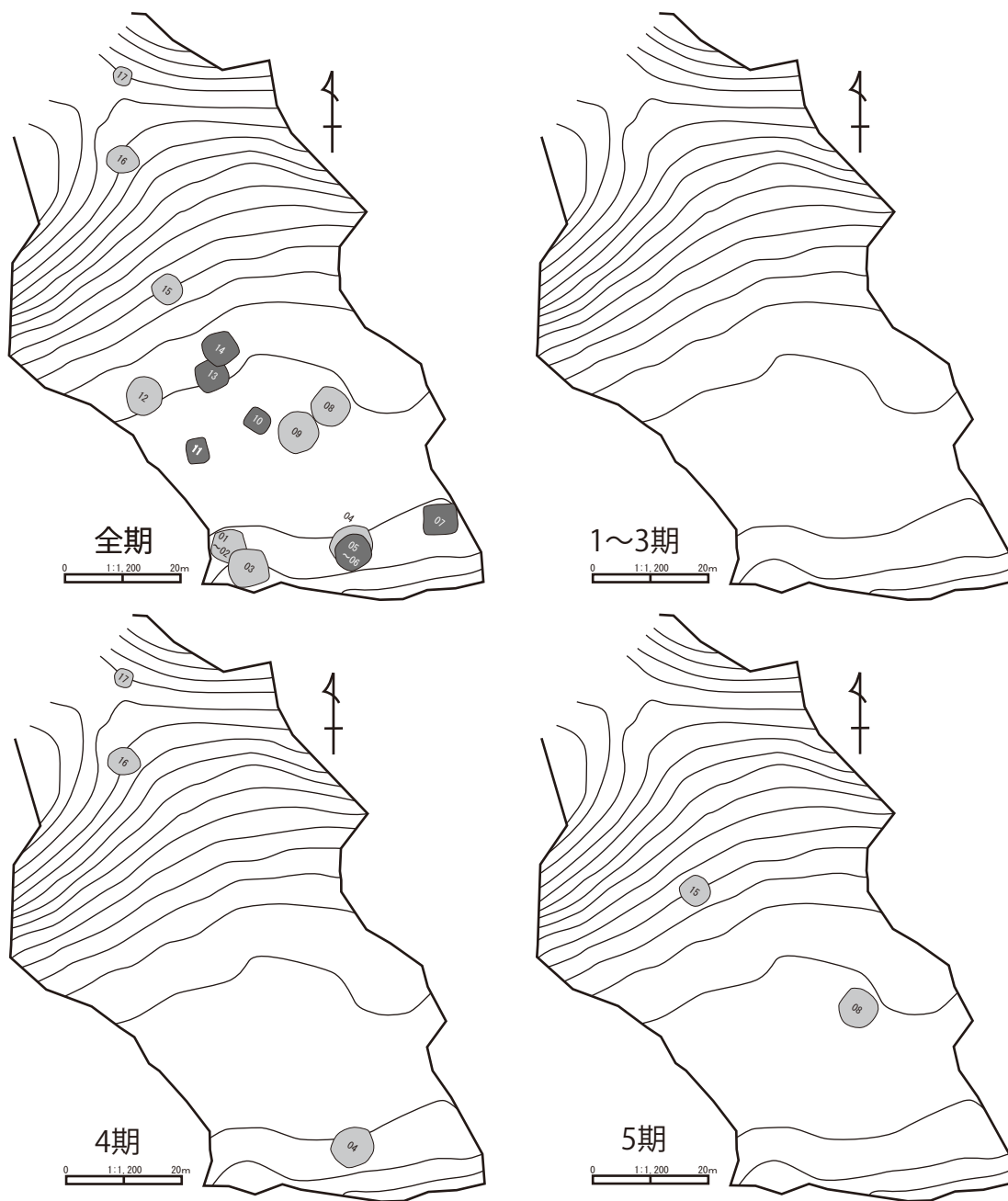


図32 妻木新山地区1S区南側1～5期

黒色系土壌の堆積は6期と9・10期の竪穴住居跡に認められる。6期に埋没した竪穴住居跡ともなう黒色系土壌は7・8期の居住に利用されない期間に堆積したと考えられる。また、10期に埋没した竪穴住居跡ともなう黒色系土壌はいずれも居住が終焉してから堆積したものであろう。かなりしっかりと黒色系土壌が堆積したものが多く、草原植生に覆われた当時には明瞭な窪地として痕跡を留めていたと考えられる。なお、9期のSI14ともなう黒色系土壌は、褐色系土壌でほぼ埋まりきった竪穴部を被覆しており、当地区での居住が終焉した後に堆積したものであろう。

② 妻木新山地区1S区北側

平坦部の周囲に11棟の竪穴住居跡がある(図2-1・図34-全期)。

1 期 平坦部の南よりに1棟の竪穴住居跡(SI23)がある。褐色系土壌が堆積している(図

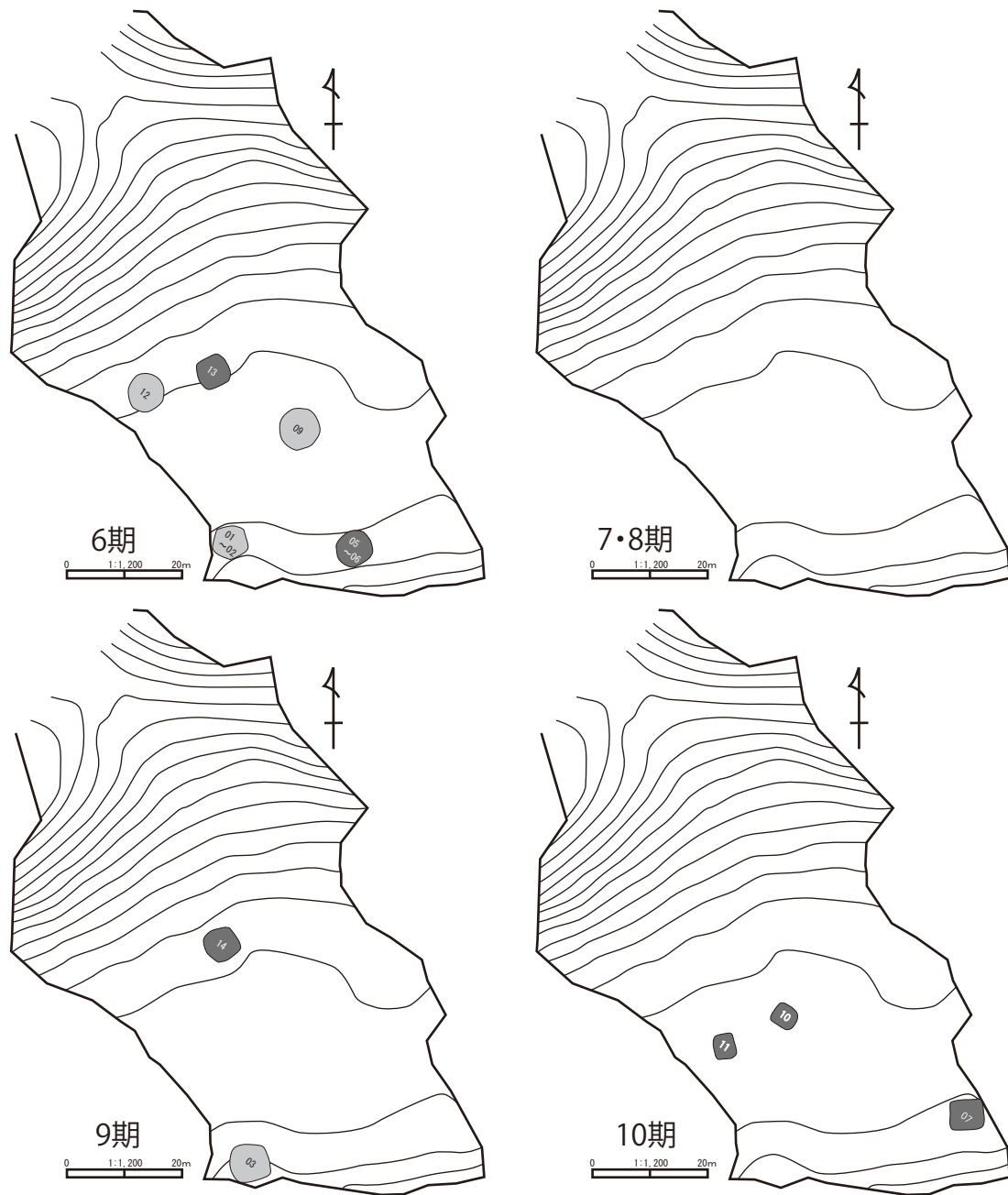


図33 妻木新山地区1S区南側6～10期

34-1期)。

2 期 平坦部の南東側に3棟の竪穴住居跡(SI18・19・21～22)、西側に1棟の竪穴住居跡(SI25)、北よりの斜面地に1棟の竪穴住居跡(SI29)がある。SI18の南西半分にSI19が重複する他はいずれも同時併存可能な位置関係にあり、褐色系土壌が堆積している(図34-2期)。

3 期 平坦部の西辺に3棟の竪穴住居跡(SI24・26・27)がある。いずれも同時併存可能な位置にある。SI24・27に褐色系土壌、SI26には黒色系土壌が厚く堆積している(図34-3期)。

4 期 平坦部の北側斜面部に1棟の竪穴住居跡(SI28)がある。褐色系土壌が堆積している(図34-4期)。

5 期 平坦部の南よりに1棟の竪穴住居跡(SI20)がある。褐色系土壌が堆積している(図

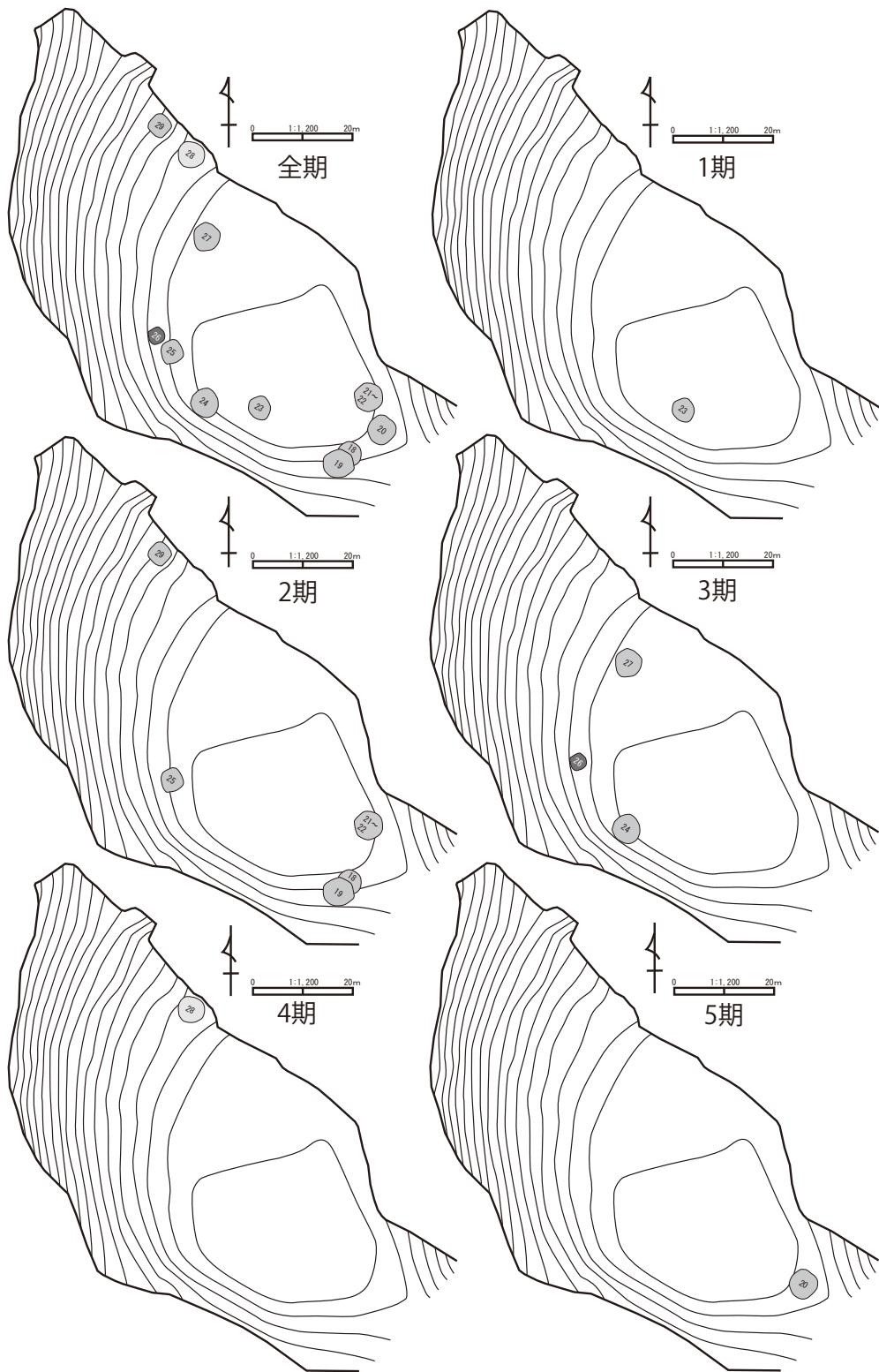


図34 妻木新山地区1S区北側1～5期

34-5期)。

6期以降 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

妻木新山地区1S区南側では、1期に居住が開始されており、2・3期には2・3棟の竪穴住居が同時併存していた可能性がある。しかし、4期には居住規模が縮小しており、6期以降は居住に利用されていないとみられる。黒色系土壌の堆積は3期にのみ認められる。黒色系土壌をともなうSI26の所在地は、4期以降は居住に利用されていないことから、早くに草原植生が形成されていた可能性がある。

③ 妻木新山地区2区東側

東よりの斜面部とその西よりの平坦部の周囲に18棟(うち時期不明1棟)の竪穴住居跡が分布している(図2-m・図35-全期)。

1 期 東向きの斜面部に4棟の竪穴住居跡(SI43・44・45・49・51)が散在している。いずれも同時併存可能な位置にあり、褐色系土壌が堆積している(図35-1期)。

2 期 東向きの斜面地に4棟の竪穴住居跡(SI46・47・50・52)、平坦部北辺に1棟の竪穴住居跡(SI42)がある。いずれも同時併存可能な位置にあり、SI42・46・47・50には褐色系土壌、SI52は褐色系土壌で埋まった後に上面の窪みを薄い黒色系土壌が覆っている(図35-2期)。

3 期 平坦部の北辺に1棟の竪穴住居跡(SI40)、東辺に1棟の竪穴住居跡(SI34)がある。同時併存可能な距離にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図36-3期)。

4 期 平坦部の北辺に2棟の竪穴住居跡(SI39・41)、南側の斜面地に1棟の竪穴住居跡(SI38)、東辺に2棟の竪穴住居跡(SI33・37)がある。SI39・41は近接するが、その他は同時併存可能な位置にある。SI33・38・39・41には褐色系土壌、SI37は褐色系土壌で埋まった後の痕跡に浅く黒色系土壌が堆積している(図36-4期)。

5～9期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図36-5期・図37-6～8期・図38-9期)。

10 期 平坦部の東よりにSI35～36がある。中央土坑を共有しており、連続的な建て替えが行われたものと判断できる。最上層には黒色系土壌が堆積している。なお、中層には黒色系土壌を混合する堆積がみられる(図38-10期)。

妻木新山地区2区東側では、1期までに数棟の竪穴住居で構成される居住が西よりの斜面地で始まっており、3期から4期には居住の場所を東よりの平坦地に移動しながら、居住が継続している。ところが、5期以降は、しばらく居住地として利用されていないようだ。10期には居住が再開するようであるが、確認できるのは竪穴住居跡1棟のみである。

黒色系土壌は2期と4期と10期に埋没した竪穴住居跡に堆積している。4期に認められる黒色系土壌は、5期以降、未利用期間が長くあったことを示すものだろう。10期に埋没した竪穴住居跡には、居住が終了した後に堆積したものと考えられる。また、10期のSI35～36には中層に黒色系土壌が混交した堆積が報告されている。SI36の壁を構成するSI35の埋土にも黒色系土壌が混交していることから、SI35～36の周囲に黒色系土壌が存在しており、SI35を埋め戻すさいに、黒色系土壌が混入したのだろう。5期以降の未利用期間に草原植生が形成され、その間に黒ボクが堆積していたことを示唆するものである。

④ 妻木新山地区2区中央

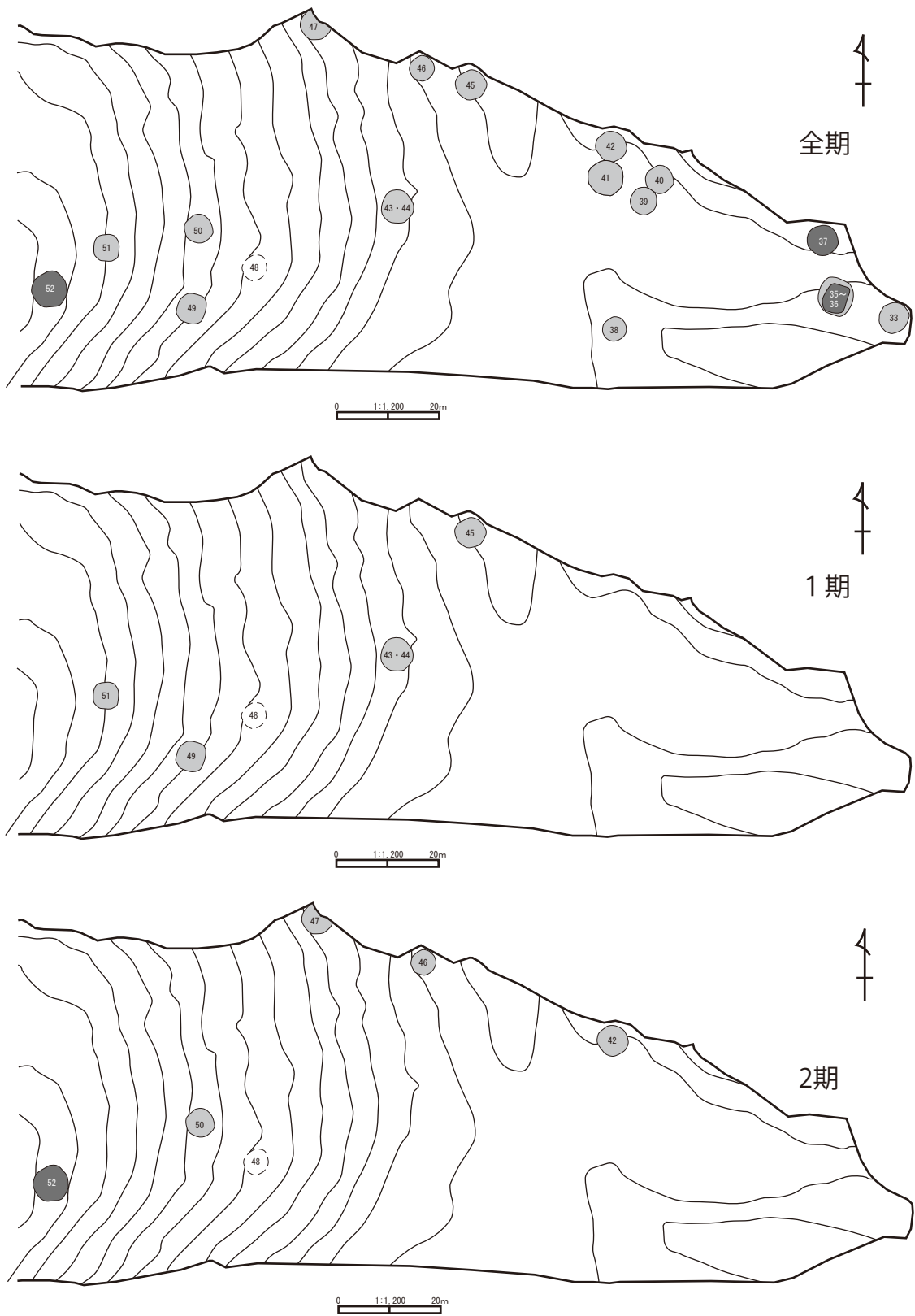


図35 妻木新山地区2区東側1～2期

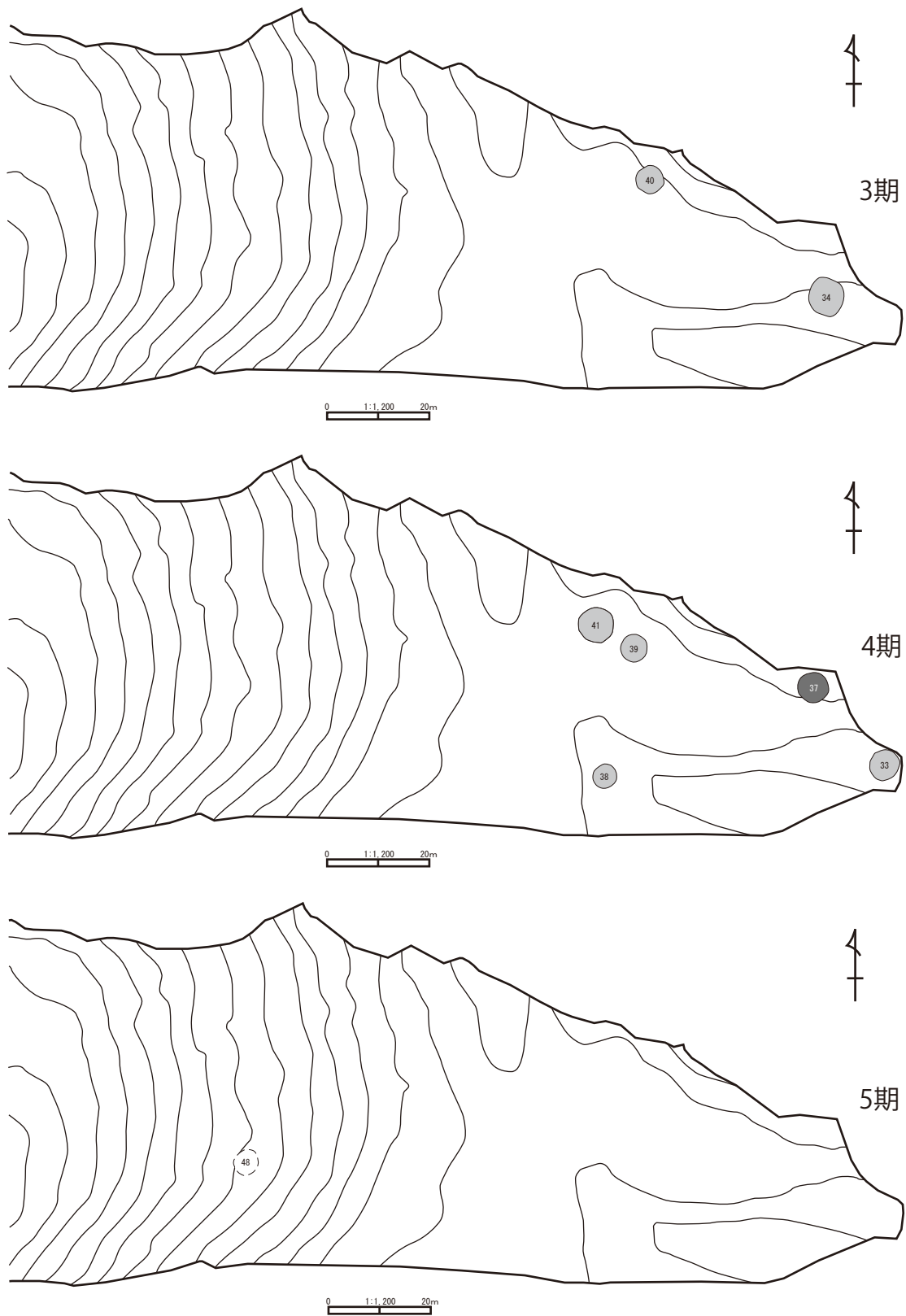


图36 妻木新山地区2区东侧3~5期

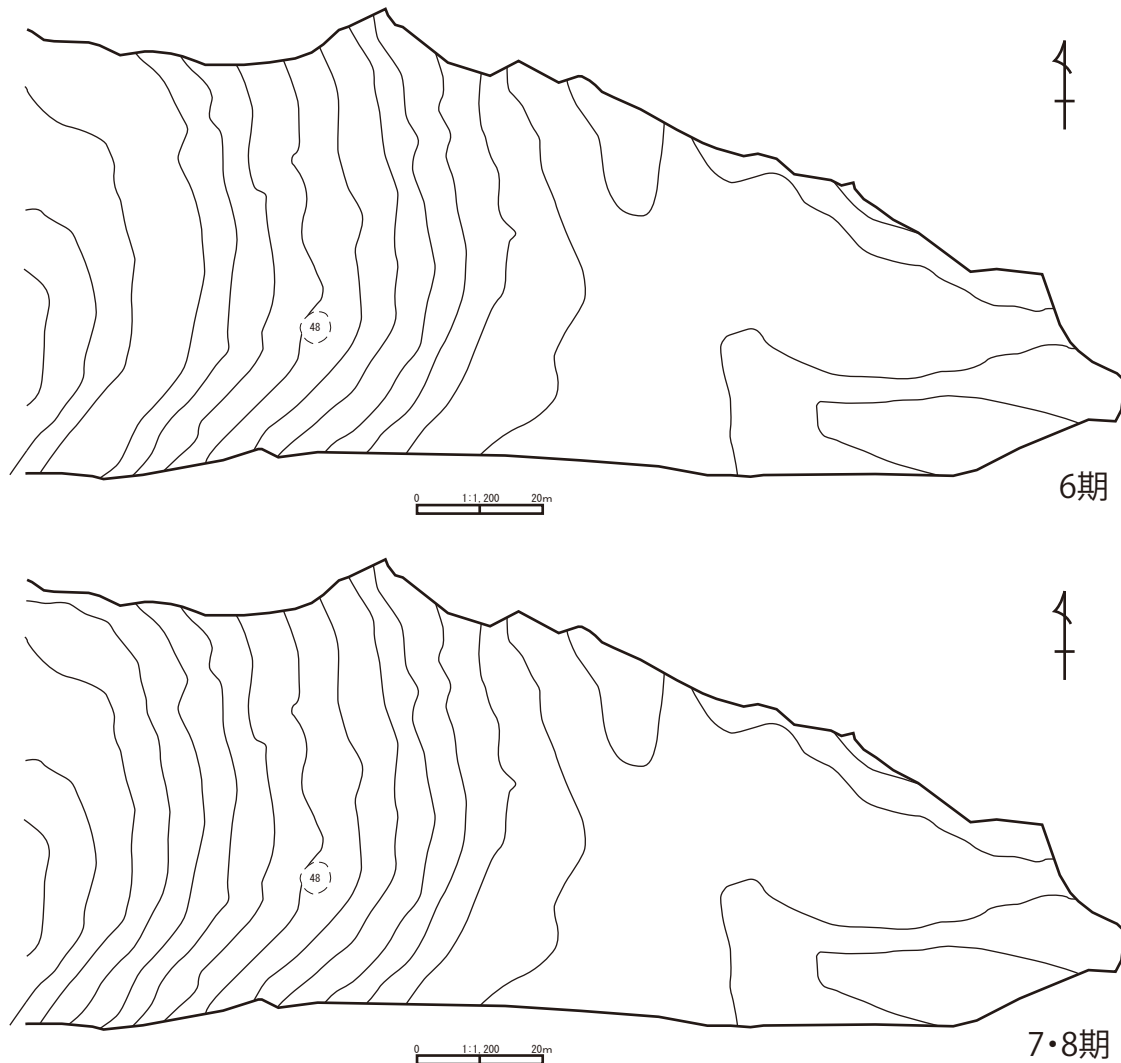


図37 妻木新山地区2区東側6～8期

- なだらかに高まる丘陵の緩斜面に16棟の竪穴住居跡がある(図2-n・図39-全期)。
- 1 期 南西斜面に1棟の竪穴住居跡(SI64)がある。褐色系土壌が堆積している(図39-1期)。
 - 2 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図39-2期)。
 - 3 期 東斜面に3棟の竪穴住居跡(SI53・54・58)がある。いずれも褐色系土壌が堆積している。SI53・54が近い位置にあるが、その他は十分に併存可能な位置にある(図40-3期)。
 - 4 期 東斜面に5棟の竪穴住居跡(SI55～56・57・59～61・62・63)、また、南西斜面にも1棟の竪穴住居跡(SI65)がある。SI57・59～61が近い位置にある他は、同時併存可能な位置にある。いずれも褐色系土壌が堆積している(図40-4期)。
 - 5 期 西斜面に1棟の竪穴住居跡(SI66)がある。黒色系土壌が堆積している(図40-5期)。
 - 6 期 北西斜面に1棟の竪穴住居跡(SI67)がある。褐色系土壌が堆積している(図41-6期)。
 - 7・8期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図41-7・8期)。
 - 9 期 西斜面に2棟の竪穴住居跡(SI68・71)がある。同時併存可能な位置にあり、SI71に黒色系土壌、SI68に褐色系土壌が堆積している(図42-9期)。
 - 10 期 引き続き、西斜面に1棟の竪穴住居跡(SI69)があり、褐色系土壌が堆積している。

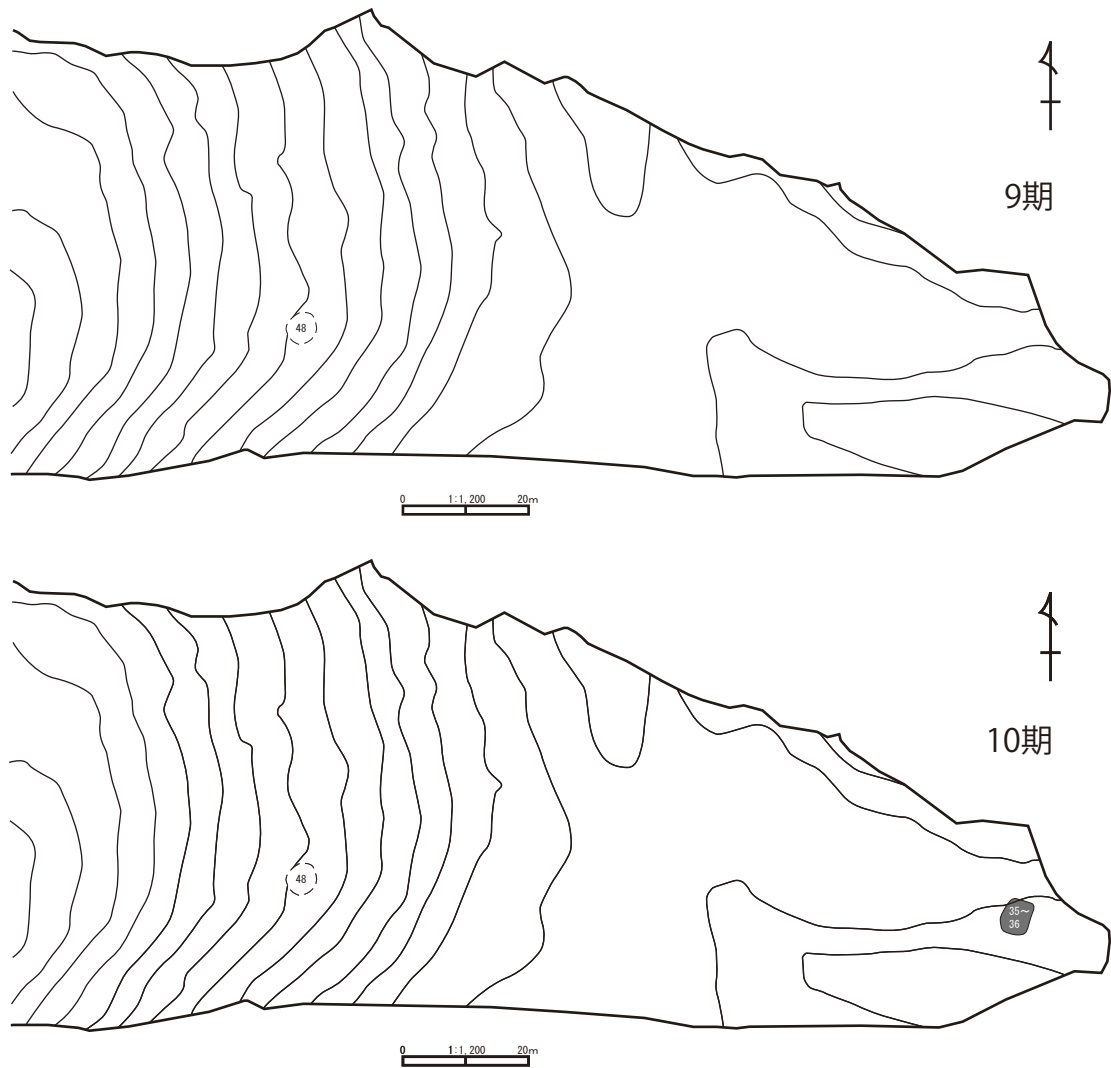


図38 妻木新山地区2区東側9～10期

埋没後、同位置にSI70が掘り込まれ、そこに黒色系土壌が堆積している(図42-10期)。

妻木新山地区2区中央では、1期までに小規模な居住が開始されているが、2期に一時未利地となっている可能性がある。3期には2棟程度の竪穴住居で構成される居住が再開しており、4期にかけて東斜面を中心に居住の規模が拡大している。しかし、5期には居住規模が縮小しており、居住場所が西斜面に移動しているようだ。その後、6期には規模を縮小し、7期には再び未利用地となっている可能性がある。また、9期に再開した小規模な居住が、10期にも継続している。

黒色系土壌の堆積は5期と9・10期に埋没した竪穴住居跡に認められる。5期に埋没したSI66には、小規模な居住を経て未利用地へと移行する7期にかけて黒色系土壌が堆積したものだろう。9期のSI66、10期のSI70には居住の終焉にともない黒色系土壌が堆積したものと考えられる。

⑤ 妻木新山地区3区

北に傾斜する尾根部に14棟の竪穴住居跡が分布している(図2-0・図43-全期)。

1 期 中央やや南よりの斜面地に2棟の竪穴住居跡(SI73・76)がある。同時併存可能な位置にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図43-1期)。

2 期 北よりの緩斜面から平坦な地形に3棟の竪穴住居跡(SI77・78・83)がある。同時併存可能な位置にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図43-2期)。

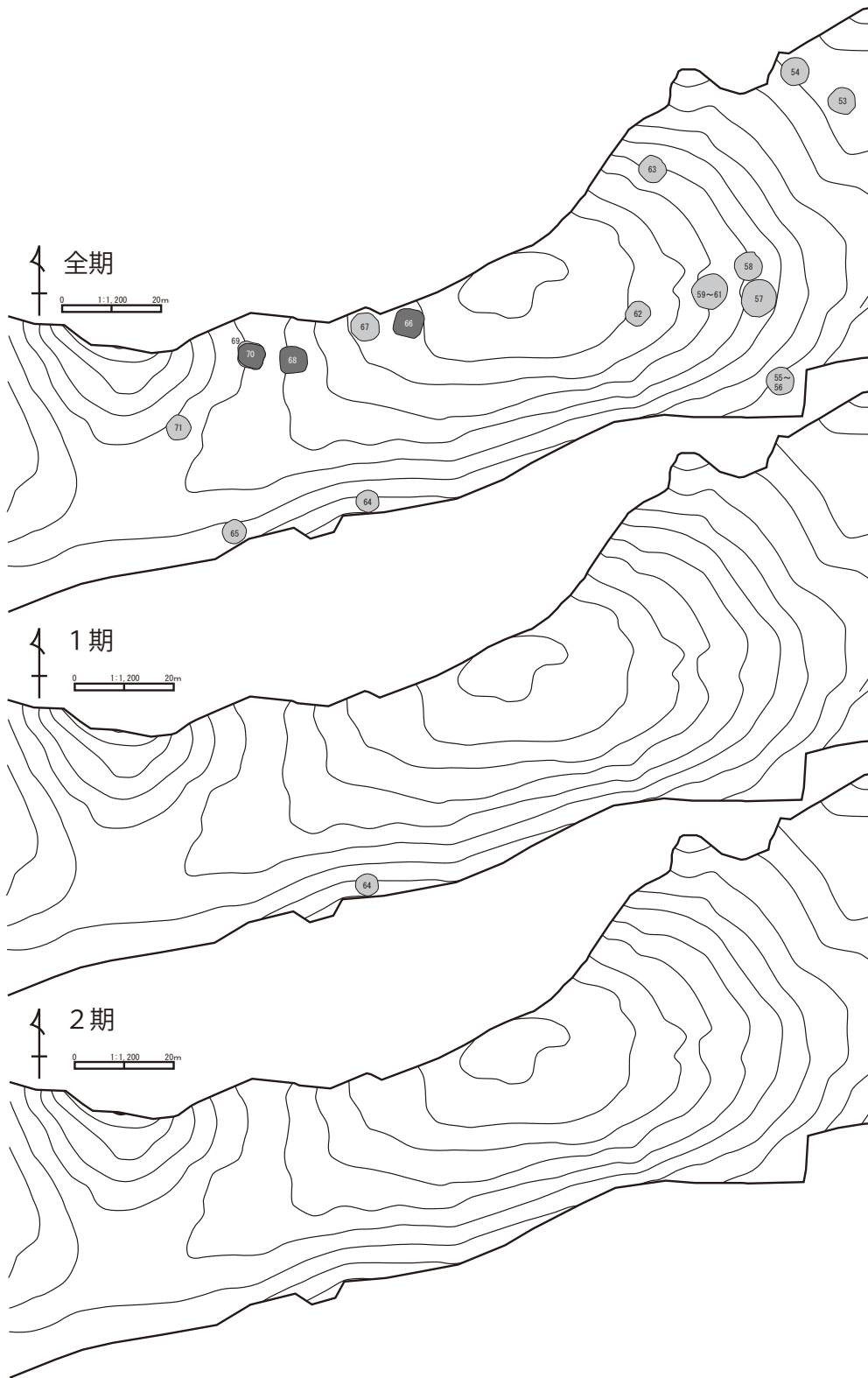


図39 妻木新山地区2区中央1～2期

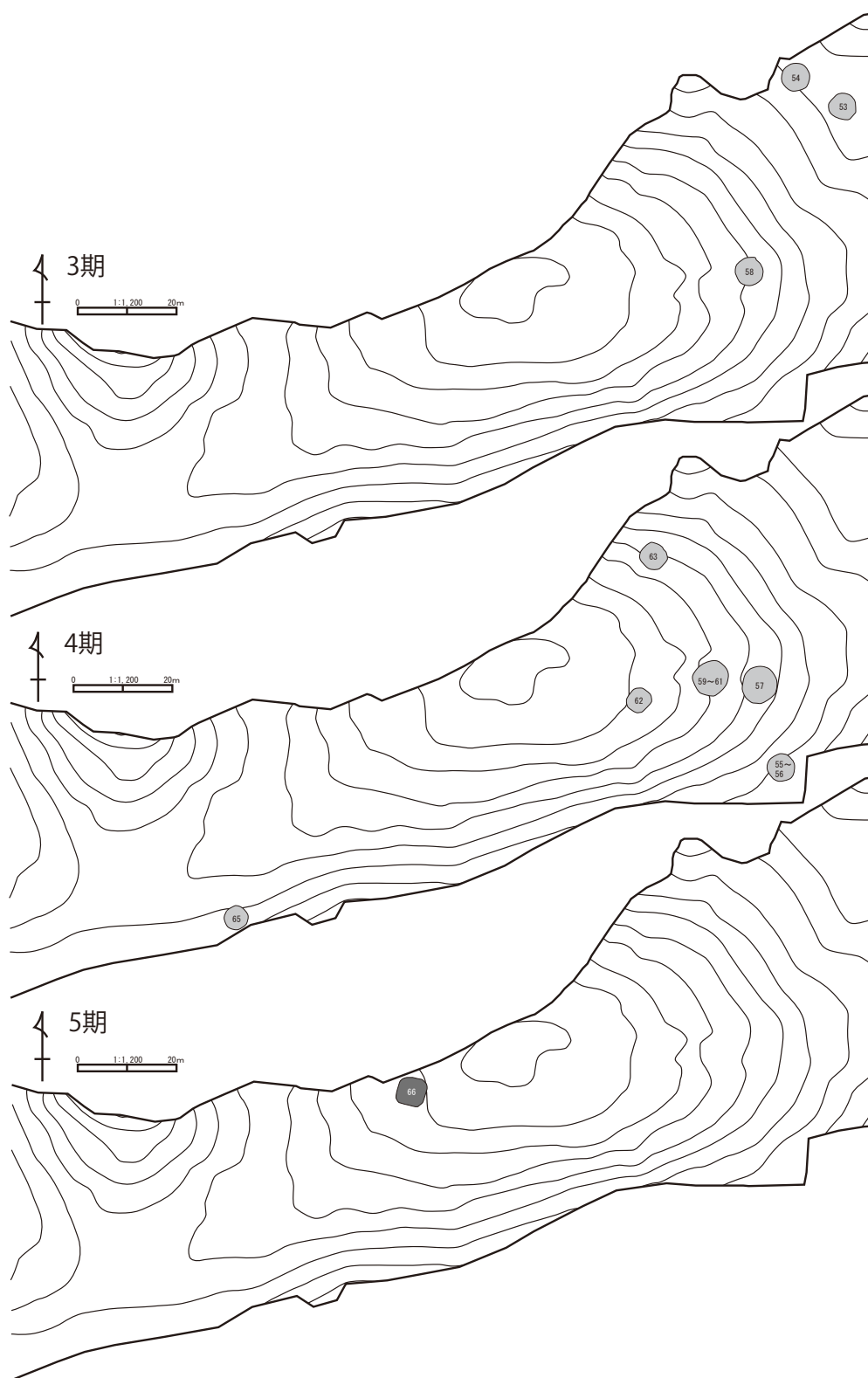


図40 木新山地区2区中央3～5期

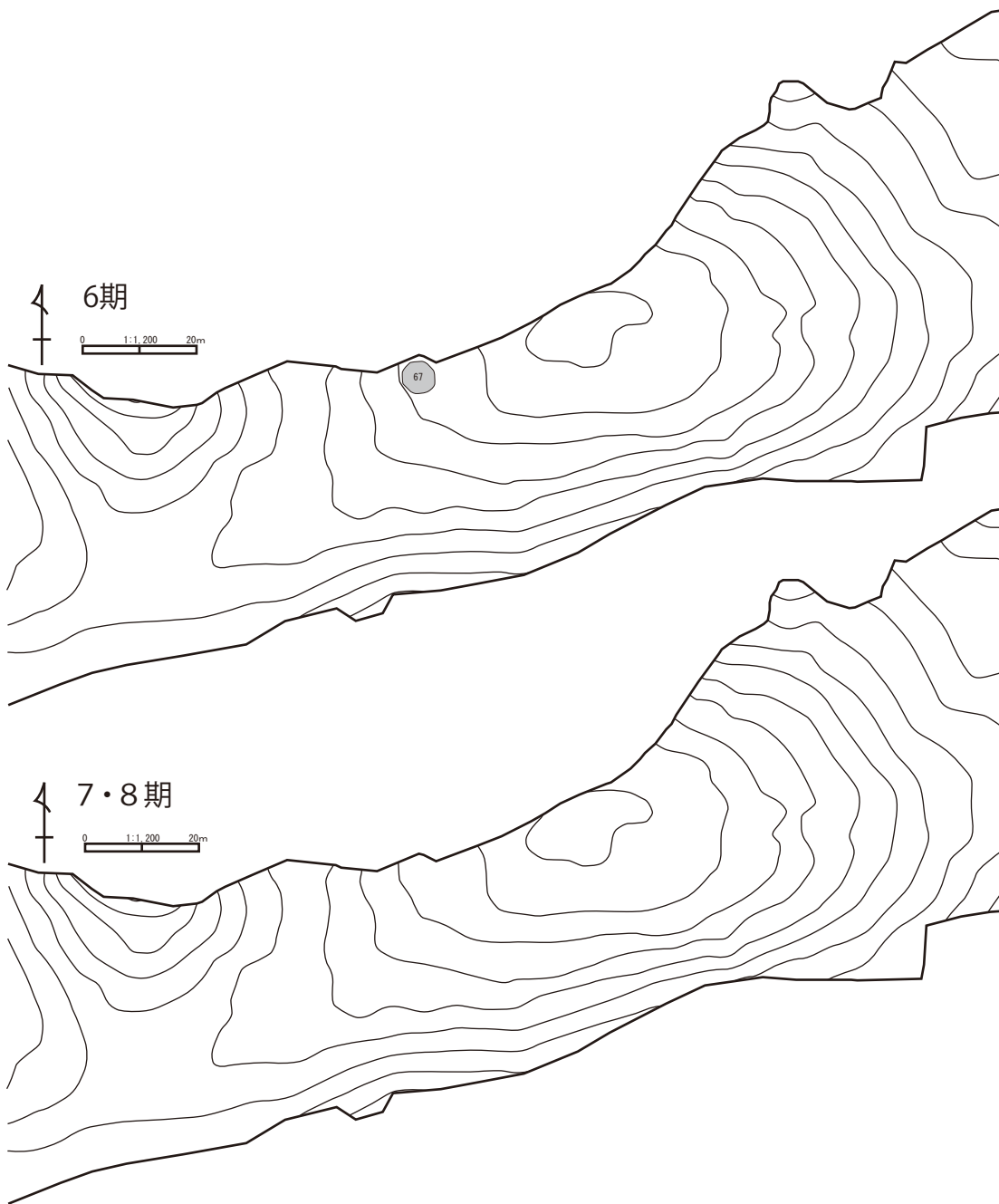


図41 妻木新山地区2区中央6～8期

3～5期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない(図 43-3～5期)。

6 期 北よりの平坦地の周辺に3棟の竪穴住居跡(SI79・82・85)がある。同時併存可能な位置にあり、SI79・82には褐色系、SI85の上層には黒色系土壌が堆積している(図 44-6期)。

7 期 当該期に埋没した竪穴住居跡は認められない(図 44-7期)。

8 期 南よりの斜面地に1棟の竪穴住居跡(SI72)がある。褐色系土壌が堆積している(図 44-8期)。

9 期 西よりに4棟の竪穴住居跡(SI74・75・80・84)がある。同時併存可能な位置にあり、いずれも褐色系土壌が堆積している(図 44-9期)。

10 期 西よりに1棟の竪穴住居跡(SI81)がある。褐色系土壌が堆積している(図 44-10期)。

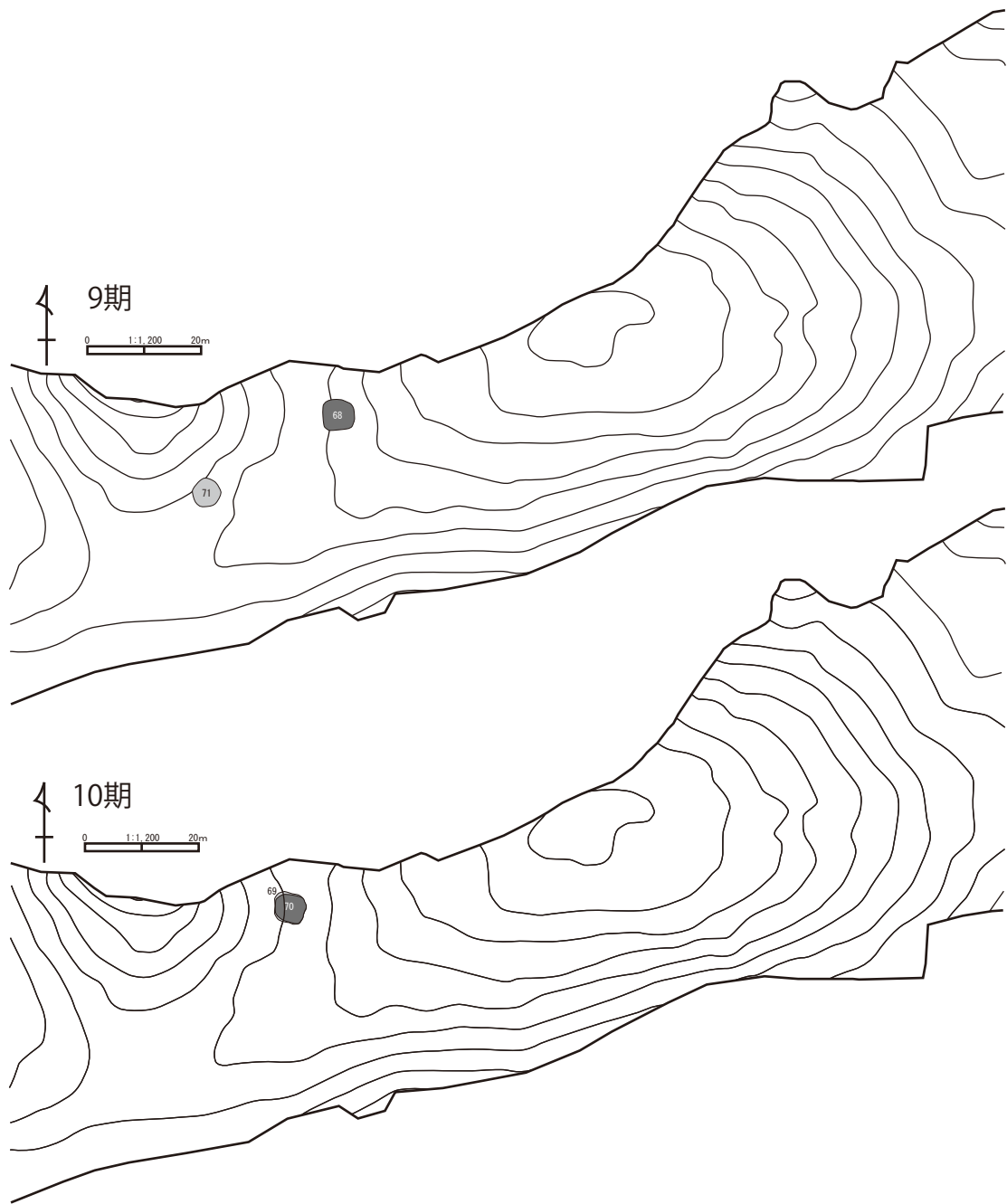


図42 妻木新山地区2区中央9～10期

妻木新山地区3区では、1期までに居住が開始されており、2・3棟の竪穴住居で構成される居住
が2期まで継続した後、3～5期には居住に利用されない期間がありそうだ。6期には2・3棟の竪
穴住居で構成される居住が再開するが、7期には居住が途絶え、8期に再開された居住が10期まで
継続している。なお、9期に居住の規模が拡大しているようにみえる。黒色系土壌は6期に埋没し
た竪穴住居跡に堆積している。7期の居住の断絶を示すものだろう。

(4) 松尾城地区

妻木晩田遺跡の最も東側に位置する標高の高い丘陵である。大きな谷によって、丘陵は東西に2

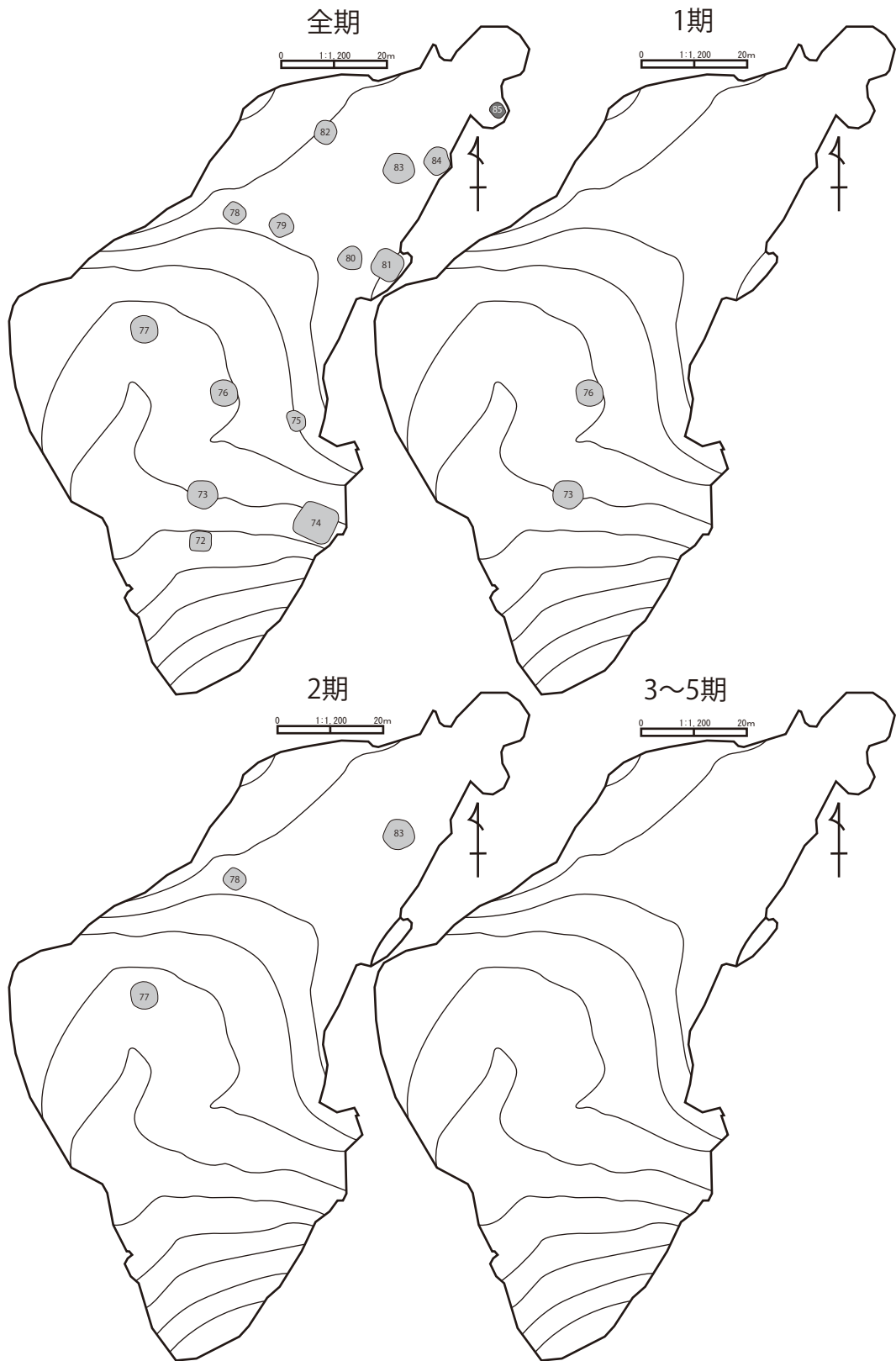


图43 妻木新山地区3区1 ~ 5期

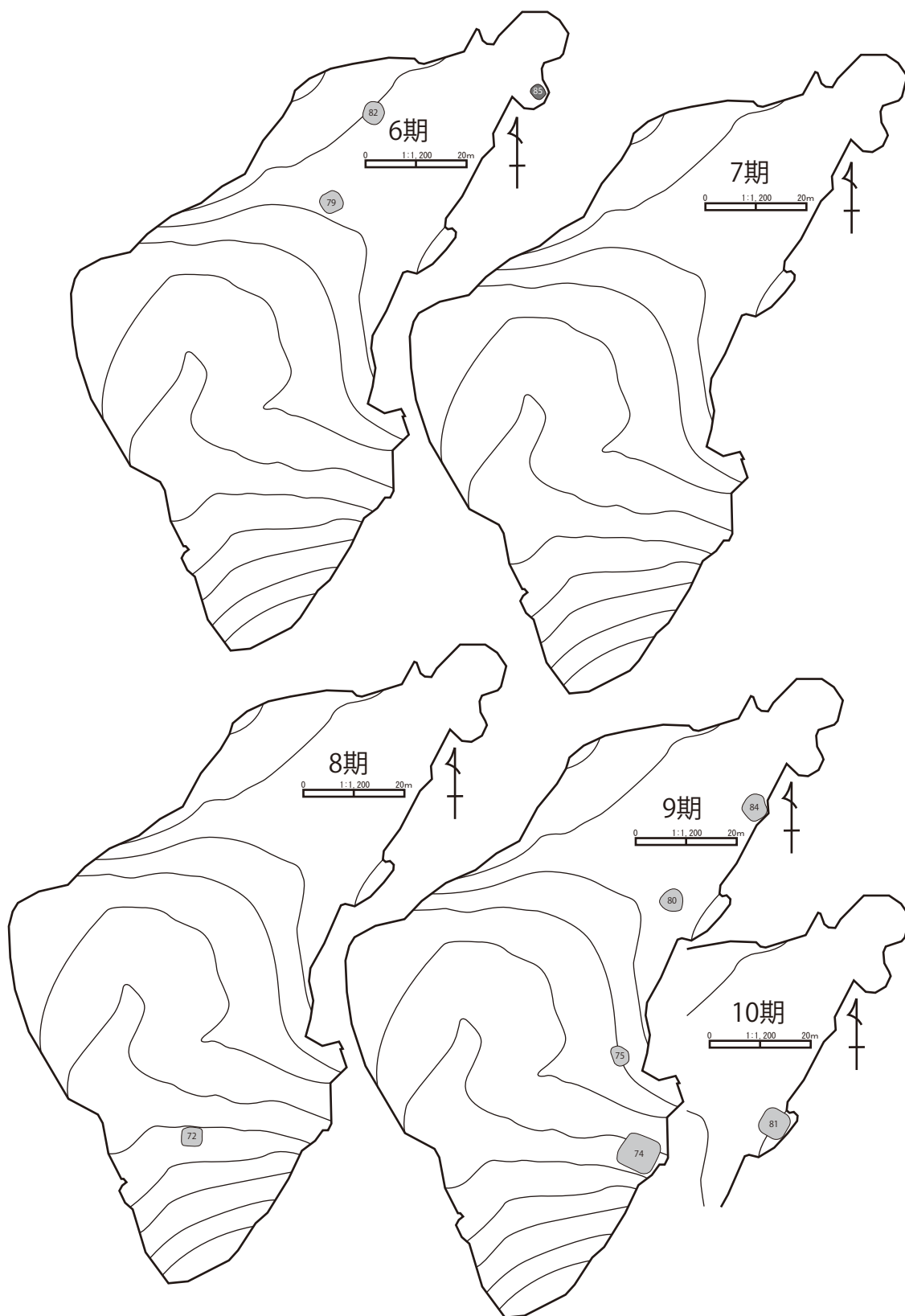


图44 妻木新山地区3区6～10期

分されるが、竪穴住居跡が分布しているのは、西側の丘陵である(図2)。断続的な居住が認められるが、ここでは概要をまとめておく。

① 松尾城地区1区

東から西へ下る斜面部に4棟の竪穴住居跡が分布している(図2-p)。

1～5期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

6期 調査区の西端に1棟の竪穴住居跡(SI03)がある。黒色系土壌が堆積している。

7期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

8期 調査区の東端に1棟の竪穴住居跡(SI04)がある。黒色系土壌が堆積している。

9期 調査区の西端に1棟の竪穴住居跡(SI02)がある。黒色系土壌が堆積している。

10期 調査区の西端に1棟の竪穴住居跡(SI01)がある。褐色系土壌が堆積している。

松尾城地区1区では、6期に小規模な居住が開始される。7期には一時的に居住が途絶えているが、8期には居住が再開しており、その後、10期まで居住地として利用されている。その間、居住の規模が拡大する様子もなく、狭小な平坦面を利用して、小規模な居住が行われている。黒色系土壌は、6・8・9期に埋没した竪穴住居跡に認められるが、10期に埋没しているSI01には黒色系土壌は堆積していない。6期の竪穴住居跡にともなう黒色系土壌は、7期に居住が行われていないことを示すものだろう。8・9期の竪穴住居跡に堆積している黒色系土壌は、10期以降に堆積したものかもしれないが、ここでの居住は規模が小さいので、一時的な居住の断絶が度々あったのかもしれない。

② 松尾城地区2区

斜面地に6棟(うち時期不明1棟を含む)の竪穴住居跡が分布している(図2-q)。

1～5期 この期間に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

6期 調査区中央の斜面部に2棟の竪穴住居跡(SI11・12)がある。やや近接するが併存も不可能ではない位置関係にあり、いずれも黒色系土壌が皿状に堆積している。

7期 調査区南側、丘陵頂部に近い緩やかな地形に1棟の竪穴住居跡(SI08)がある。褐色系土壌が堆積している。

8期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

9期 調査区南側、丘陵頂部に近い緩やかな地形に1棟の竪穴住居跡(SI09)がある。黒色系土壌が薄く堆積している。

10期 調査区中央の斜面部に1棟の竪穴住居跡(SI10)がある。黒色系土壌が皿状に薄く堆積している。

松尾城地区2区では、6期に小規模な居住が開始され、7期にSI08が埋まった後、8期に一時的な断絶があるようだ。また、9期には小規模な居住が再開されるが、10期をもって居住は途絶える。黒色系土壌は6期と9・10期の竪穴住居跡に認められる。6期の竪穴住居跡の上層に堆積した黒色系土壌は、8期の断絶にともなうものであろう。9期の竪穴住居跡にみられる黒色系土壌は、9期から10期にかけて一時的断絶があったことを示す可能性もあるが、居住が終焉した後に堆積したものかもしれない。

③ 松尾城地区3・4・5区

2区から北に派生する丘陵上に設けられた3区北側(図2-r)には、10期に埋没した2棟の竪穴

住居跡(SI13・14)がある。いずれも黒色系土壌が皿状に厚く堆積している。また、谷を介して2区の西側の丘陵に設けられた4区(図2-s)には、9期に埋没した1棟の竪穴住居跡(SI15)があり、黒色系土壌が皿状に堆積している。最も北に位置する斜面地に設けられた5区(図2-t)には3棟(うち時期不明1棟)の竪穴住居跡がある。6期に埋没した竪穴住居跡(SI17)、7期に埋没した竪穴住居跡(SI18)がある。いずれも黒色系土壌が堆積している。どうやら、松尾城地区では、6期以降、小規模な居住域が点々と開かれているが、それらは断続的なもので、長期的な営みは希薄である。したがって、直ぐに草原に覆われやすい環境にあったと考えられる。

(5) 洞ノ原地区

妻木山地区の西側にある。洞ノ原地区東側丘陵と洞ノ原地区西側丘陵からなる(図2u・v)。

① 洞ノ原地区東側丘陵

なだらかで東西に長い丘陵である。海岸線に面した丘陵西端に洞ノ原墳墓群がある。8棟の竪穴住居跡が丘陵東側に点在している(図2-u)。

1～3期 洞ノ原墳墓群が造営されており、竪穴住居跡は確認できない。

4期 洞ノ原墳墓群の造営が終わる。最も墳墓群から距離を置いた場所に1棟の竪穴住居跡(SI01)がある。褐色系土壌が堆積している。

5期 1棟の竪穴住居跡(SI02)がある。黒色系土壌が堆積している。

6期 2棟の竪穴住居跡(SI03～04・08)がある。同時併存可能な位置にあり、いずれも黒色系土壌が堆積している。SI08はほぼ床面上から厚く黒色系土壌が堆積している希少な事例である。

7期 調査区の北側斜面に1棟の竪穴住居跡(SI07)がある。黒色系土壌が堆積している。

8期 調査区の北東斜面に1棟の竪穴住居跡(SI06)がある。黒色系土壌が堆積している。

9期 調査区の北東斜面に1棟の竪穴住居跡(SI05)がある。黒色系土壌が堆積している。

10期 当該期に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

洞ノ原墳墓群の造営が終了する4期頃、墓域とは距離をおいて、居住域が形成される。その後、9期まで小規模な居住が認められる。4期を除く各時期の竪穴住居跡に黒色系土壌がしっかりと堆積しており、ここでの居住が断続的なものであった可能性をうかがわせている。また、唯一、洞ノ原墳墓群に隣接する地点に設けられたSI08だけは、床面直上から黒色系土壌が堆積している。SI08は調査前に周堤の盛り上りも確認されており、竪穴住居の廃絶時に周堤が突き崩されていないとみられ、ほとんど埋め戻されない状態で放置された状態にあったと思われる。

② 洞ノ原地区西側丘陵

妻木晩田遺跡の西端に位置する眺望に優れた丘陵である(図2-v)。後世に複数の古墳が造営されており、弥生時代に設けられた竪穴住居跡の数が正確に把握できない。また、丘陵の南よりに複数の竪穴住居跡が重複するが、現状保存のため、その地点に群在する竪穴住居跡の数、時期は不明。現在、確実に把握できる竪穴住居跡は4棟である。

1期 丘陵頂部を環濠が圍繞している。この時期に埋没した竪穴住居跡は確認できない。

2～3期 環濠が埋没の過程で度々掘り直しされている。この時期に埋没した竪穴住居跡は確

認できない。

4 期 この頃、一気に環濠が埋没しており、丘陵部が新たな居住域として造成されている可能性があるが、現状では、当該期に埋没した竪穴住居跡は確認されていない。

5 期 2棟の竪穴住居跡(SI09・住居2)が確認されている。住居2には褐色系、SI09には黒色系土壌が堆積している。

6 期 1棟の竪穴住居跡(SI16)が確認されている。黒色系土壌が皿状に堆積している。

7～8期 この期間に埋没している竪穴住居跡は確認されていない。

9期以降 住居1が9期に廃絶しているが、その後、10期には竪穴住居跡に生じた窪地に土器が廃棄されている。なお、竪穴住居跡の検出面には割れた須恵器の壺が散乱しており、この竪穴住居跡が完全に埋没するまでには、かなりの時間を要していることがわかる。

環濠にともなう竪穴住居跡は確認されていない。当地区における居住の開始は、環濠が本来的な機能を失う4期以降と考えるのが妥当である。現状では、5期頃に開始された居住が10期まで継続している。その間、7・8期に埋没した竪穴住居跡が確認されていないこと、5期や6期の竪穴住居跡にも黒色系土壌の堆積が認められることから、居住は断続的なものであった可能性がある。

④……………妻木晩田遺跡の集落変遷

以上の分析の総括として、各時期に造営された墳丘墓群の位地を確認しながら、妻木晩田遺跡に重層する時期別の集落像を整理しておく。

妻木晩田遺跡では、1つの居住域に併存する可能性のある竪穴住居跡は3棟未満であることが多い(表1)。そこで、ここでは4棟以上が併存する可能性のある居住域を「他よりも規模の大きな居住域」とする。そして、他よりも規模の大きな居住域の在り方にもとづき、集落の形態を次に示すA・B・C型に分類する。

妻木晩田遺跡は複数の丘陵で構成されるが、その中の1つの丘陵に集落の核となりそうな居住域が顕在化した状態をA1型とする。さらに、その延長にあって、象徴的な施設を有すことで他とは明瞭に区別される中心性が特定の居住域に顕現した状態をA1型の発展型としてA2型とする。また、2つの丘陵に集落の核となりうる居住域が顕在化した状態をB型、そして、各居住域の居住規模が平準化した状態にあって中心性が不明瞭な状態をC型とする。

(1) 1期の妻木晩田遺跡

洞ノ原地区東側丘陵で墳丘墓の造営が開始される。松尾頭地区1区、妻木山地区3～6区東側、妻木山地区3～6区西側、妻木新山地区1S区北側、妻木新山地区2区東側、妻木新山地区2区中央、妻木新山地区3区など、少なくとも7地点に居住域が形成されている。妻木新山地区に最も多く居住域があり、集落の主体をなすものとみられる。他よりも少し規模の大きな居住域が妻木新山地区2区東側にある。妻木新山地区に集落の核となりうる居住域が顕在化した状態にあることからA1型を呈すと考えられる。

表1 妻木晩田遺跡の居住域と竪穴住居跡

時期	松尾頭 1区	松尾頭 3-6区 北	松尾頭 3-6区 南	妻木山 1区	妻木山 2区東	妻木山 2区中	妻木山 2区西	妻木山 3-6区 東	妻木山 3-6区 西	妻木山 7区	妻木新山 1S区 南	妻木新山 1S区 北	妻木新山 2区東	妻木新山 2区中	妻木新山 3区	松尾城 1区	松尾城 2区	松尾城 3-5区	洞ノ原 東	洞ノ原 西	竪穴 住居跡 総数
1	1 (1)	0	0	0	0	0	0	2 (2)	1 (1)	0	0	1 (1)	4 (4)	1 (1)	2 (2)	0	0	0	0	0	12
2	8 (4)	0	0	0	1 (1)	0	0	2 (2)	1 (1)	0	0	5 (4)	5 (5)	0	3 (3)	0	0	0	0	0	25
3	2 (1)	0	0	1 (1)	0	0	1 (1)	0	2 (2)	1 (1)	0	3 (3)	2 (2)	3 (2)	0	0	0	0	0	0	15
4	3 (3)	10 (8)	1 (1)	0	0	1 (1)	0	0	2 (2)	0	3 (3)	1 (1)	5 (4)	6 (5)	0	0	0	0	1 (1)	0	32
5	3 (3)	2 (2)	0	4 (4)	3 (3)	2 (2)	3 (3)	3 (3)	6 (6)	1 (1)	2 (2)	1 (1)	0	1 (1)	0	0	0	0	1 (1)	2 (2)	34
6	1 (1)	11 (6)	5 (3)	5 (4)	11 (6)	3 (2)	10 (7)	7 (5)	10 (5)	4 (2)	5 (3)	0	0	1 (1)	3 (3)	1 (1)	2 (2)	1 (1)	3 (3)	1 (1)	85
7	0	2 (2)	0	7 (6)	2 (2)	0	3 (3)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0	17
8	0	2 (2)	3 (3)	3 (3)	2 (2)	1 (1)	0	1 (1)	0	0	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	0	0	1 (1)	0	15
9	0	3 (3)	3 (3)	5 (3)	10 (5)	3 (3)	6 (3)	2 (2)	1 (1)	0	2 (2)	0	0	2 (2)	4 (4)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	46
10	2 (2)	2 (2)	3 (2)	6 (4)	4 (2)	1 (1)	1 (1)	0	0	0	3 (3)	0	1 (1)	2 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0	0	29

(数字)併存可能な竪穴住居数

黒ボクの堆積が確認できる居住域

(2) 2期の妻木晩田遺跡

洞ノ原地区東側丘陵に墳丘墓が造営されている。松尾頭地区1区、妻木山地区3～6区東側、妻木山地区3～6区西側、妻木新山地区1S区北側、妻木新山地区2区東側、妻木新山地区3区で2期から居住が続いている。また、新たに妻木山地区2区東側でも居住が開始され、1期同様、少なくとも7地点に居住域が認められる。

妻木新山地区2区東側では引き続き他よりも規模の大きな居住が続いている。妻木新山地区1S区北側と松尾頭地区1区でも居住規模が拡大が認められ、4・5棟の竪穴住居が同時併存可能な状態にある。妻木新山地区で居住規模が拡大する一方で、松尾頭地区にも新たな居住の主体が形成されつつあるとみられる。したがって、居住の主体を絞り込むことは難しく、妻木新山地区と松尾頭地区の両丘陵に有力な集団の形成がうかがわれる。2つの丘陵に集落の核となりうる居住域が顕在化した状態にあり、この時期にはB型を呈していると考えられよう。

(3) 3期の妻木晩田遺跡

洞ノ原地区東側丘陵に墳丘墓が造営されている。松尾頭地区1区、妻木山地区3～6区東側、妻木新山地区1S区西側、妻木新山地区2区東側に、居住が再開された妻木新山地区2区中央と、新たに開始された妻木山地区1区、妻木山地区2区西側、妻木山地区7区を加えて、8地点に居住域が認められる。居住域の数は微増傾向にある。

しかし、4棟以上の竪穴住居が併存しそうな居住域は見えなくなり、いずれも1～3棟の竪穴住居で構成される小規模な居住域ばかりとなっている。1期以来、居住域が展開している妻木新山地区が集落の中心性を保持していると推測するが、各居住域の居住規模は平準化しており、C型を呈すとみられる。

(4) 4期の妻木晩田遺跡

洞ノ原地区東側丘陵における墳丘墓の造営が終わり、仙谷地区に新たな墳墓群が形成される。松尾頭地区1区、妻木山地区3～6区西側、妻木新山地区1S区北側、妻木新山地区2区東側、妻木新山地区2区中央に、新たに居住が開始された松尾頭地区3～6区北側、松尾頭地区3～6区南側、妻木山地区2区中央、妻木新山地区1S区南側、洞ノ原地区東側丘陵が加わって、10地点に居住域が認められる。

このうち、松尾頭地区3～6区北側、妻木新山地区2区東側、妻木新山地区2区中央では他よりも規模の大きな居住が行われていた様子がうかがわれる。松尾頭地区3～6区北側には3期まで居住が認められないが、4期にまとまった規模の居住域が形成されている。松尾頭地区に居住域が増加しており、再び、妻木新山地区と松尾頭地区の2つの丘陵に居住の核となりうる集団が展開している。

したがって、当該期の集落類型はB型に相当するが、妻木新山地区の拠点性がこの時期を最後に失われていくことから、妻木新山地区と松尾頭地区に展開する集団規模は均衡状態を経て、その後、逆転していることが予想される。1期から中心的な居住域として継続してきた妻木新山地区から、後発的な松尾頭地区へ中心性が移動することで、集落の形態はB型からA1型に変容していると考えたい。こうした動きは墳墓群の変遷とも連動したものと推測する。

(5) 5期の妻木晩田遺跡

仙谷地区に墳丘墓が造営されている。松尾頭地区1区、松尾頭地区3～6区北、妻木山地区2区中央、妻木山地区3～6区西側、妻木新山地区1S区南側、妻木新山地区1S区北側、妻木新山地区2区中央、洞ノ原地区東側丘陵に、居住が再開された妻木山地区1区、妻木山地区2区東側、妻木山地区2区西側、妻木山地区3～6区東側、妻木山地区7区、新たに開始された洞ノ原地区西側丘陵が加わり、14地点に居住域が確認できる。居住域の増加が著しい。

ところが、妻木新山地区に展開する各居住域は規模を軒並み縮小しており、1期から他よりも規模の大きな居住が継続していた妻木新山地区2区東側では、新たな竪穴住居跡の埋没が確認できなくなる。4期に埋没した竪穴住居跡の中に黒色系土壌をとまなうものもあり、居住地としては利用されていないとみられる。なお、居住規模の縮小は松尾頭地区にも見受けられる。

こうした動きに対して、注目されるのが妻木山地区における居住域の増加である。妻木山地区1区や妻木山地区3～6区西側では他よりも規模の大きな居住が行われていた可能性が高い。集落規模の拡大は新たに妻木山地区を核に顕在化しており、当該期の集落類型はA1型に相当する。

(6) 6期の妻木晩田遺跡

仙谷地区に墳丘墓が造営されている。松尾頭地区1区、松尾頭地区3～6区北、妻木山地区1区、妻木山地区2区東側、妻木山地区2区中央、妻木山地区2区西側、妻木山地区3～6区東側、妻木山地区3～6区西側、妻木山地区7区、妻木新山地区1S区南側、妻木新山地区2区中央、洞ノ原地区東側丘陵、洞ノ原地区西側丘陵に、居住が再開された松尾頭地区3～6区南側、妻木新山地区3区、新たに開始された松尾城地区1区、松尾城地区2区、松尾城地区3～5区が加わり、18地点に居住域が確認できる。妻木晩田遺跡に形成された複合型集落の変遷史上の最盛期を迎え

る。

松尾頭地区、妻木山地区に展開する多くの居住域に規模の拡大がうかがわれる。松尾頭地区3～6区北側、妻木山地区1区、妻木山地区2区東側、妻木山地区2区西側、妻木山地区3～6区東側、妻木山地区3～6区西側で、他よりも規模の大きな居住が行われていた可能性が高い。妻木新山地区では妻木新山地区1S区南側、妻木新山地区2区中央で居住が継続しており、妻木新山地区3区でも居住が再開するが、集落の中心性は既に松尾頭地区と妻木新山地区に移動しているようだ。

なお、他よりも規模の大きな居住域が最も多くあるのは妻木山地区だが、松尾頭地区には象徴的な施設をとまなう居住域が存在している。庇付の大形掘立柱建物跡を保有する松尾頭地区3～6区北側を占有した集団は、最盛期の妻木晩田遺跡を構成する諸集団を取り結ぶ紐帯として機能していた可能性がある。当該期の集落形態はA1型の延長にあって、複数の居住域がそれぞれ規模を拡大する中で、象徴的な施設を有することで他と明瞭に区別される中心性が特定の居住域に顕現しており、A2型に分類される。

また、この時期には妻木晩田遺跡の最高所にある松尾城地区に居住域が形成されている。急峻で平坦な地形も少ないことから、これまで積極的に利用されていないが、人口の増加、集団規模の拡大にともない、新たな居住地として開発の対象となったものと考えられる。

(7) 7期の妻木晩田遺跡

仙谷地区で墳丘墓の造営が終わる。その後の墳丘墓についてはしばらく判然としない。松尾頭地区3～6区北側、妻木山地区1区、妻木山地区2区東側、妻木山地区2区西側、松尾城地区2区、松尾城地区3～5区、洞ノ原地区東側丘陵に居住が認められる。居住域は7地点に減少しており、集落規模が急激に縮小している。

7期に断絶が推測されるほぼ全ての居住域で、6期に埋没した竪穴住居跡の上層に黒色系土壌が認められる。一方、6期から7期に居住が継続している妻木山地区1区には、6期に埋没した竪穴住居跡の中に黒色系土壌が堆積したものはない。黒色系土壌の堆積は居住の断絶と相関的な関係にあり、人為の関与が無くなるか、または希薄な状態になったことを示している⁽¹³⁾。

また、6期から継続する居住域も規模を縮小しており、6期に庇付大型掘立柱建物跡を有すとみられる松尾頭地区3～6区北側も居住規模が縮小している。妻木新山地区では、ついに居住域が確認できなくなる。ただ1つ、妻木山地区1区だけが居住の規模を拡大しており、集落の形態は妻木山地区を拠点とするA1型と考えられる。

(8) 8期の妻木晩田遺跡

当該期に造営された墳丘墓は確認されていない。松尾頭地区3～6区北、妻木山地区1区、妻木山地区2区東側、洞ノ原地区東側丘陵に、居住が再開する松尾頭地区3～6区南側、妻木山地区2区中央、妻木山地区3～6区東側、妻木新山地区3区、松尾城地区1区を加えた、9地点に居住域が確認できる。ただし、いずれも3棟以内の竪穴住居で構成される小規模な居住であったと考えられ、規模の大きな居住域はどこにも認められない。居住域の数はわずかに回復傾向にあるが、各居

住域の規模は平準化している。中心性が希薄な状態にあり、集落の形態はC型を呈している。

(9) 9期の妻木晩田遺跡

7期以降、居住に利用されていない松尾頭地区1区に2基の墳丘墓が造営される。松尾頭地区3～6区北側、松尾頭地区3～6区南側、妻木山地区1区、妻木山地区2区東側、妻木山地区2区中央、妻木山地区3～6区東側、妻木新山地区3区、松尾城地区1区、洞ノ原地区東側丘陵に、居住を再開した妻木山地区2区西側、妻木山地区3～6区西側、妻木新山地区1S区南側、妻木新山地区2区中央、松尾城地区2区、松尾城地区3～5区、洞ノ原西側丘陵が加わり、16地点に居住域が確認できる。

7期に断絶の認められる各地点で居住が再開されており、集落規模は5・6期に匹敵する状態にまで回復をしている。妻木山地区2区東側、妻木新山地区3区では他よりも規模の大きな居住が行われていた可能性がある。集落形態はB型とも考えられるが、妻木山地区には最も多く居住域が展開していることから、妻木山地区に中心性があるとみて、A1型を呈すとみたい。

(10) 10期の妻木晩田遺跡

再び、墳丘墓の系譜がたどれなくなる。松尾頭地区3～6区北側、松尾頭地区3～6区南側、妻木山地区1区、妻木山地区2区東側、妻木山地区2区中央、妻木山地区2区西側、妻木新山地区1S区南側、妻木新山地区2区中央、妻木新山地区3区、松尾城地区1区、松尾城地区2区、松尾城地区3～5区に、居住が再開する松尾頭地区1区、妻木新山地区2区東側が加わり、14地点に居住域が展開している。

妻木山地区で居住域が減少するのに対して、妻木新山地区には居住域が増加している。ただし、妻木山地区2区東側には4棟以上の竪穴住居が同時併存可能な位置にあり、他よりも少し規模の大きな居住が行われていた可能性がある。9期に続いて、妻木山地区に中心性が維持されているよう⁽¹⁴⁾で、集落の形態はA1型と考えられよう。

集落の全体の規模は9期の状態をほぼ維持しているが、10期に後出する竪穴住居跡は皆無である。10期に埋没した竪穴住居跡を最後に後期初頭にはじまった複合型集落の歴史は終焉している。9期や10期に埋没した竪穴住居跡には黒色系土壌をとまなうものが多く認められるが、これは各居住域が草原植生に覆われ、その後しばらくの間、人の関与が希薄な状態が続いたことを示唆している。

⑤……………まとめ－妻木晩田遺跡の集落像素描－

(1) 成立期－1～3期－洞ノ原墳墓群の時代

1期には複数の居住域が丘陵上に現れ、洞ノ原墳墓群の造営が開始される。妻木新山地区に集落の中心性が顕在化しており、洞ノ原墳墓群には同墳墓群内で最大規模の洞ノ原1・2号墓が墓域の中心に築造される(図45-1期)。首長層を擁する有力な集団を紐帯にA1型の集落が形成されていたと考えたい。ただし、居住規模に大小はあるが、各居住域間に目立った違いは見いだせない。「紐

帯となる集団」とそれに「連なる集団」の差は居住域には明瞭に表れていないようにみえる。

2期なると妻木新山地区と松尾頭地区に他よりも少し規模の大きな居住域が形成されており、集落形態はB型に変容している(図45-2期)。妻木新山地区に対峙するように松尾頭地区にも新たな勢力が台頭する様子が見られる。

3期には、1期から集落の中核を担っていたと推測される妻木新山地区に展開する各居住域の規模が縮小し、遺跡全体で集落の中心性が希薄になる。各居住域の規模が平準化し、集落の形態はC型へと移行している(図45-3期)。なお、平準化によって、1期に形成された集団関係は解消されているようにも見えるが、洞ノ原墳墓群における墳丘墓の築造は継続しており、墳丘墓に埋葬される首長層を紐帯とする集団社会の枠組みは継承されていると考えたい。

集落の形態がA1型→B型→C型へと変容する状況は墳丘墓の在り方にも表れている。洞ノ原墳墓群では、墳墓群造営の契機となった1・2号墓を取り巻くように、2～3期に築造された中小規模の墳丘墓が環状に分布している。後出の墳丘墓はいずれも1・2号墓よりも小さく、立地や規模に個々の独立性を顕在化させることなく1・2号墓に連なっている。諸集団の規模は平準化しながらも、1期に形成された枠組みによって集団関係が保たれている様子が、始祖的な1・2号墓を核とする洞ノ原墳墓群の求心的な墳丘墓の配置に反映されている。

(2) 転換期—4期—洞ノ原墳墓群から仙谷墳墓群へ

成立期には居住域の数が7→7→8地点と推移しており、集落規模に大きな変化は認められない。ところが、4期になると集落規模は拡大する傾向にあり、居住域の数は10地点に増加している。妻木新山地区と松尾頭地区に少し規模の大きな居住域があることから、集落の形態は再びB型、そしてA1型に移行すると考えられる(図45-4期)。3期に平準化した諸集団の中に、再び核となる集団が台頭する状況を示すものだろう。

また、洞ノ原地区における墳丘墓の築造が終わり、新たに仙谷地区で仙谷墳墓群の造営がはじまる。仙谷墳墓群では、ほぼ同規模の仙谷2・3・5号墓が尾根上に列をなすように配置されている。地形的な制約もあろうが、求心構造にある洞ノ原墳墓群とは異なる原理で墳丘墓が築造されていると考えたい。墓制の変容、集落規模に拡大の兆しがうかがわれる4期は、妻木晩田遺跡の集落変遷史上における転換期と位置づけられよう⁽¹⁵⁾。洞ノ原墳墓群は妻木晩田遺跡における複合型集落の成立を主導してきた集団を象徴しており、仙谷墳墓群への移行は複合型集落の成立期に形成され、3期まで維持されてきた集団社会の枠組みの変更を意味するものだろう。

(3) 最盛期—5・6期—仙谷墳墓群の時代

5期には14地点に居住域が展開しており、集落規模の拡大が著しい。最もたくさんの居住域が集まる妻木山地区に他よりも規模の大きな居住域が含まれており、集落の形態はA1型に移行している(図45-5期)。妻木新山地区に展開する居住域の規模は縮小傾向にあり、妻木山地区を拠点に据えた集落が再編されていると考えたい。

6期には集落の規模がさらに拡大する。居住域の数は少なくとも18地点を数え、大山北西麓で最大規模の複合型集落を形成するにいたる。未利用地であった松尾城地区にも居住域が現れ、人口

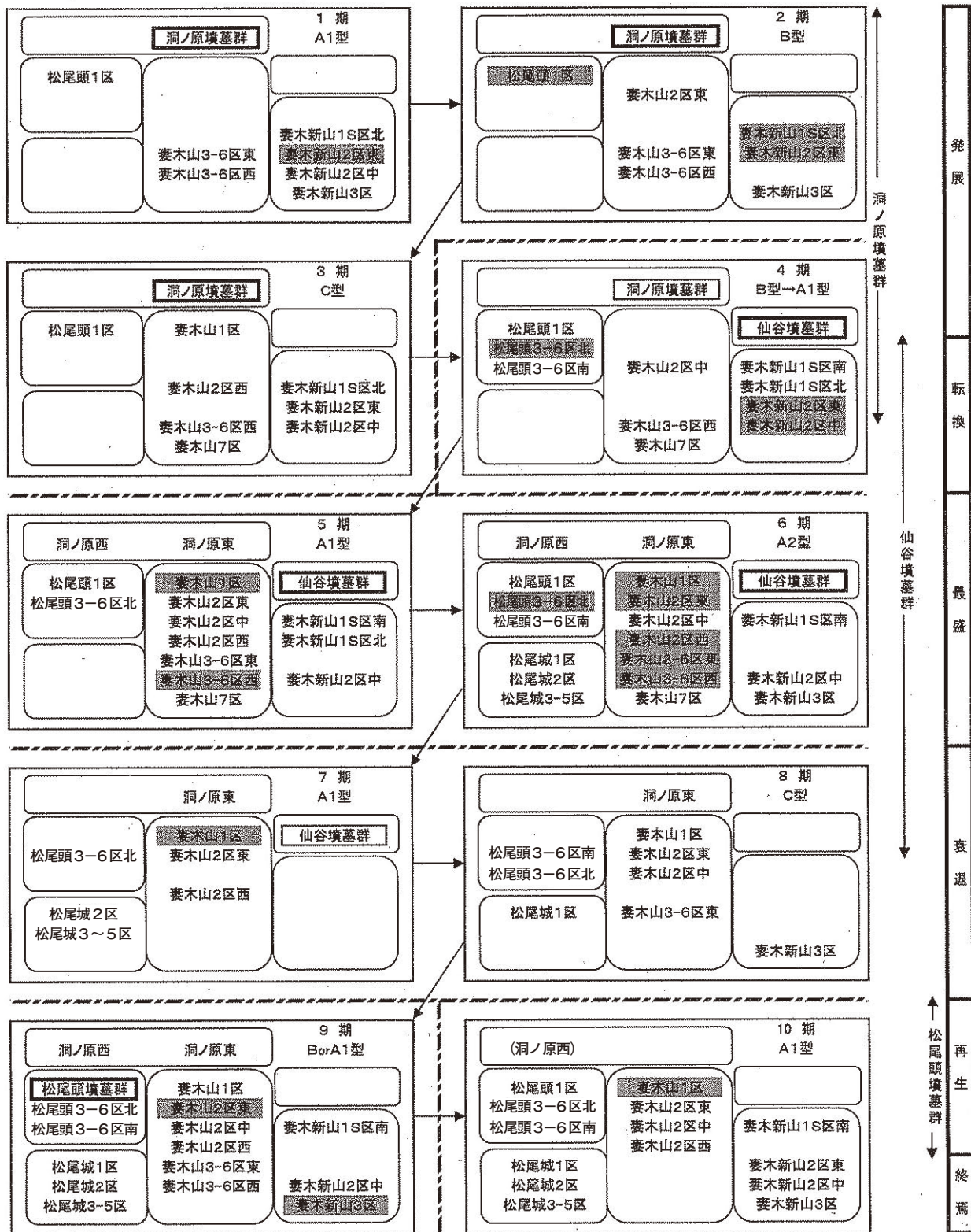


図45 妻木晩田遺跡の集落構造(模式図)

の増加にともない集落領域が拡大を指向している。飽和した人口が、外に流出せずに、条件の悪い場所を開発してまでも妻木晩田遺跡内での生活に執着しているのは、地域最大規模に成長した集団を維持する紐帯の求心力の強さを示すものであろう。

なお、規模の大きな居住域は妻木山地区に最も集中するが(図45-6期)、松尾頭地区3～6区北側には庇付の大形掘立柱建物跡が保有されており、居住規模だけでなく明らかに他とは区別される属性を備えた集団が顕在化している。集落の形態はA1型の発展型でA2型を呈す。墓域は仙谷地区にあり、遺跡最大の四隅突出型墳丘墓と目される仙谷1号墓がこの頃に築造されたものと想定したい⁽¹⁶⁾。仙谷2・3・5号墓が列状にならぶ丘陵とは、谷を介して別丘陵に単独で築造されている。洞ノ原墳墓群の求心構造、そして仙谷2・3・5号墓の列状配置と変遷し、明確に独立性を表した墳丘墓の築造は画期的で、最盛期の墳丘墓にふさわしい。

(4) 衰退期—7・8期—墳丘墓空白の時代

ところが、7期になると、居住域の数が激減する。黒色系土壌の堆積によって、居住の断絶がうかがわれる居住域も多い。居住が確認できるのは7地点にすぎない。居住域の減少によって集落の中心性は希薄になるが、7期には、かろうじて妻木山地区に中心性が保たれており、集落形態はA1型を呈す(第45図7期)。続く8期には、居住域の数は微増するが、規模は平準化しており、再び集落形態は中心性が不明瞭なC型に変容している(第45図8期)。

仙谷地区における墳丘墓の築造は7期を最後に途絶え、その後、9期に松尾頭墳墓群が造営されるまでの間、遺跡内で墳丘墓の系譜がたどれなくなる。この空白を埋める墳丘墓の発見を期待しているが、既に丘陵頂部はかなりの範囲が調査または踏査されており、墳丘墓が存在しない可能性もある。いずれにせよ、居住域の減少と軌を一にして、仙谷墳墓群の造営が終了することは、最盛期の妻木晩田遺跡に形成された首長層を紐帯とする強力な社会的枠組が解消されたことを象徴している。集落規模が縮小した妻木晩田遺跡では、この頃に、墳丘墓を造営する力を失っている可能性もある。最盛期の複合型集落の中心に存在した首長権は決して固定的ではなく、脆弱で流動的なものであったと考えられよう。

なお、この頃、周辺に集落規模を拡大している遺跡は明らかでないから、妻木晩田遺跡の集落規模縮小を移動をともなう人口の減少とは考えにくい。大山北西麓地域全体で遺跡が減少していることから(第1図下図VI-2期)、問題は妻木晩田遺跡にとどまらない、自然的要因ないし社会的要因による人口の減少も視野にいれた地域レベルでの検討が必要である。

(5) 再生期—9期—松尾頭墳丘墓の時代—

再び居住域の数が増加に転じる。少なくとも16地点に居住域が確認できる。集落規模は最盛期に近い状態に回復している。集落規模の回復を象徴するように松尾頭墳墓群が造営される。

相対的に規模の大きな居住域が妻木山地区と妻木新山地区にあることから、集落形態はB型のようにもみえるが、最も多くの居住域が展開する妻木山地区に中心性がうかがわれることからA1型と考えるのがよからう(図45-9期)。ただし、特定の居住域が明瞭に突出した状態にはなく、特別な施設を保有したり、絶対的な中心性を示す居住域は認められない。墳墓の造営も再開し、見た

目に集落規模は回復したが、最盛期の形を取り戻してはいない。

(6) 終焉期— 10 期—

9 期から 10 期にかけて集落規模はほぼ維持された状態で推移している。9 期同様に妻木山地区に中心性が認められ、集落の形態は A 1 類に分類される(図 45-10 期)。既に遺跡内で墳丘墓は築造されていない可能性がある。⁽¹⁷⁾ 10 期に埋没した竪穴住居を最後に集落の営みは途絶えるが、9 期から 10 期にかけて集落規模の縮小が緩やかなだけに、その終焉は極めてドラステックで、移動をともしなう集落の解体を想定しても大過なからう。妻木晩田遺跡に営まれた最後の複合型集落(A 1 型)の解体が、この後の地域の動向と、どのような文脈で繋がっていくのかは、今後の大きな課題である。

おわりに

大山北西麓における大規模な弥生集落の成立にいたる動態を概観したのち、弥生時代後期に形成された複合型集落が古墳時代前期に解消されるまでを都合 10 期に分けて、妻木晩田遺跡を構成する各居住域の変遷を検討した。そのさい、竪穴住居跡に堆積する黒色系土壤に着目して、居住の継続と断絶について私見を述べた。その結果、長期に継続しているとみられる居住域の中にも途中で断絶期間が介在しているとみられるものが確認された。また、複数の居住域の在り方から、1 期から 10 期を通じて、妻木晩田遺跡が成立→転換→最盛→衰退→再生→終焉と変容を重ねながら変遷する様子を素描し、複合型集落を維持するための社会的枠組みや、その紐帯となる有力集団の位置づけが、妻木晩田遺跡においては決して固定的なものでなかったと考えた。特に 7 期の集落規模縮小には大きな画気を見いだすことができる。再び 8 期以降、集落規模が拡大しており、一見、6 期以前の状態を取り戻しているかのようにみえるが、その後は、大規模に墳丘墓が造営されることがなくなるなど、質的に変容が生じていた可能性が高い。

ただし、ここで検討したことは、竪穴住居跡の消長にみる複合型集落の一面的な様相にすぎない。編年試案を分析の時間軸としたが、今後の編年的研究の進展によっては、各竪穴住居跡の時間的位置づけにも変更もあろうし、分析の切り口が変われば、また少し違った集落像も復元可能であろう。したがって、今後、集落像の復元的研究をより有意義な検討の俎上にのせていくためには、遺跡が内包する情報を整理しながら、建設的な議論の下敷きとなる基盤整備が必要不可欠である。

なお、掘立柱建物跡や貯蔵穴など、本来は竪穴住居跡とともに居住域を構成する重要な要素について、ここで全く言及していない。貯蔵施設の保有形態は複合型集落を構成する諸集団の内実を知る上で重要である。また、今後の検討に必要と考えた基礎作業に終始したため、この度の検討で得られた集落変遷や集落像を先学による既存の研究と突き合わせすることができなかつた。今回の作業に派生する墳墓群、竪穴住居跡の重複・建て替え・拡張、そして居住域の空間構造に関する検討も含め、機会をあらため不備・不足を補いたい。御教示、御批判をいただければ幸いである。

註

(1)——広義で使用される大規模集落には、大規模な集落跡と大規模集落が混在していることがままある。大規模集落跡は、遺構の累積が、ある時間的、地域的枠組みの中で相対的に大規模と判断されるもの。一方、大規模集落は、同時に機能している遺構の組成や広がり、ある時間的、地域的枠組みの中で相対的に大規模と判断されるものであると理解したい。妻木晩田遺跡は、山陰地方の弥生時代後半期の集落としては、最も多くの遺構が広範囲に確認できる遺跡として大規模集落跡であり、また、ある一時的には山陰地方を代表する大規模集落であった可能性が指摘できるものである。なお、弥生時代後期以降の大規模集落については、複数の居住の単位が複合的に集落を形成している状態(複合型集落)にあることを必要条件として、集住や複合の度合いによって大別されるものと考え、現実には集落の全域が明らかになっている事例が希少で、大別の基準を適切に設けることが困難である。

(2)——詳細は拙稿[濱田 2006a・b]を参照されたい。

(3)——比高差は生産域を仮定した沖積地を起点に計測した暫定的な数値である。細別の基準は、集計結果に表れた比高のまとまりを考慮しているが、高所立地への傾斜をわかりやすく捉えるための作業上の便宜的な基準と考えられたい。

(4)——I-4期には、低位な丘陵上に環濠をともなう遺跡が散見される。この頃、弥生時代に特徴的な属性を備えた集落の体裁が整うものと考えられる。なお、当該地域における環濠の在り方は多様で、居住域を圍繞するもの以外に、貯蔵穴や空閑地を囲うものも認められる[濱田 2003]。低所Bや高所Aに設けられた環濠はいずれも貯蔵穴を囲うものや、空閑地を囲うものである。

(5)——作業上、一定の領域に同時併存する可能性のある数棟の堅穴住居の組み合わせを「単位集団」[近藤 1959]、その集合体については、若林邦彦の作業概念を援用して複合型集落と呼ぶ[若林 2001・2006]。なお、本稿では、若林が近畿地方の事例の中で抽出する基礎集団については言及しない。

(6)——近年、これまでに刊行・発表されている報告書や研究成果を高田健一がまとめているので参考にされたい[高田 2006]。

(7)——洞ノ原地区西側丘陵にある住居2[濱田 2003]、洞ノ原地区東側丘陵にあるDH8号住居に周堤の痕跡が残る。概ね2~3mの幅をもつものと考えられる。

(8)——コザンコウ遺跡(倉吉市)では、後期後葉に同時併存したとみられる3棟の堅穴住居跡がある。個々の堅穴住居跡には掘立柱建物跡と貯蔵穴とみられる土坑がともない、堅穴住居跡はそれぞれ20~30mの距離をおいて分布している。当該地域における後期の標準的な居住

域の在り方を示す一例であるが、通常、堅穴住居は周堤を接するような近距離で併存することはないと考える。

(9)——妻木晩田遺跡で最も多くの堅穴住居跡が調査されている第1次調査調査の報告書[松本他 2000]には、堅穴住居跡に堆積する黒褐色系土壌について、その質感として「しまった」ないし「しまりがある」と表現されているものなど、様々な表記がされている。複数の担当者が堅穴住居跡の調査成果を記述しているため、表記が統一されていないのである。ただし、図版に写真が掲載されているものを見る限り、黒ボクなど植物の腐食をとともなうとみられる黒色系土壌については表記の冒頭に「黒」が冠されており、褐色系土壌と区別されているように思われる。ここでは第1次調査報告書に記載された「黒」を冠した堆積を黒ボクないし黒ボクに由来する土壌など、植物の腐食の関与によって黒色を呈す土壌のことを指すと判断する。なお、平成12年から16年に行われた調査については、筆者も発掘調査時に堆積を確認しており、ここで黒色系土壌と記すものは、大江山麓の黒ボクとされる土壌に由来する堆積である。

(10)——Ⅳ期後半の集落遺跡である長山馬籠遺跡(西伯郡伯耆町)では、丹塗り土器をとともなう土坑と重複するように庇付掘立柱建物跡が検出されている[益田 1989]。この建物跡の近くには、1棟の堅穴住居跡があり、ここにも丹塗り土器などが廃棄されている。松尾頭地区3~6区北側にもSB41に唯一近接した位置にある堅穴住居跡(SI53)には5~6期にかけて土器類が廃棄が行われている。廃棄行為をとともなう堅穴住居跡と大形掘立柱建物跡の組み合わせは長山馬籠遺跡例に近似している。

(11)——松尾頭地区3~6区北側にある大型の掘立柱建物跡を首長の家屋とみる見解もある[宮本 1999]。なお、松尾頭地区3~6区北側には、SB41以外にも、梁間3間×桁行5間の大型掘立柱建物跡(SB53)がある。所属時期は判然としないが、こうした規模の建物跡が複数あることは、当地区の性格を考える上でも重要である。

(12)——松尾頭地区3~6区北側にも黒色系土壌をとともなう9・10期の堅穴住居跡がある。黒色系土壌が空白の期間を示唆するものならば、この2つの地区にみられる9・10期の黒色系土壌は、9~10期にかけて隣り合う地点を交互に移動しながら、居住が継続していたことを示す可能性もあろう。

(13)——なお、人為の関与が想定される状態としてカヤ場などが想定できる。この場合には、人為的に草原植生が維持されることで、黒色系土壌が生成されやすい環境が整うと考えられる。したがって、人為的に管理されることで、黒色系土壌の堆積しやすい環境が形成される可能性も考慮する必要がある。

(14)——ただし、近年の調査によって、松尾頭地区に

9・10期頃に埋没した竪穴住居跡が多く確認されており、今後の調査結果をまって判断したい。

(15)——洞ノ原地区西側丘陵には1期に円形の環濠が構築されている。この環濠は空閑地を囲繞している可能性が高く、洞ノ原墳墓群とセット関係にあると考えられるものであり、成立期の妻木晩田遺跡を象徴する空間を形成している。ところが、洞ノ原墳墓群の消長と足並みを揃えるように埋没が進み、4期には既に環濠の機能は概ね失われた状態にある。このことも、転換期の妻木晩田遺跡に視認できる集落構造の大きな変化である[濱田編2003・濱田他2005]。

(16)——部分的にトレンチ調査が行われているが、出土した土器が少なく、造営時期を特定するには至っていない。少なくとも仙谷2・3・5号墓よりも古く遡ることはないと考えられる。墳丘の規模、単独で独立した丘陵に立地することから、6期に造営された可能性があるものと考えている。

(17)——遺跡内では系譜をたどることができないが、妻木晩田遺跡から約1kmほど離れた場所にある徳楽方墳が10期頃に築造された可能性が高い。なお、徳楽方墳は四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されている[松井1999]。

参考文献

- 青木遺跡発掘調査団編 1976～1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』鳥取県教育委員会
 足立克己他編 1984『高広遺跡発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
 家塚英詞他編 2000『越敷山遺跡群 荻名第3遺跡』鳥取県教育文化財団
 岩田文章他編 1995『百塚遺跡群Ⅳ』淀江町教育委員会
 岩田文章他編 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町教育委員会
 君島俊行編 2008『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書－第16・19次発掘調査－』鳥取県教育委員会
 久馬一剛 2005『土とは何だろうか?』京都大学学術出版会
 小林達雄 2001「考古学と土壌」『土壌地理学』古今書院
 近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻第1号
 佐古和枝 1999「鳥取県妻木晩田遺跡」『邪馬台国時代の国々』季刊考古学別冊9, 雄山閣
 佐古和枝 2003「妻木晩田遺跡の理解のための基礎作業」『考古学を学ぶ(Ⅱ)』同志社大学考古学シリーズⅧ, 同志社大学考古学シリーズ, 同志社大学考古学シリーズ刊行会
 佐原真 1999「卑弥呼は竪穴住居に住んでいた」『海と山の王国－妻木晩田遺跡が問いかけるもの－』, 「海と山の王国」刊行会
 下江健太他編 2003『橋本遺跡群』鳥取県教育文化財団
 高尾浩司 2006「鉄器保有状況にみる最盛期の集落構造－居住単位間の比較から－」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』鳥取県教育委員会
 高田健一 2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』鳥取県教育委員会
 高田健一 2005「鳥取県西部における弥生時代後期の集落像」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退官記念－』大阪大学文学部考古学研究室
 高田健一 2006『妻木晩田遺跡 甦る山陰弥生集落の大景観』同成社
 寺澤薫 2003『三井岡原遺跡－弥生時代後期低丘陵性集落の調査－』榎原考古学研究所
 仲田茂司 1995『百塚第7遺跡(8区)』鳥取県教育文化財団
 中原斉他 1994『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会
 中森祥・濱田竜彦他編 1998『古市遺跡群Ⅰ』鳥取県教育文化財団
 中森祥他編 2000『古市遺跡群Ⅲ』鳥取県教育文化財団
 丹羽野裕 2002「山陰地方の高地性集落－塩津丘陵遺跡群を中心に－」『月刊文化財』第470号, 第一法規
 濱田竜彦編 1999『古市遺跡群Ⅱ』鳥取県教育文化財団
 濱田竜彦 2002「鳥取県西部地域の弥生時代後期土器－壺と甕を中心に－」『立命館大学考古学論集Ⅲ』, 立命館大学考古学論集刊行会
 濱田竜彦編 2003a『史跡妻木晩田遺跡第4次調査報告書－洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査－』鳥取県教育委員会
 濱田竜彦 2003b「伯耆地域における弥生時代前半期の環濠を伴う遺跡について」『関西大学考古学研究室開設50周年記念 考古学論叢』, 関西大学考古学研究室
 濱田竜彦 2004「弥生時代の祭場 中・四国－日本海沿岸地域を中心に－」『季刊考古学』第86号, 雄山閣

-
- 濱田竜彦 2006a 「妻木晩田遺跡の形成とその背景に関する一考察」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2006b 「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態－大山山麓・中海南東岸地域を中心に－」『古代文化』第58巻第Ⅱ号, 古代学協会
- 濱田竜彦・河合章行他 2004 「妻木山地区谷部の発掘調査報告－妻木晩田遺跡第10次調査－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2003』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦・高田健一編 2005 『日本海をのぞむ弥生の国々－環濠から見える弥生社会とは－』編集工房遊
- 平木裕子編 1996 『錦町第1遺跡』米子市教育文化事業団
- 藤田憲司 2005 「妻木晩田集落試論」『考古論集－川越哲志先生退官記念論集－』川越哲志先生退官記念事業会
- 馬路晃祥編 2006 『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』
- 馬路後葉 2006 「竪穴住居跡からみた妻木晩田遺跡の集落構造」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』鳥取県教育委員会
- 馬路晃祥・濱田竜彦 2003 「妻木晩田遺跡における竪穴住居跡調査方針（案）」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』鳥取県教育委員会
- 益田晃 1989 『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会
- 松井潔 1999 「因幡・伯耆・出雲の墓制」『季刊考古学』第67号, 雄山閣
- 松本哲他編 2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅳ』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 宮本長二郎 1999 「妻木晩田遺跡の建物」『海と山の王国－妻木晩田遺跡が問いかけるもの－』, 「海と山の王国」刊行会
- 中原斉他 1994 『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会
- 湯村功他編 1995 『米子城跡6遺跡』鳥取県教育文化財団
- 湯村功他編 1997 『米子城跡21遺跡』鳥取県教育文化財団
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第12号
- 若林邦彦 2006 「丘陵上弥生集落と複合社会の拡大」『古代文化』第58巻第Ⅱ巻, 古代学協会

(鳥取県教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理, 2008年12月5日審査終了)

The Image of the Yayoi Settlement in San'in

HAMADA Tatsuhiko

Archaeological sites dating from the end of Early Yayoi increase in number in hilly areas at the foot of Mount Daisen, with more sites gradually emerging from Middle through Late Yayoi. Large settlements like that found at the Mukibanda Site were formed in the hills in Late Yayoi. However, settlements disappeared completely from hillsides from around the time of the construction of large keyhole-shaped tombs. After this time there was little active habitation in the hills. Consequently, even though after the Yayoi period at the foot of Mount Daisen there was some terracing and disturbance, such as the construction of kofun and the formation of small settlements and fields, there was no large-scale alteration to the land. The increase in instances of studies over a wide area in recent years has yielded many sites with favorable conditions for studying details of Yayoi settlements. Through a study centering on the remains of pit dwellings thought to have been dwellings, this paper reconstructs the changes to settlements and paints a picture of settlements based on a study of the Mukibanda Site known to be the remains of a large settlement representative of settlements in the San'in region in the latter half of the Yayoi period.

The Mukibanda Site is the location of a compound-type settlement made up of a number of small groups that existed for a long time. By subdividing pottery from Late through Final Yayoi and reviewing the changes in inhabited zones while examining in detail the burial of the remains of pit dwellings, the author found that the settlements that existed at the Mukibanda Site constantly changed in size and shape and that these changes were not uniform. Although there is no mistaking that a number of small groups lived at the site, the author identified multiple inhabited zones that may have become disused at some point or other. Therefore, we may conclude that there were also times when a number of small groups did not live together but were scattered among the hills. There is also a site with dwellings that fell into disuse that dates from the first half of Final Yayoi, which followed the end of Late Yayoi, the period when the settlement is believed to have reached its height of prosperity. It appears that in the latter half of Final Yayoi settlements closely resembling those that existed before the end of Late Yayoi were reprised. However, because after this point there was no construction of large mound tombs, we may conclude that the groups underwent qualitative transformation in the first half of Final Yayoi.

Key words : Daisen, Mukibanda Site, Large settlement, compound-type settlement, remain of pit dwelling, blackish soil
